

築館町文化財調査報告書第16集

嘉 倉 貝 塚

—平成13・14年度重要遺跡範囲確認調査報告書—

平成15年3月

築館町教育委員会

築館町文化財調査報告書第16集

嘉 倉 貝 塚

—平成13・14年度重要遺跡範囲確認調査報告書—

平成15年3月

築館町教育委員会

はじめに

嘉倉貝塚は、迫川流域において最も内陸に位置する縄文時代後期から晩期の貝塚として、大正時代から知られておりました。しかし、遺跡周辺において河川の堤防工事を行うため、遺跡の南西部を大規模に掘削され、貝塚の主体部の大部分が破壊されました。さらには、開田の工事のため遺跡全体で削平されてしまいました。このことから遺跡全体については、大部分が破壊されたものと考えられておりました。この時に発見された遺物は『築館町嘉倉貝塚概報』として報告されております。

このような状況の中で、みやぎ県北高速幹線道路予定地が遺跡範囲内に計画されました。平成11・12年度の2ヶ年間、宮城県教育委員会によって発掘調査が実施された結果、この周辺における縄文時代の拠点集落で極めて重要な遺跡であることがわかりました。これらの成果を受けて、本町教育委員会が平成13・14年度の2ヶ年間、宮城県教育委員会の協力を得まして、発掘調査を実施してまいりました。

発掘調査の結果、遺跡の範囲やこれまでの調査を裏付ける内容を得ることができました。また、これまで我々が想像していた以上に、遺構が残っており、改めて本遺跡の重要性を認識いたしました。

最後になりましたが、本調査を実施するにあたり、協力していただきました土地所有者の方々、東北大学大学院医学系研究科人体構造学講座の方々には深く感謝申し上げます。また、調査を指導していただきました、宮城県教育庁文化財保護課の皆様にも感謝申し上げます。

平成15年3月

築館町教育委員会

教育長 久我 竹五郎

目 次

例 言

第一章 はじめに

- I. 遺跡の位置と環境..... 1
- II. 嘉倉貝塚と周辺の遺跡について..... 1

第二章 調査に至る経過と調査の目的・方法

- I. 調査に至る経過..... 3
- II. 調査の目的・方法..... 3

第三章 発掘調査の成果

- I. 基本層序..... 7
- II. 発見した遺構・遺物..... 8

第四章 考 察

- I. 遺構の時期と特徴..... 63
- II. 調査成果とまとめ..... 68
- 註、引用・参考文献..... 70

写真図版

付 章

①嘉倉貝塚川土人骨に関する食性復元と放射性炭素年代測定

独立行政法人国立環境研究所

化学環境研究領域・動態化学研究室 米 田 穰...72

②築館町嘉倉貝塚出土人骨について

東北大学大学院医学系研究科人体構造学講座

澁 川 渉・佐 伯 史 子・百 々 幸 雄...79

例 言

1. 本書は、平成13・14年度に国庫補助を受けて行った嘉倉貝塚の重要遺跡範囲確認調査報告書である。
2. 調査は築館町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が協力した。
3. 測量に当たっては、平成11・12年度調査同様、遺跡東端に設けた第X系国家座標 $X = -141566.000$
 $Y = 20382.000$ を基準点とした3m単位のグリッドを設定して行った。
4. 本書における土色の記述には、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1996）を用いた。
5. 本書の第1図は国土地理院発行の1/25000「築館」を複製して使用した。
6. 本書の作成にあたっては、調査員全員の協議の後、土器等の実測は天野順陽・千葉直樹・中鉢琢也、執筆・編集は天野が行った。
7. 遺構番号は通し番号で平成13年度は501番から、平成14年度は701番から各遺構に付した。遺構、層位の略号は次のとおりである。
SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SI：竪穴住居跡 SK：土壌
SX：土器埋設遺構、焼け面、遺物包含層他
遺確：遺構確認面 堆：堆積土 包：包含層 床直：床面直上
8. 発掘調査にあたっては、次の方々からご指導をいただいた。
坂井秀弥、岡田康博（文化庁記念物課主任調査官）
須藤 隆（東北大学文学部教授）
柳田俊雄（東北大学総合学術博物館教授）
藤沼邦彦（弘前大学人文学部教授）
菅原弘樹（宮城県鳴瀬町縄文村歴史資料館学芸員）
須田富士子（東北大学東北アジア研究センター火山科学講座研究生）
佐藤信行（瀬峰町文化財保護委員・日本考古学協会員）
9. C区SK501土壌墓理葬人骨の取り上げ、分析に際しては、東北大学大学院医学系研究科人体構造学講座の協力・指導を得た。
百々幸雄、瀧川渉、澤田純明、川久保善智、前田朋子、佐伯史子（敬称略）
10. 遺物の写真撮影は株式会社アート・プロフィールに委託した。
11. 出土遺物および写真等の諸資料は、築館町教育委員会が保管している。

調 査 要 項

遺 跡 名：嘉倉貝塚（かくらかいづか）

（宮城県遺跡地名表登録番号：41005、遺跡記号：HN）

所 在 地：宮城県栗原郡築館町字萩沢加倉

調査目的：重要遺跡範囲確認調査

調査主体：築館町教育委員会

調査協力：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成13年度調査 平成13年（2001年）11月8日～12月12日

平成14年度調査 平成14年（2002年）10月28日～11月29日

面 積：発掘調査面積 3357㎡

平成13年度調査 発掘調査面積 1892㎡（A～I区）

平成14年度調査 発掘調査面積 1465㎡（J～P区）

調 査 員：平成13年度調査

千葉長彦、中鉢琢也（築館町教育委員会）

相原淳一、村田晃一、佐藤憲幸（宮城県教育庁文化財保護課）

平成14年度調査

千葉長彦、中鉢琢也（築館町教育委員会）

天野順陽、高橋栄一、稲毛英剛、千葉直樹（宮城県教育庁文化財保護課）

第一章 はじめに

I. 遺跡の位置と環境

嘉倉貝塚は、宮城県栗原郡築館町字萩沢加倉に所在し、主に縄文時代前期～弥生時代中期の集落跡として周知されている。

栗原郡付近の地形を概観すると、奥羽山脈から派生する陸前丘陵の一部である築館丘陵が東西に延び、町内を東流する迫川やその支流によって開析された樹枝状の地形が認められる。この中に町の東端から志波姫町、若柳町付近にかけて発達した低丘陵があり、本遺跡はこの丘陵から南にL字状に張り出した丘陵先端部の平坦面に立地している。遺跡の東、南、西側は低地へ続く急斜面となり、北側にも東から沢が深く入り込んでいるため、島状の地形となっており、遺跡の範囲はこの東西約500m、南北約100mと考えられている（第1・2図）。

遺跡が立地する丘陵先端部の地形を細かくみてみると、遺跡西側の標高が高く（標高20m）、丘陵やや南側に尾根筋を形成しながら東に向かい徐々に標高を減じていき、東側急斜面に続く。ただし、現況では尾根筋はほとんど確認できず平坦面に見える。また、尾根筋から沢に向かう北斜面は傾斜が緩やかな地形が広がるが、尾根筋から南側と西側は平坦面が狭く、南側急斜面、西側急斜面へ続いていく。遺跡の現況はほとんどが水田で、その他は畑、荒地などとなっているが、昭和40年代に標高の高い西側を削り、標高の低い東側に盛土するという造成を行ったため、全体的に西高東低の階段状の地形となっている。

また、遺跡の南東部には伊豆沼・内沼が広がり、荒川・照越川・八沢川・太田川等が形成した沖積地などととも東北有数の湖沼地帯となっている。なお、この地域は古石巻湾の最奥部にあたり、約7900年前には迫川・佐沼付近まで海が入り込んでいたが、その後は海水面の上昇速度を上回る土砂の堆積が進み、陸域が大きく拡大して約5000年前には現在とほぼ同じ位置まで海岸線が後退している。そして約5000年前以降は海面がほぼ安定したのに伴い堆積物の供給が減少し、谷底は埋積されなくなり、迫川流域などではいたるところに沼や湿地帯が形成されるようになった。伊豆沼や内沼などはこの時期に迫川に流入する河川の出口が迫川の堆積作用によって堰き止められてきたものである（岩手県教育委員会：1998）。

II. 嘉倉貝塚と周辺の遺跡について

嘉倉貝塚は、大正年間築館中学に在職していた故池内儀八郎氏によって初めて知られた（佐藤：1973）。このころから嘉倉貝塚は注目されるようになり、後に江坂輝弥（1950）、興野義一（1958）が遺跡を取り上げている。昭和30年代後半には河川の改修工事により遺跡の南西部が、昭和42～43年の開田工事でも丘陵平坦面が階段状に地形が大きく改変された。なお、開田工事の際出土した遺物は築館町文化財保護委員会によって採集、整理され概報が刊行されている（佐藤：1973）。

次に、本遺跡周辺の縄文時代の集落跡、貝塚についてみる。縄文時代前期の遺跡は本遺跡の他、

迫町糠塚貝塚（興野：1964、加藤：1955）がある。中期～後期の遺跡には築館町木戸遺跡（森：1980）、原田遺跡（阿部：1980）、佐内屋敷遺跡（森：1983）、鯉沢遺跡（宮城県教育委員会：1975他、註1）があり、いずれも本遺跡西方約2kmの丘陵上に立地する集落跡である。晩期の遺跡は築館町横須賀貝塚、砂子崎貝塚、若柳町原貝塚、敷味貝塚、迫町倉崎貝塚（阿部：1990）、唐木崎貝塚（阿部：1990）など伊豆沼周辺に多くの淡水性の貝塚が認められる。これらは「迫水系貝塚群」（註2）の支群「古伊豆沼沿岸貝塚群」として捉えられ（林：1984、淡水性の貝塚群では国内でも最大級と考えられている（東北歴史資料館：1989、岩手県教育委員会：1998）。

「古伊豆沼沿岸貝塚群」のひとつ迫町糠塚貝塚では、縄文時代前期中葉までは鹹水産のハマグリ、前期後葉には汽水産のヤマトシジミ、後期中葉には淡水産のカラスガイ・タニシを主体とする貝層に変化することが確かめられている（興野：1958）。これはこの地域の環境が臨海型から次第に潟湖化し湖沼地帯に変化したことを示すもので、湖沼化した頃に形成されたものといえる。



No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1	高倉貝塚	丘陵	縄文時代前期・中葉	6	玉袋台遺跡	丘陵	縄文時代・縄文時代	11	浄土遺跡（迫町）	丘陵	縄文時代・縄文時代
2	築次遺跡	丘陵	縄文時代・縄文時代	7	新屋台遺跡	丘陵	縄文時代・縄文時代	12	敷味貝塚（若柳町）	丘陵	縄文時代
3	木戸遺跡	丘陵	縄文時代・縄文時代	8	砂子崎遺跡	丘陵	縄文時代	13	敷味貝塚（若柳町）	丘陵	縄文時代・縄文時代
4	佐内屋敷遺跡	丘陵	縄文時代・縄文時代	9	糠塚貝塚	丘陵	縄文時代・縄文時代	14	本遺跡（若柳町）	丘陵	縄文時代
5	原田遺跡	丘陵	縄文時代	10	浄土遺跡	湖沼	縄文時代・縄文時代				

第1図 遺跡の位置

第二章 調査に至る経過と調査の目的・方法

I. 調査に至る経過

平成6年度に、宮城県十木部からみやぎ県北高速幹線道路事業に係る高規格道路築館若柳線建設計画とこれに伴う県道若柳築館線改良計画が示された。関係機関との協議の結果、宮城県教育委員会主体で発掘調査を行うことになり、平成10年度の確認調査を経て平成11年度から事前調査に着手した。

平成11年度の調査では、縄文時代前期後葉（大木5式期）～中期前葉（大木7b式期）の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴など多数の遺構を発見し、また、縄文土器、石器、土製品などの遺物も多数出土した。特に縄文時代前期後葉～中期初頭の竪穴住居跡は環状に配置される様相を呈したことで、木遺跡の重要性を再認識する結果となった。

調査結果を受け、再協議を行ったところ、基本的に遺跡を保存する方向性が示されたため、平成12年度調査は、遺跡の内容を明らかにする確認調査を実施した（佐藤・三好：2003）。そして平成13・14年度にも確認調査を継続して行うこととした。

本報告は、平成13・14年度に行った確認調査の成果をまとめたものである。なお、平成13年度調査分については遺構を中心に概要が報告されている（相原・中鉢：2002）。

II. 調査の目的・方法

今回の確認調査は、遺跡の内容をより正確に把握することを目的に行ったものである。調査区は着手順にA～P区とした（第2図）。平成13年度は主に遺跡の南西を調査対象とし（A～I区）、平成14年度は平成13年度の調査結果を補完するように遺跡南側・東側を調査対象とした（J～P区）。調査は主に縄文時代の竪穴住居跡、土壌墓の確認に重点を置いたため、他の遺構については平面プランのみを確認するに留めた。

1. 平成13年度調査

- ①A～F区：主に縄文時代前期後葉～中期前葉の集落構成を把握する。
- ②G区：丘陵西斜面にある貝層の範囲を把握する。
- ③H・I区：遺跡南側の範囲を確認する。

以上の目的で調査した結果、縄文時代前期後葉～中期前葉の集落が環状に配列されていることがほぼ確実になり、集落の範囲もさらに東に広がること、遺跡南西部には縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の墓城があること、そして遺跡南側に奈良・平安時代の住居跡も分布することなどが明らかになった。なお、G区では貝層は確認できなかった（相原・中鉢：2002）。

2. 平成14年度調査

- ①縄文時代前期後葉～中期前葉の集落が環状集落になるかを確認する（広場の確認）。
- ②環状集落の外側の様子を明らかにする。
- ③当該期の遺物包含層の有無を確認する（主に丘陵南斜面）。

④縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の墓域（土壌墓群）の範囲を確認する。

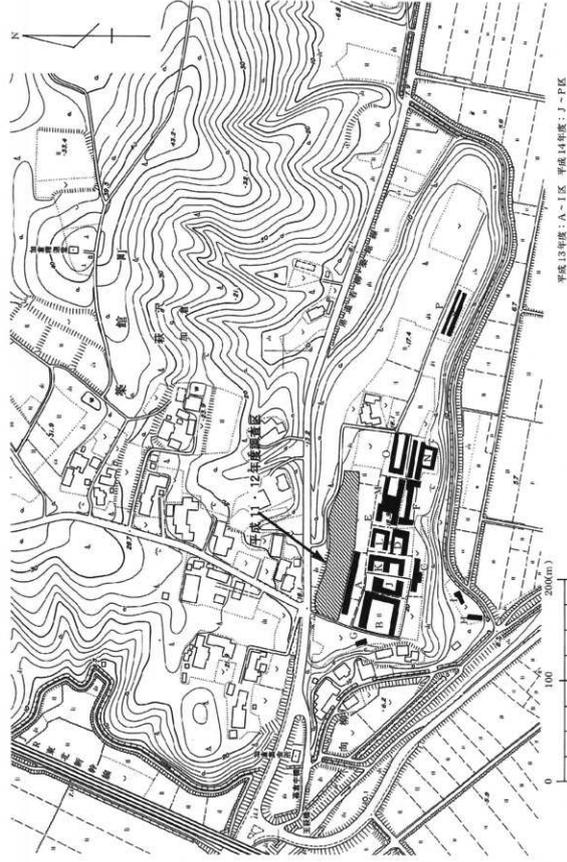
⑤遺跡の東限を確認する。

調査の結果、J～L区では縄文時代前期後葉～中期前葉の遺構は確認できず、この付近は環状集落の広場に当たると結論付けられたこと、F・M区付近まで環状集落を構成する竪穴住居跡が存在すること、丘陵南斜面には遺物包含層が認められなかったこと、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の土壌墓の範囲はC区西側付近に限られること、N・O区付近が主要な遺構の東限であることなど、一定の成果を得ることができた。

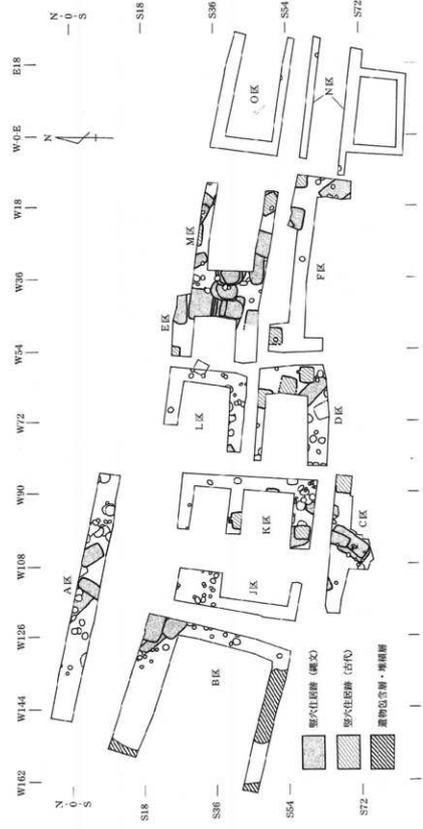
3. 記録等について

発見した遺構は、遺跡東端に設けた第X系国家座標 $X=141566.000$ $Y=20382.000$ を基準点とした3m単位のグリッドを設定して1/20平面図を作成した。断面図は必要に応じて作成した。写真は35mmと6×7モノクロ・カラーリバーサル、デジタルカメラを用いて撮影した。また、平成14年11月21日に航空写真撮影を行った。

なお、平成13年にはSK 501土壌埋葬人骨の取り上げを東北大学大学院医学系研究科人体構造学講座百々幸雄教授以下6名が行った。また、土壌PHの測定のためD区SK 544・545（動物遺存体を含む廃棄土壌）で埋土の全量採取を行っている。そして、12月8日には現地説明会を実施し、118名の参加があった。



第2図一(1) 調査区と周辺の地形



第2図一(2) 遺構平面図 (G～I区 P区を除く)

第2図 調査区と遺構平面図

第三章 発掘調査の成果

I. 基本層序

本遺跡は昭和40年代に丘陵平坦面の開田等により削平、地形改変が行われたため、層序を明確に観察できる場所はほとんどない。しかし、平成11・12年度調査と今回の調査の結果、堆積土の特徴(土色・土性)により、ある程度の幅があるものの、遺構の所属時期を決められることがわかったため、層序を復元的に推定した。各層の特徴とおおよその年代は下記のとおりである(第3図)。また、遺構確認面は基本的に第七層(黄褐色地山ローム層)であるが、削平のため全体的に遺構の残存状況は悪く、竪穴住居跡は床面、周溝のみ検出したものが多い。

I層：表土、新旧の耕作土。

II層：昭和40年代の開田に伴う盛土層。丘陵斜面や沢にみられる再堆積層。

III層：中世以降の旧表土。黒～黒褐色シルト・砂質シルト主体でややグライ化し、しまりが無い。近世の遺構はグライ化が強い。

IV層：古代。暗褐色シルト～砂質シルト主体。10世紀前葉に降下した灰白色火山灰(Tora)層が含まれる遺構もある。

V層：縄文時代後期・晩期～弥生時代前期。黒～黒褐色シルト主体でしまりが無い。

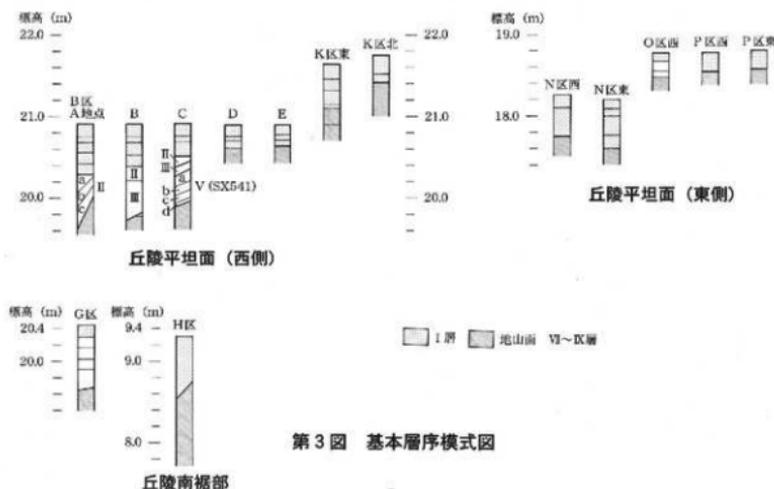
VI層：縄文時代前期～中期。黒褐色～暗褐色シルト主体でしまりがある。

VII層：地山ローム層。黄褐色。場所によっては褐色の漸移層が認められる。

VIII層：段丘礫層。

IX層：砂礫層。丘陵端部のH・I区で認められる。斜交層理が顕著に発達している。

※IV層とVI層は堆積土の特徴が類似しているため、遺構の時期の判別が困難なものもある。



II. 発見した遺構・遺物

確認した遺構は竪穴住居跡 54 軒、掘立柱建物跡 19 棟、土壇 228 基（うち土壇墓 45 基）、土器埋設遺構 3 基、溝跡 11 条、遺物包含層 1 か所などである（第 1 表）。遺物は縄文土器を中心に、弥生土器、土師器、須恵器・石器など整理用平箱 20 箱分が出土している。

以下、調査区ごとに主要な遺構について記述するが、遺構の時期については、調査は基本的に平面確認に留めており詳細な年代が不明なため、前項で記したように、堆積土の特徴や代表的な遺物の年代から所属時期を推定し、縄文時代前期後葉～中期前葉、縄文時代晩期～弥生時代前期、古代、中近世などに大別して記述する。このうち時期が特定できるものについては従来の研究成果（山内：1937、須藤：1998、相原：1986、丹羽：1981 他）等に基づいて個別に述べることにする。遺物は文様をもつ口縁部資料を中心に図示する。なお、各遺構の詳細については遺構属性表（第 2～5 表）を参照されたい。

1. A 区

竪穴住居跡 5 軒、竪穴状遺構 1 基、土壇 34 基、溝跡 5 条などを確認した（第 4 図・第 2 表）。遺構は W 90～135 に集中し、このうち竪穴住居跡は W 100～123、直径 1～2 m の土壇群は W 120～135、直径 3 m 前後の上壇群は W 93～102、直径 30～40 cm の柱穴は W 108～135 に分布する。

(1) 縄文時代前期後葉～中期前葉

① 竪穴住居跡

5 軒確認した（S I 591・593・638・644・645）。平面形はいずれも長径 10 m 前後・短径 4～5 m の隅丸長方形で、方向は長軸がおよそ N-40°—W のもの（S I 644・645）とおよそ N-20°—W のもの（S I 591）がある。また、3 軒とも床面の一部を確認し、住居の長軸線上に径 50 cm 前後で不整形の焼け面があり、このうち S I 644 は焼け面が 2 列になっている。

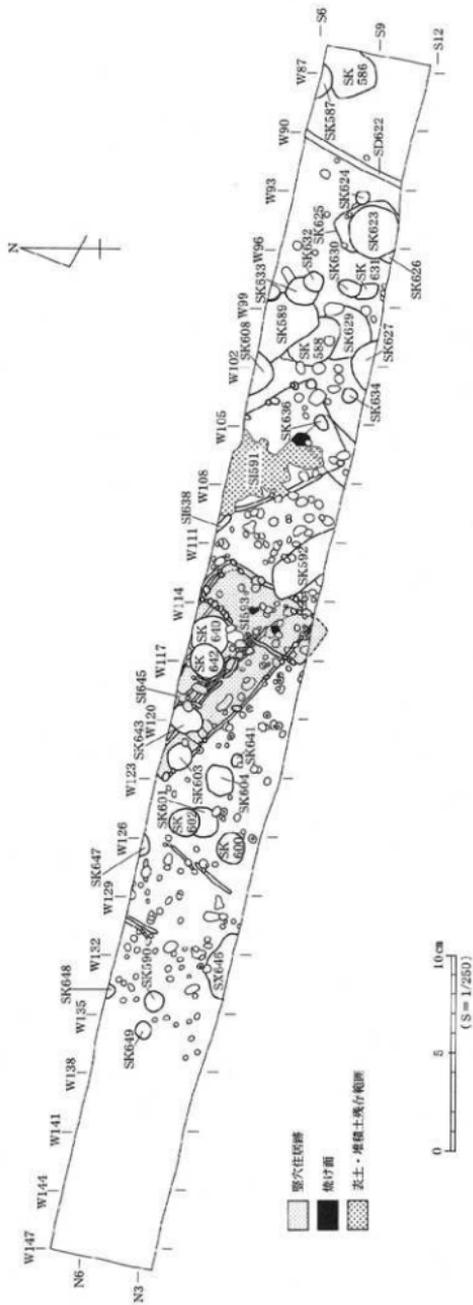
遺物は S I 591 から大木 6～7 a 式期の土器が出土している（第 5 図 1～12）。このうち 3 は縦位・横位の半截竹管文が密に施文された深鉢で、その特徴から北陸系（縄文時代中期前葉新保式・大木 7 a 式期並行）と思われる。11 は外面に円環状貼付文、内面に獣面突起が認められるものである。また S I 593 から大木 7 a 式期ころの土器が出土している（第 5 図 13～16）。

② 土壇

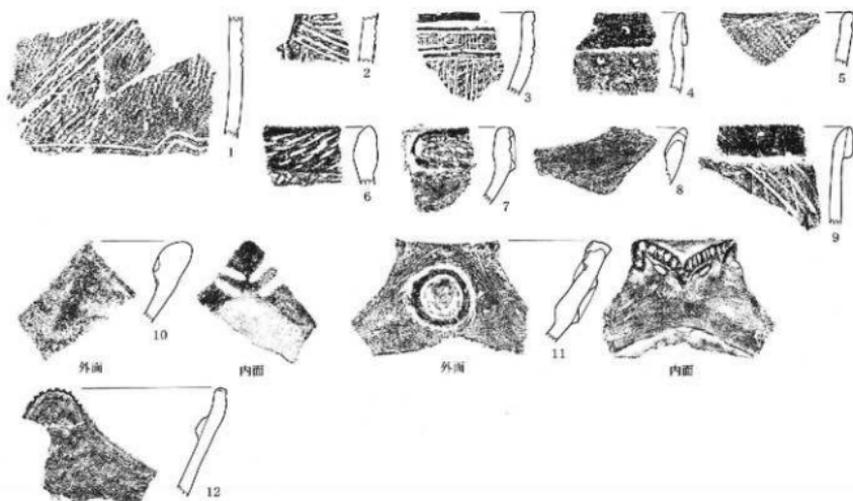
32 基確認した。これらの上壇は W 120～135 付近にある長径 1～2 m で円形、楕円形を基調とした土壇群と W 93～102 付近にある長径 3 m 前後で円形、楕円形、方形を基調とした土壇群に大別できる（註 3）。このうち前者は重複関係から S I 644・645 より新しい土壇群と思われる。遺物は SK 587・589・590・600～604 の堆積土から出土し、隆帯、半截竹管文による沈線文、押引文、刺突文が施されたものなどがある（第 6 図）。

③ 溝跡

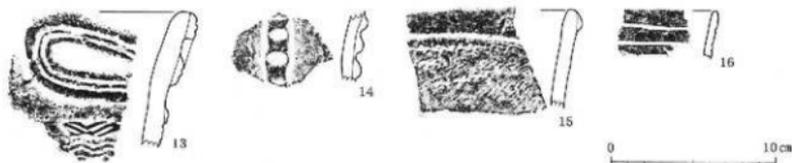
5 条確認した（S D 550・557・567・568・622）。いずれも小溝跡である。このうち S D 550・557・



第4圖 A區平面圖



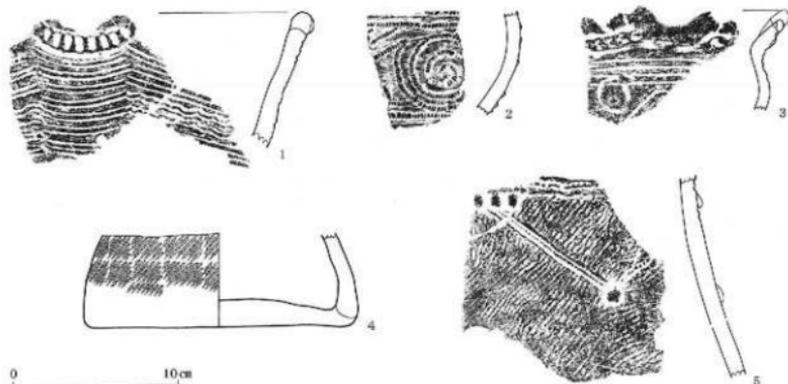
SI 591 住居跡出土土器



SI 593 住居跡出土土器

番号	区	遺構・層位	図 類	文様・裝飾の特徴	時 期	写 真
1	A	SI 591-遺構	深鉢	胴部：半藪竹管による平行沈線文、縦文(LR)	大木6	10-1
2	A	SI 591-遺構	深鉢	胴部：半藪竹管による平行沈線文、縦文(LR)	大木6	10-2
3	A	SI 591-遺構	深鉢	口縁部：平線、半藪竹管による横位平行沈線文・縦位平行沈線文、横文(RL)	大木6 (大木7a)	10-3
4	A	SI 591-遺構	深鉢	口縁部：平線、内面竹管による斜交文	大木7	10-4
5	A	SI 591-遺構	深鉢	口縁部：平線、横文(RL)	不明	10-5
6	A	SI 591-遺構	深鉢	口縁部：平線、横文(LR)	大木6~7	10-6
7	A	SI 591-遺構	深鉢	口縁部：平線、X字状区画織線文、横位斜交文(L)	大木7 b	10-7
8	A	SI 591-遺構	深鉢	口縁部：波状線、無文	大木7	10-8
9	A	SI 591-遺構	深鉢	口縁部：平線、無文	大木7	10-9
10	A	SI 591-遺構	深鉢	口縁部：波状線、内面短沈線文（使覆部付近）	大木7 b	10-10
11	A	SI 591-遺構	深鉢	口縁部：波状線、扇状線文、内面に裏面の表取（使覆部付、半藪竹管による斜交文（使覆上）、斜交）	大木7	10-11
12	A	SI 591-遺構	深鉢	口縁部：波状線、扇状線文（使覆上）	大木7	10-12
13	A	SI 593-遺構	深鉢	口縁部：波状線、短位の粘土寄附材による折り返し弧状文、半藪竹管による平行沈線文（粘土帯上）、横位線帯、扇状短沈線文（使覆上）	大木6	10-13
14	A	SI 593-遺構	深鉢	口縁部：短位線帯、指深状圧痕（使覆上）、筋線文	大木7 a	10-14
15	A	SI 593-遺構	深鉢	口縁部：平線、横文、斜部：横文(L)	大木7	10-15
16	A	SI 593-遺構	深鉢	口縁部：平線、平行沈線文	大木7 y	10-16

第5図 A区 SI 591・593住居跡出土土器



番付	区	遺構・層位	図種	文様・装飾の特徴	時期	牙煎
1	A	SK601 一層	浮鉢	口縁部：肩部押圧波状縁、波頂部に隆帯貼付、斜目文（隆帯上）、半截竹管による口縁に右平行沈線文・雲歯状沈線文	大木 7 a ?	10-17
2	A	SK602 一層	浮鉢	胴部：半截竹管による雲歯状押引文	大木 6	10-18
3	A	SK603 一層	浮鉢	口縁部：波状縁、口縁に右平行帯、半截竹管による斜目文（隆帯上） 胴部：平行沈線文胴部：円形沈線文、山形状沈線文	大木 6	10-19
4	A	SK608 一層	浮鉢	胴部：雲文(L/R) 底部：無文	不明	10-20
5	A	79L 1 一層	浮鉢	胴部：半截竹管による押引文、斜目面貼付文、縄文(L)	大木 6	10-21

第 6 図 A 区 SK601・602・603・608 土壌、Pit 1 出土遺物

567・568 溝跡は痕跡的に認められ、住居跡の周溝の可能性もある。

(2) 古代

① 竪穴遺構

1 基確認した (SX 646)。平面形は不整形と思われる。堆積土は灰白色火山灰 (十和田 A 火山灰) ブロックを含む黒褐色シルト主体の自然堆積層である。出土遺物はない。

② 土壌

1 基確認した (SK 587)。直径 2m 程度で円形のものと思われる。堆積土は暗褐色砂質シルトを主体とする自然堆積層である。遺物はロクロ土師器甕が出土している (第 2 表)。

2 B 区

竪穴住居跡 3 軒、土壌 23 基、溝跡 2 条、遺物包含層 1 ヲ所の他、堆積層 2 ヲ所を確認した。遺構は調査区東側の W 120 ~ 135 に分布し、W 135 以西は空間となっている (第 7 図)。

(1) 縄文時代前期後葉～中期前葉

① 竪穴住居跡

3 軒確認した (S I 609 ~ 611)。いずれも調査区北東隅に位置している。新旧関係は古い方から S I 611 → 610 → 609 である。住居跡は長径 13m・短径 2m で長楕円形のもの (S I 611) と、長径 7m 以上・短径 4 ~ 5m で隅丸長方形のもの (S I 609・610) がある。方向は長軸がおよそ N-40°

—Wのもの（S I 610・611）とおおよそN—70°—Wのもの（S I 609）がある。また、3軒とも床面の一部を確認し、各住居跡の長軸線上には焼け面跡が連続している。遺構確認時にこの付近から縄文時代前期後葉大木6式期の土器が出土している（第2表）。

②溝跡

2条確認した（SD 594・595）。いずれも痕跡的に認められ、住居跡の周溝の可能性もある。

(2) 縄文時代晩期～弥生時代前期

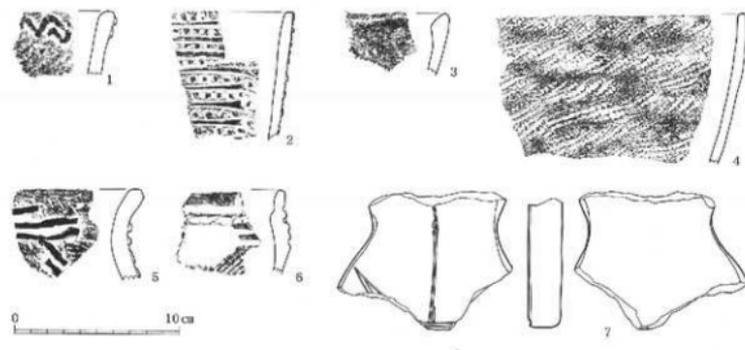
土壇 19基（SK 540・542～548・606・607・613～621）、遺物包含層 1カ所（SX 541）の他、堆積層 2カ所（SX 605・612）を確認した。

①土壇

土壇は長径1～2mの円形・楕円形を基調とし、堆積土は黒色～黒褐色シルト主体で人為的に埋め戻しているものもある。このうちSK 544・545には動物遺存体が埋められていた。遺物はSK 545の堆積土から縄文時代前期後葉（大木5式期）～中期初頭（大木7a式期）、縄文時代後期後葉～晩期の土器、遺構確認面から土偶が出土している（第9図）

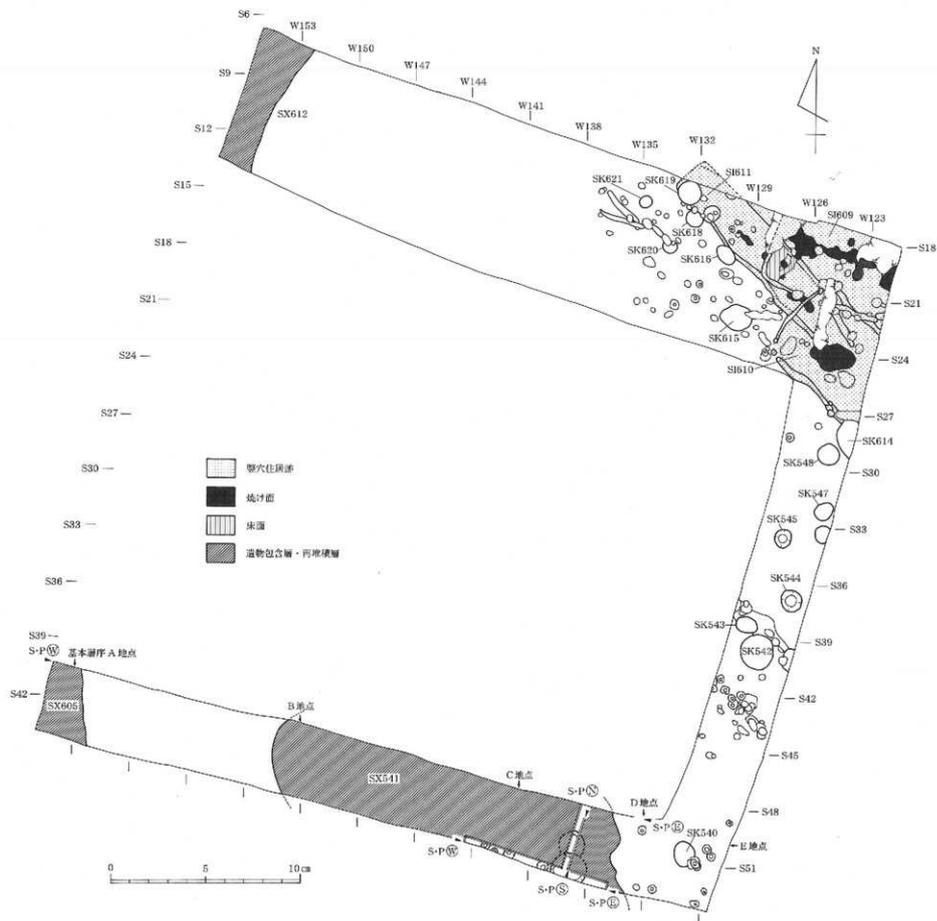
②遺物包含層

SX 541 遺物包含層は南から入り込む沢頭に堆積した土層で4層からなる（第9図I～VI層。細別16・17・21・22層）。I・II層に弥生時代前期の土器を主体的に含むことからこのころに形成されたものと考えられる（第10～12図）。規模はB区付近で幅約24m、層厚約60cmであるが、南ほど



番号	区	発掘・発見	器種	文様・装飾の特徴	時期	写真	
1	B	SK 545	一埴	浮鉢	II線部：平縁、縦帯状粘土胎貼付文、縄文	大木4～5	10-22
2	B	SK 545	一埴	浮鉢	II線部：平縁、II線部～胴部：入眼帯状文、瘤状小突起貼付、縄文(LR)	後葉後葉	10-27
3	B	SK 545	一埴	浮鉢	II線部：平縁、縄文	不明	10-23
4	B	SK 545	一埴	浮鉢	II線部：平縁、II線部～胴部：縄文(LR)	不明	10-26
5	B	SK 606	一埴下層	浮鉢	II線部：粘土胎貼付文、縄文	大木5	10-24
6	B	Pit 1	一埴	浮鉢	II線部：平縁、縄文、内面横位沈着文、胴部：横位平行沈着文、斜目文（横位沈着文内充填）	不明	10-25
7	B	遺構	土壇	胴部表：平縁竹葉による正中縁・腰部に瓦状沈着文、胴部裏：無文		大木6～7a	10-28

第8図 B区 SK545・606土壇、Pit 1出土遺物



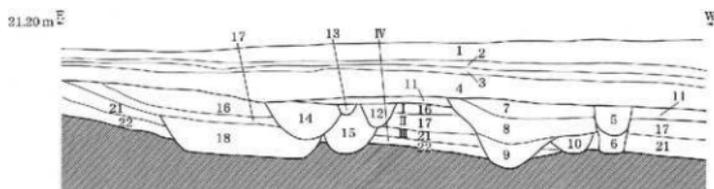
第7图 B区平面图

幅が広がり、層厚も増していくものと思われる。I～IV層は基本的に均質な自然堆積層であるが、I・III層でそれぞれ土壌（SK 606・607）、Pit が複数確認できることから、包含層形成途中に一時、遺構面になっていたと考えられる。

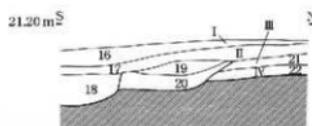
なお、I層の上層には灰白色火山灰降下以降の旧表土（第9図11層）が堆積しているが、I層との時間差が大きいため、本来存在したI層より上位の層が弥生時代前期以降に何らかの理由で削平された後に堆積したものと考えられる。

(3) 中近世

調査区南壁断面（第9図）で土壌4基を確認した（SK 537・557・698・699）。途中11層（灰白色火山灰降下以降の旧表土）を挟んでいることから古い方からSK 699→SK 698→11層→SK 537となる（SK 557は不明）。堆積土はいずれもしまりのない黒褐色土主体の自然堆積層である。出土遺物はない。



SX541 遺物包含層他南壁断面図

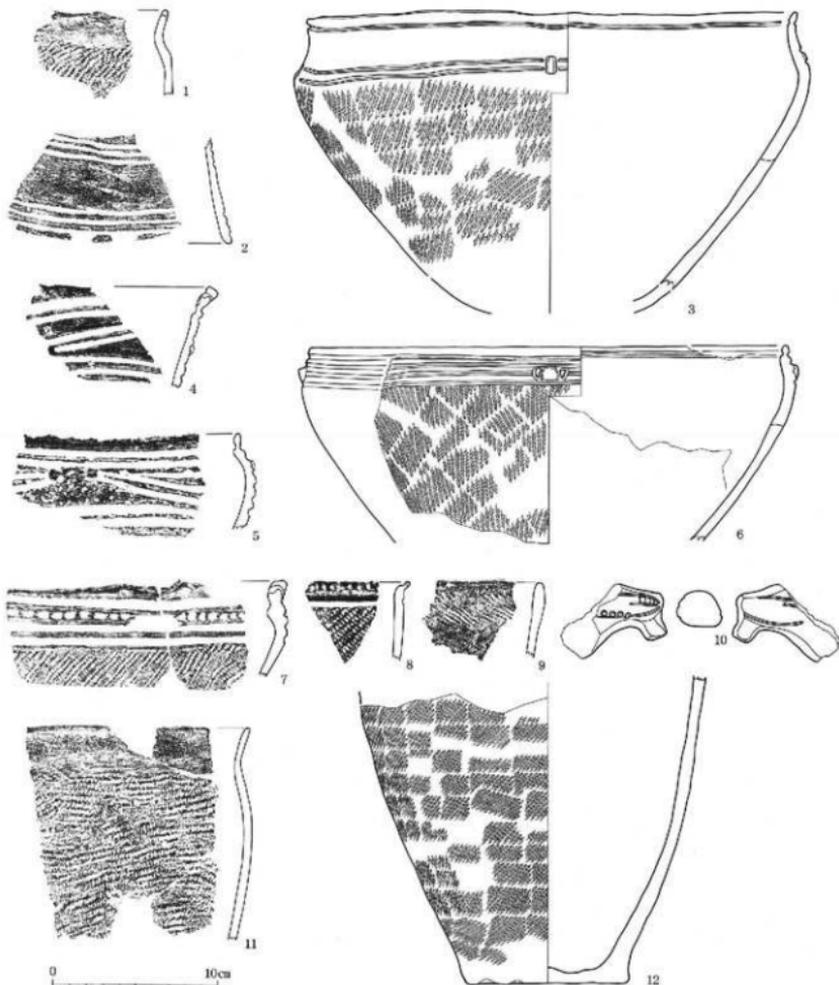


SK606・607 土壌付近断面図



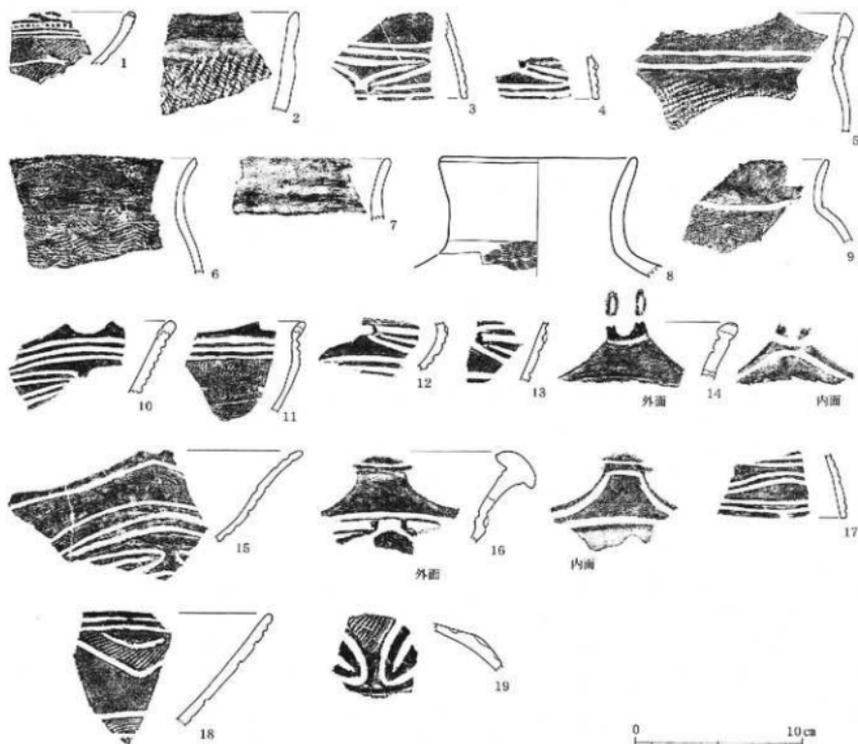
層 No	土色・土性	特徴等	
1～4	表土・耕作土		
5	Pit1 埋土 10 Y R 3/3	暗褐色 シルト	
6	Pit2 埋土 10 Y R 3/3	黒褐色 シルト	地山ブロック含む
7	SK537 堆積土 10 Y R 3/2	黒褐色 シルト	漆土少量含む
8	SK537 堆積土 10 Y R 2/3	黒褐色 シルト	
9	SK537 堆積土 10 Y R 2/3	黒褐色 シルト	炭化物少量含む
10	SK577 堆積土 10 Y R 2/3	黒褐色 シルト	
11	Pit3 埋土 10 Y R 3/2	黒褐色 シルト	灰白色火山灰降下以降
12	Pit4 埋土 10 Y R 3/3	黒褐色 シルト	地山ブロック含む
13	Pit4 埋土 10 Y R 3/2	黒褐色 シルト	地山ブロック含む
14	SK698 堆積土 10 Y R 3/3	黒褐色 シルト	
15	SK698 堆積土 10 Y R 3/2	黒褐色 シルト	
16	SX541 堆積層Ⅰ 10 Y R 2/3	黒褐色 シルト	縄文晩期大瀬A'～弥生前期の上層含む
17	SX541 堆積層Ⅱ 10 Y R 3/3	暗褐色 シルト	縄文晩期大瀬C2～弥生前期の上層多く含む
18	SK606 堆積土 10 Y R 2/3	黒褐色 シルト	
19	SK607 堆積土 10 Y R 5/8	黄褐色 シルト	地山ブロック含む
20	SK607 堆積土 10 Y R 4/6	褐色 シルト	
21	SX541 堆積層Ⅲ 10 Y R 4/4	褐色 シルト	
22	SX541 堆積層Ⅳ 10 Y R 5/4	にがい黄褐色 シルト	縄文晩期～弥生前期の上層含む

第9図 SX541 遺物包含層他



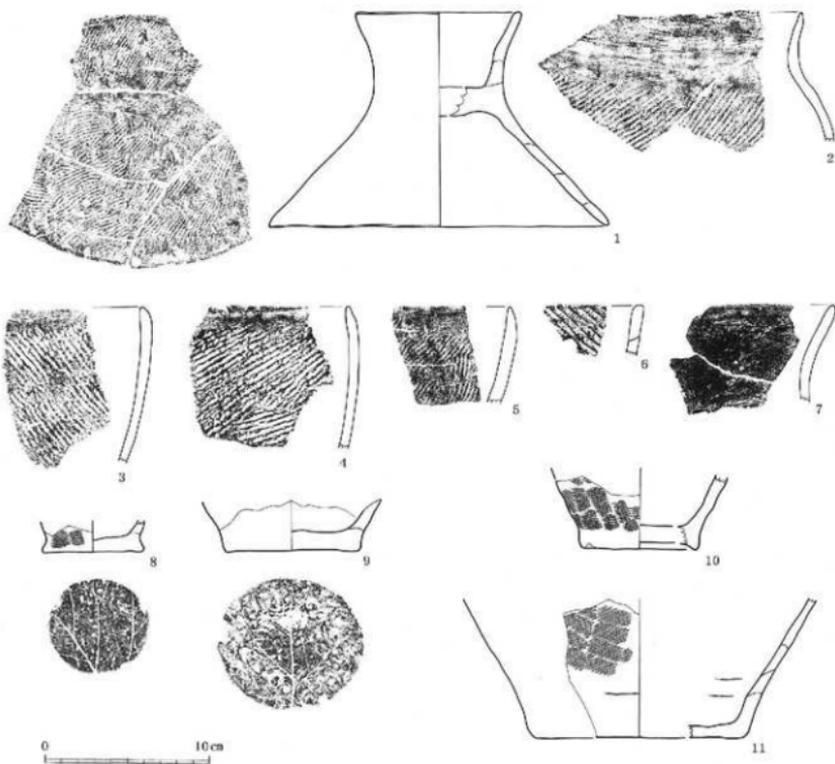
発見区	遺物・部位	器種	文様・装飾の特徴	時期	写真
1 B	SX541-包1層	麻織	口縁部：波状織、無文、胴部：無文(L,R)	不明	11-1
2 B	SX541-包1層	糸織	胴部：平行波線文	不明	11-2
3 B	SX541-包2層上-Po.1	麻	口縁部：平織、縦位斜目文、内面横位波線文、胴部：無文(L,R)	弥生前期	11-3
4 B	SX541-包1層	麻	口縁部：波状織、口内斜状織文、内面横位波線文・口縁に斜目波線文、変形十字文(縁寄り)	弥生前期	11-4
5 B	SX541-包1層	麻	口縁部：平織、内面横位波線文、変形十字文(縁寄り)	弥生前期	11-4
6 B	SX541-包1層-Po.2	麻	口縁部：平織、无文字、内面横位波線文、胴部：波状織文(L,R)	不明	11-9
7 B	SX541-包1層上・中	麻	口縁部：突起のつく平織、頂部押圧山形突起、口内波状織文、内面横位波線文、胴部：无文字(横位文縁側斜目文突起)、無文(L,R)	弥生前期	11-6
8 B	SX541-包2層上	麻織	口縁部：平織、横位斜目文、横位波線文、胴部：無文(L,R)	大槌A	11-7
9 B	SX541-包2層上	麻織	口縁部：平織、縦文(ORL)、横部：無文(RL)	不明	11-8
10 B	SX541-包2層上-Po.1	木織	中央、胸部分：縦位波線文、波線斜交文、胸縁部：縦位波線文	弥生後葉	11-10
11 B	SX541-包2層上	麻織	口縁部：平織、无文字、胴部：斜走組文	不明	11-11
12 B	SX541-包4層	麻織	胴部：無文(L,R) 底縁：木葉文	不明	11-12

第10図 B区 SX541遺物包含層出土遺物(1)



品目	区	遺物・部位	説明	文様・装飾の特徴	時期	写真
1	B	SX541 - 遺物	浅鉢	口縁部に突起のつく平縁。口唇部平み、胴高文。胴縁：雲文(L.R)	大波目C	12-13
2	B	SX541 - 遺物	深鉢	口縁部：平縁。無文。胴縁：雲文(L.R)	不明	12-14
3	B	SX541 - 遺物	高杯	胴部：雲形上字文(胎意有り)	不明	12-15
4	B	SX541 - 遺物	高杯	胴部：雲形上字文(胎意有り)	不明	12-16
5	B	SX541 - 遺物	深鉢	口縁部：突起のつく平縁。口唇部沈線文。平行沈線文。内面横位沈線文。胴部：蓮文(L.R)	不明	12-17
6	B	SX541 - 遺物	深鉢	口縁部：平縁。無文。胴部：雲形上字文(L.R)	不明	12-18
7	B	SX541 - 遺物	浅鉢	口縁部：平縁。無文。胴部：無文。胴縁：雲文(L.R)	不明	13-1
8	B	SX541 - 遺物	浅鉢	口縁部：平縁。無文。胴部：無文。胴縁：雲文(L.R)	不明	13-2
9	B	SX541 - 遺物	点	口縁部：平縁。横位沈線文。胴縁：横位沈線文(L.R)	不明	13-3
10	B	SX541 - 遺物	鉢	口縁部：突起のつく平縁。口唇部の横文。内面口縁に沿う沈線文。横位沈線文。胴部：雲形上字文(胎意無し)	砂灰並行	13-4
11	B	SX541 - 遺物	鉢	口縁部：突起のつく平縁。口唇部沈線文。平行沈線文。内面横位沈線文	砂灰並行	13-5
12	B	SX541 - 遺物	高杯	胴部：雲形上字文(胎意有り)	砂灰並行	13-6
13	B	SX541 - 遺物	鉢	胴部：雲形上字文(胎意有り)	砂灰並行	13-7
14	B	SX541 - 遺物	鉢	口縁部：突起のつく平縁。口唇部沈線文。胴部平圧・斜みのある二段突起。内面口縁に沿う沈線文。横位沈線文	砂灰並行	13-8
15	B	SX541 - 遺物	高杯	口唇部：胴部押圧状突起。口縁に沿う沈線文(内外面)。胴部：雲形上字文(胎意無し)	青木燧	13-9
16	B	SX541 - 遺物	高杯	口唇部：段状縁(突起)。口唇部沈線文。内面口縁に沿う沈線文。横位沈線文。胴部：雲形上字文(胎意有り)	青木燧	13-10
17	B	SX541 - 遺物	高杯	口唇部：沈線文	青木燧	13-17
18	B	SX541 - 遺物	高杯	口縁部：平縁。口唇部～胴部：垂下文	山平屋敷	13-18
19	B	SX541 - 遺物	点	口縁部：雲形上字文(胎意無し)。蓮文(L.R)	不明	13-14

第11図 B区 SX541 遺物包含層出土遺物(2)



透写	区	発掘・層位	器種	文様・装飾の特徴	時期	写真
1	B	SX541-遺跡	甕	つまみ部：縄文(L) 胴部：縄文(L)	弥生前期	12-12
2	B	SX541-遺跡	深鉢	口縁部：平縁、無文 胴部：縄文(L,R)	不明	12-15
3	B	SX541-遺跡	深鉢	口縁部：平縁、縄文(R,L) 胴部：縄文(R,L)	不明	12-16
4	B	SX541-遺跡	深鉢	口縁部：平縁、口縁部～胴部：縄文(L)	不明	12-17
5	B	SX541-遺跡	深鉢	口縁部：平縁、無文 胴部：縄文(L,R)	不明	12-18
6	B	SX541-遺跡	深鉢	口縁部：平縁、縄文(R,L)、穿孔(編成後)	不明	12-19
7	B	SX541-遺跡	深鉢	口縁部：平縁、無文	不明	12-20
8	B	SX541-遺跡	深鉢	胴部：縄文(R,L) 底部：木炭痕	不明	12-22
9	B	SX541-遺跡	深鉢	底部：木炭痕	不明	12-23
10	B	SX541-遺跡	深鉢	胴部：縄文(R,L)	不明	12-21
11	B	SX541-遺跡	深鉢	胴部：縄文(R,L) 底部：木炭痕	不明	12-24

第 12 図 B 区 SX541 遺物包含層 出土土器 (3)

3. C区

竪穴住居跡6軒、土器埋設遺構1基、土壇・土壇墓56基、掘立柱建物跡2棟などを確認した(第13・16図、第3表)。

(1) 縄文時代前期後葉～中期前葉

竪穴住居跡4軒を確認した(S I 539・597～599)。S I 597～599は重複しており、占い方からS I 599→598→597と変遷する。平面形はいずれも隅丸長方形で、規模はほぼ全容がわかるS I 598が長径10m×短径4.0mで、S I 598・599が長径8m×短径3m程度と推定される。方向は長軸がN-30°-E前後である。S I 598・599では床面の一部を確認し、住居の長軸線上に焼け面が1～2ヵ所確認された。遺物はS I 597床面近くの堆積土から縄文時代前期後葉大木6式期の土器が出土している(第14図)。

(2) 縄文時代晩期後葉～弥生時代前期

調査区西端で土壇墓群、土器埋設遺構(土器棺墓)を確認し、この付近が墓域であることがわかった(第13・16図)。

①土壇墓

43基を確認した(SK 540・542～548・613～621)。調査区西端に集中しており、S 63・W 121のSK 501付近では10基の土壇墓が重複している。平面形は長径14m×短径07mの楕円形、隅丸長方形を呈するものが主体で、その他やや規模が小さく、D字に似た不整形円形、楕円形のものなどがある。方向は、長軸方向がわかる26基を対象に長軸方向の北でみると、N-70～85°-Wのもの7基、N-45～55°-Wのもの3基、N-10～30°-Wのもの11基、N-5～20°-Eのもの4基、N-80°-Eのもの1基となっており、北西方向のものが主体で、N-45°-W前後のものが約半数を占める。

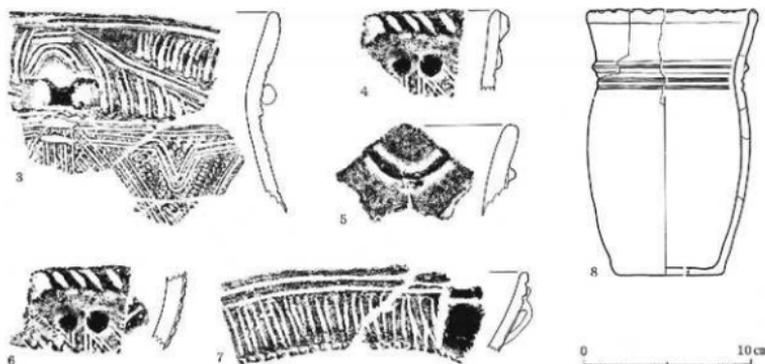
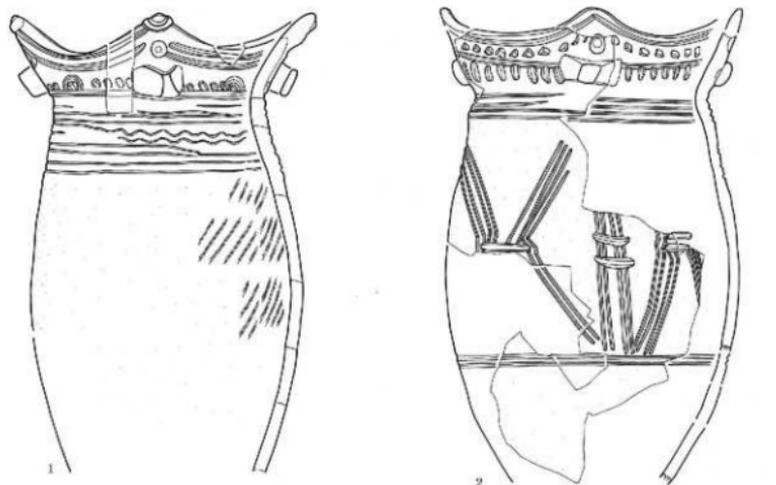
土壇墓43基のうち19基で埋葬された人骨の一部を確認した。その多くは頭蓋骨で、その他上腕骨、鎖骨、肩甲骨などの上半身と、大腿骨、腓骨などの下半身である。埋葬状態は精査したSK 501土壇墓は仰臥屈葬位、平面で確認したSK 533土壇墓は体右側を下にした側臥屈葬位で、基本的に頭部を北にしているが、西のものも少数認められる。埋葬状態と平面形の関係を見てみると、前者は平面形が長径14m×短径07mの楕円形、隅丸長方形、後者はやや規模が小さく、D字に似た不整形円形、楕円形の掘り方であり、今回確認した土壇墓の平面形を見る限りでは木遺跡では仰臥屈葬位のもの主流となっていたようである。

土壇墓群の年代は、重複関係で比較的新しいSK 501土壇墓に埋葬されていた人骨の放射性炭素年代測定の結果、人骨の年代は2450 BPで縄文時代晩期後葉から弥生時代前期のものと考えられた。その他の土壇墓も特徴が似ていることからこの時期のものと考えられる(付表参照)。

【SK 501土壇墓】

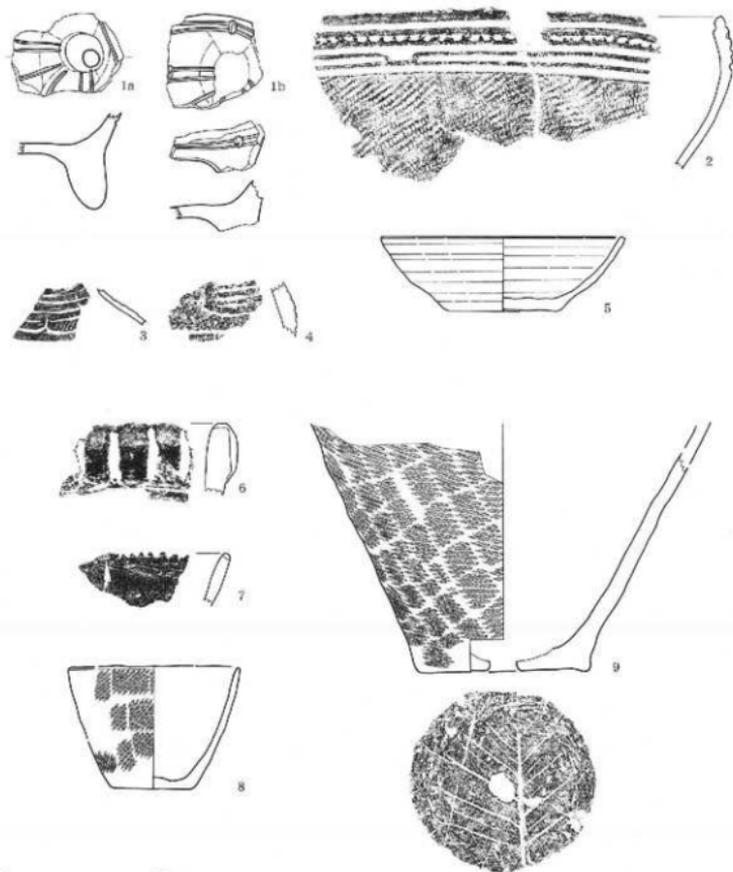
〔位置〕 調査区西端S 63・W 121で確認された(第16・17図)。

〔重複〕 SK 502・505・506・509・510・556・558・559・567・568と重複し、これらより新しい。



番号	区	遺構・測位	器種	文様・裝飾の材質	時期	厚さ
1	C	SI 597-堆	深鉢	口縁部：波状線、口縁に沿う平行沈線文、横位櫛状貼付文、内部の指孔、弧状沈線文、三角形の連線形文、胴部：半截竹管による縦位平行沈線文・細面状沈線文、縄文(L,R)	大木6	13-6
2	C	SI 597-堆	深鉢	口縁部：波状線、口縁に沿う沈線文、横位櫛状貼付文、内部の指孔、三角形の連線形文、縦位短沈線文、胴部：半截竹管による平行沈線文、縄文	大木6	13-7
3	C	SI 597-堆	深鉢	口縁部：平線、半截竹管による弧状沈線文、斜位区画平行沈線文、縦位連続沈線文、横位櫛状貼付文、胴部：半截竹管による平行沈線文、縄文(L,R)	大木6	13-10
4	C	SI 597-遺壁	深鉢	口縁部：平線、斜位指目文、半截竹管による平行沈線文、内形貼付文	大木6	13-8
5	C	SI 597-遺壁	深鉢	口縁部：波状線、胴部に弧状線等・縦位帯等(胴部)貼付	大木7 a	13-9
6	C	SI 597-遺壁	深鉢	胴部：区画連線文、内形竹管による斜位文(縁部上)、縄文	大木6~7 a	13-11
7	C	SI 597-遺壁	深鉢	口縁部：平線、平行沈線文、縦位櫛状貼付文、半截竹管による縦位連続沈線文・横位連続斜位文	大木7 a	13-12
8	C	SI 597-堆	深鉢	口縁部：平線、口唇部斜位文、横位帯等、半截竹管による横位平行沈線文、胴部：無文	大木7	13-13

第 14 図 C区 SI 597 住居跡出土器



番号	区	遺構・層位	器種	文様・装飾の特徴	時期	写真
1	C	SI 596 - 1 地	陶器鉢	底帯：卍字文、平行沈線文 脚部：無文	大洲A	13-1
2	C	SI 596 - 1 地	鉢	口縁部：平縁、内面横位沈線文 口縁部～脚部：卍字文、斜目文（単位文様間刻目文表出） 脚部：無文(L,R)	晩期後漢	13-4
3	C	SI 596 - 1 地	壺	脚部：卍字文、垂消縄文(L文)	大洲A	13-2
4	C	SI 596 - 1 地	壺?	脚部：垂消土字文（局部なし）	山平遺跡	13-3
5	C	SI 596 - 1 地	瓦葺・埴	外志：口ノ十字字、高面：口ノ十字字 底帯：斜糸切り無濁條	平安時代	13-5
6	C	SK501 - 1 地	産鉢	口縁部：平縁、縦位沈線文、半截竹篋による単位平行沈線文	大平6	13-25
7	C	SK503 - 1 地	産鉢?	口縁部：波状縁、口周部有目文	晩期?	12-28
8	C	積土	鉢	口縁部：平縁 口縁部～脚部：無文(L,R)	不明	12-27
9	C	SX511 - 1 遺構	産鉢	脚部：横糸縄文(L,R) 底帯：穿孔、木麻直	不明	12-28

第 15 図 C区 SI 596 住居跡、SK501・530 土坑、SX511 出土土器

〔平面形・規模〕長径140m、短径60cm、深さ30cmで、平面形は不整形円形である。壁面は北・東側が急に、南・西側は緩やかに立ち上がる。

〔埋土〕地山粒を含む暗褐色シルト主体である。

〔埋葬人骨〕北に頭を向けた仰臥屈葬位の人骨を1体確認し（SK 501 a号）、さらにその西側から別個体の下肢骨（SK 501 b号）を確認した。SK 501 b号は再葬されたものと思われる。

SK 501 a号は頭蓋骨、右頰骨、左上腕骨、左右寛骨、左大腿骨、左脛骨などを確認したが、頭蓋骨のほぼ全体が遺存するものの、全身の保存状態はかなり不良である。SK 501 b号は左右大腿骨、頸骨を確認した。

〔出土遺物〕右上腕骨を覆うようにシカの肩甲骨を発見した。

〔分析結果〕埋葬人骨の年代、特徴についての詳細は付章に記されているが概要は次のとおりである。

◎SK 501 a号

- ①放射性炭素年代測定の結果、人骨の年代は2450 B Pで、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期のものと考えられる。
- ②性別は男性で、年齢は熟年期後半程度である。
- ③低顔で鼻根部が陥凹すること、後頭部の外後頭隆起が垂下し明瞭な上項線が認められることなど身体的に縄文人的特徴が認められる。
- ④風習的抜歯が行われていた可能性がある。
- ⑤頸部に加齢による変形性関節炎を患い、相当な運動障害を蒙っていた。

◎SK 501 b号

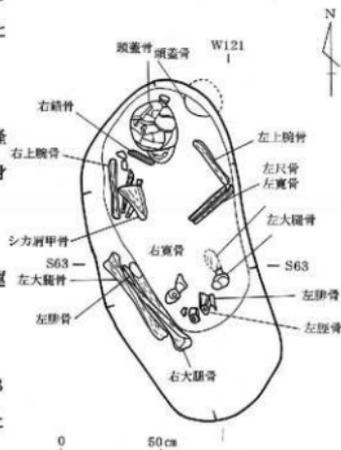
- ①放射性炭素年代測定の結果、人骨の年代は2450 B Pで、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期のものと考えられる。
- ②性別は男性で、おそらく成人に達していた。
- ③大腿骨、頸骨の断面形態などに縄文人的特徴が認められる。

②土器埋設遺構（土器棺墓）

調査区西端S 65・W 120で土器埋設遺構1基を確認した（SX 511）。土器埋設遺構は直径40cm、深さ20cm、平面形が円形の掘り方に底部穿孔の施された深鉢の底部（高さ20cm、直径30cm残存）が正位に据えられていたもので土器棺墓と思われる（第15図）。埋土は地山粒を含む黒色シルトである。

(3) 古代

①竪穴住居跡



第17図 C区SK501土坑埋葬人骨

2軒確認した(SI 596・676)。平面形はいずれも隅丸方形で、SI 676は東辺に煙道が付く。規模は不明だが、SI 596が一辺5m程度、SI 676が3m程度と思われる。堆積土は暗褐色砂質シルト主体の自然堆積層である。遺物はSI 596堆積土からロクロ土師器環、須恵器の他、縄文時代晩期大洞C2～弥生時代前期の土器が出土している(第15図)。

②土壌

12基確認した(SK 677～682・685～690)。調査区中央W 98～108に集中している。平面形は長径10m前後、短径05～10mの円形、楕円形を基調とするもの(SK 677～681・685～690)、長径20m前後の不整形のもの(SK 682)がある。堆積土は暗褐色砂質シルト主体の自然堆積層である。出土遺物はない。

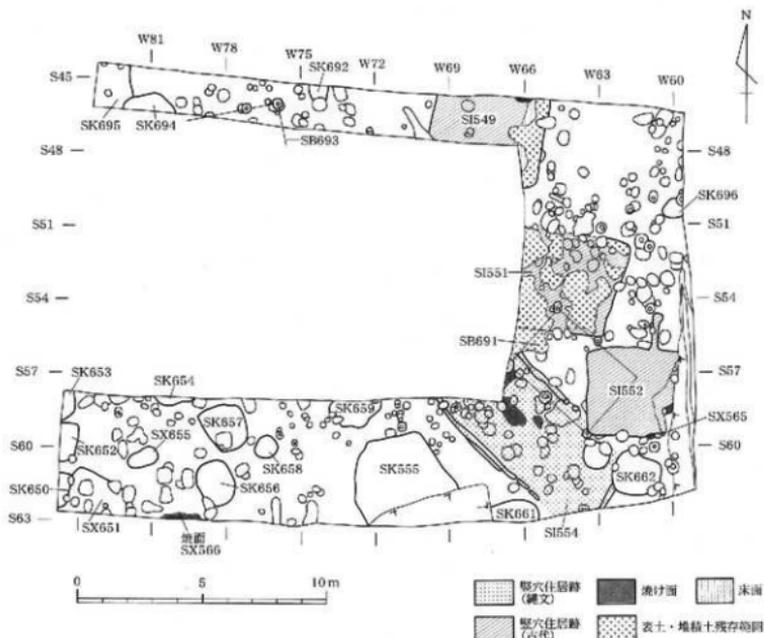
4. D区

竪穴住居跡4軒、竪穴状遺構1基、土壌16基、焼け面1カ所、掘立柱建物跡2棟などを確認した(第18図、第3表)。竪穴住居跡は調査区東側、土壌、柱穴は調査区全域に多数認められる。

(1) 縄文時代前期後葉～中期前葉

①竪穴住居跡

1軒確認した(SI 554)。平面形は長径8m前後、短径40mの隅丸長方形である。方向はおよそN



第18図 D区平面図

—40°—Wである。住居の長軸線上に3ヵ所焼け面がある。出土遺物はない。

②土壌

1基確認した（SK 555）。南側を壊されているため規模は不明だが、1辺4m前後の不整形のものと思われる。堆積土は黒褐色シルト主体の自然堆積層である。遺物は堆積土から縄文時代中期前葉大木7式期の土器が出土している（第19図）。

(2) 縄文時代晩期後葉～弥生時代前期

土壌15基を確認した。調査区の西側に多く分布する。平面形が長径15～20mの隅丸長方形、楕円形のもの（SK 650・652・653・654・656・657・659・661・662・694・695）、長径10m前後の円形・楕円形のもの（SK 655・658・692・696）がある。堆積土は暗褐色～褐色シルト主体である。出土遺物はない。

これらの土壌は位置や平面形、規模等の特徴からK区南東で確認した縄文時代晩期の土壌群の延長と考えられる（註3）。

(3) 古代

①竪穴住居跡

竪穴住居跡は3軒確認した（SI 549・551・552）。なお、竪穴住居跡が竪穴状遺構が区別がつかないものも1軒（SX 651）確認したが、この項で扱う。

竪穴住居跡の平面形がわかるものはないが、いずれも一辺40m前後の隅丸方形と思われる。SI 552は北辺やや東寄りに煙道が付く。SI 549は東側に拡張（A→B）されており、A段階の焼け面とB段階の床面を一部確認した。方向はほぼ真北方向のもの（SI 552）、N—10°—Eのもの（SI 549）、N—20°—Eのもの（SI 551）がある。堆積土はいずれも地山層を含む暗褐色シルト主体の自然堆積層である。遺物はSI 549堆積土から土師器、縄文時代前期大木5式期の土器が出土している（第3表）。

SX 651は調査区南西端S 63・W 81付近で確認した。一辺30mの隅丸方形に地山ブロックを含む褐色土が痕跡的に認められる。出土遺物はない。

②掘立柱建物跡

1棟確認した（SB 691）。桁行2間、梁行1間の北西—南東方向（N—50°—W）の建物跡である。SI 551より新しくSI 552より古い。建物総長は桁行40m（20・20）、梁行30mである。



番号	区	遺構・層位	部 種	支線・装飾の特徴	時期	写真
1	D	SK555—遺構	深鉢	口縁：波状縁。波頭彫刻目文。口唇部刻目文	大木7	14-2
2	D	SK662—土壌	深鉢	胴部：半葉竹管による横紋平行波状文・衝面伏波状文。氣状波状文	大木6	14-4
3	D	SI 551—地	深鉢	口縁：波状縁。半葉竹管による口縁に於う花飾文・縦位連続波状文・縦位平行波文	大木6～7a	14-1

第19図 D区 SK555・662土壌、SI 551住居跡出土土器

(4) 中近世

掘立柱建物跡1棟を確認した(S B 693)。北側柱列2間分(柱間寸法14・14)を検出しただけで詳細は不明である。柱穴は直径40cm前後の円形で埋土は暗褐色シルト主体である。出土遺物は無い。

(5) 時期不明

時期不明の遺構にはS 60・W60付近の焼け面2ヵ所(S X 564・565)、S 63・W80の焼け面(S X 566)などがある。S X 564～566焼け面は基本的に竪穴住居に伴うものと考えられるが、出土遺物等もなく詳細は不明である。ただしS X 564・565焼け面はS I 552竪穴住居跡より古く、古代以前である。

5. E区・M区

E区とM区は連続する調査区であるため一括して説明する。

竪穴住居跡23軒、土壇2基、土器埋設遺構1基などを確認した(第20・21図、第4表)。その他、調査区南西に近世の大規模な掘立柱建物跡や柱穴がある。E・M区では竪穴住居跡を多く確認している。

(1) 縄文時代前期後葉～中期前葉

① 竪穴住居跡

21軒確認した。調査区中央のS I 719～721・732は厚さ20～30cmの堆積土が残っていたが、他は床面または床面近くまで削平されており、周溝のみ確認したもの(S I 581・830)や、住居の平面プランが不明確なもの(S I 581・583・584・716・722・744・746・833・834)もある。このうちS I 583・584・831住居跡では床面の一部を検出し、長軸線方向に焼け面を連続して確認した。

平面形がわかるものは少ないが、長楕円形のものや隅丸方形・長方形のものに大別できる。規模は長方形のもの長径8m以上、短径3～4m前後(S I 579・714)、隅丸方形・長方形のものは1辺6～7mのもの(S I 581・716・720)と1辺4～5mのもの(719・721・722・732)がある。方向は東西方向の辺でみると、ほぼ東西方向のもの(S I 579・714・721・722)、W-10～20° —N(S I 581・583・584・831)、W-30° —N(S I 716・744・837)、W-20° —S(S I 719・720・732・832・834)がある。なお、S I 746住居跡は古代のS I 736住居跡に覆され平面形等の詳細は不明であるが、断面観察で大木5式の土器が認められることなどから大木5式期の住居跡と思われる。

遺物は人木5～7b式期の土器が出土しているが、大木6～7a式期のものが主体である(第23～34図、第4表)

【S I 719 住居跡】

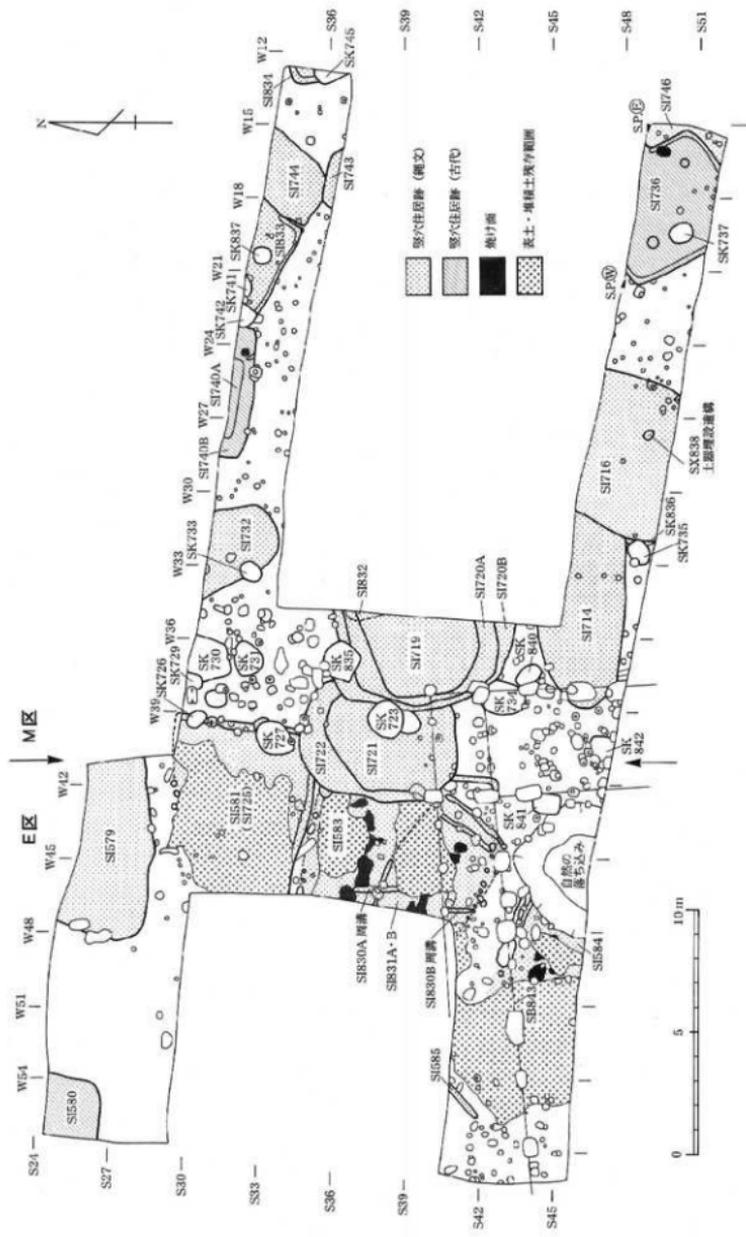
〔位置・検出状況〕 調査区中央S 40・W36付近で確認した(第21・22図)。調査区東端と、それに直交するトレンチを設定し、床面、焼け面、周溝などを検出した。

〔重複〕 S I 720 A・Bより新しく、S I 832より古い。

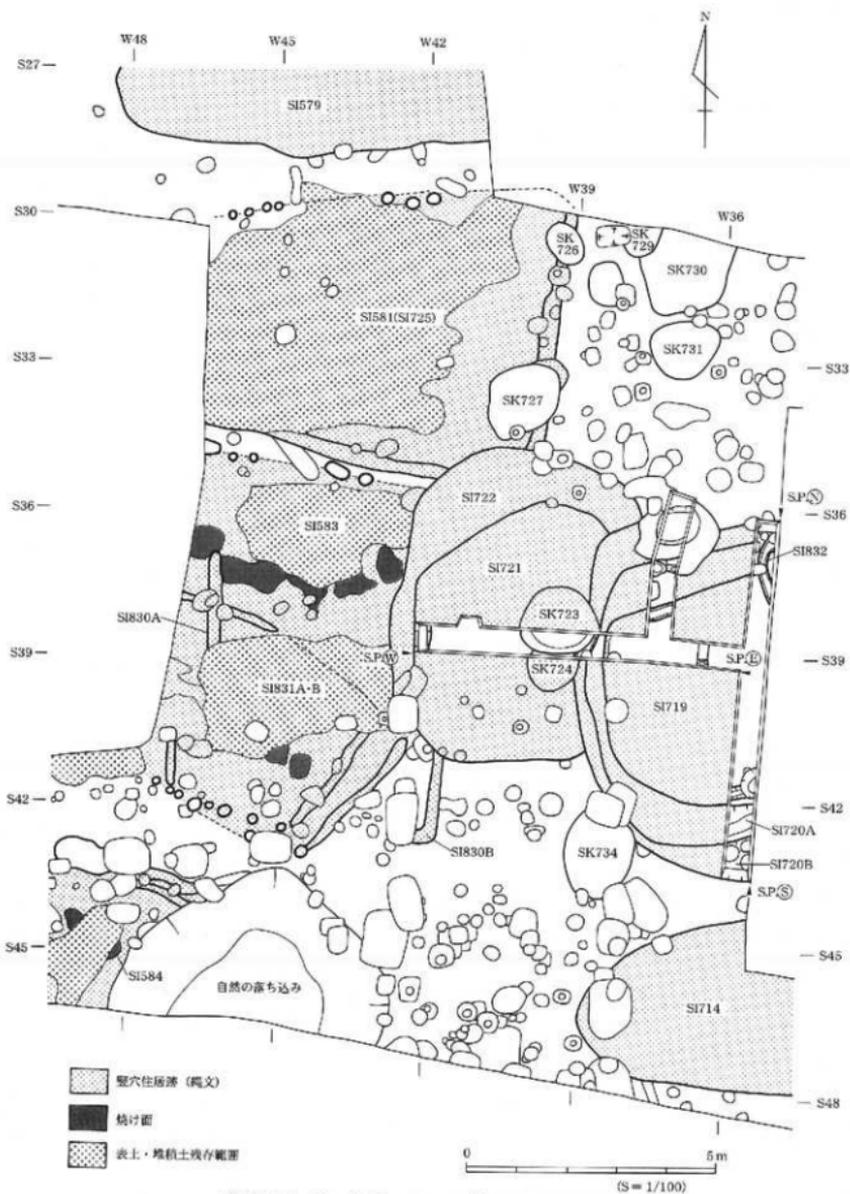
〔平面形・規模〕 長径40m以上、短径40mで、平面形は長楕円形か長方形と思われる。

〔壁〕 壁は削平または崩落のため本来の立ち上がりは不明である。高さは40cm以上である。

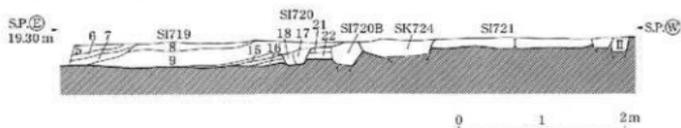
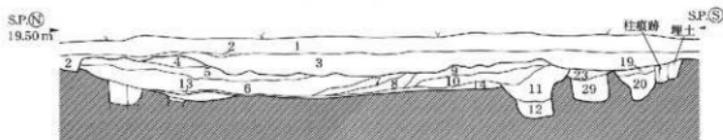
〔床面〕 本住居跡より古いS I 720 A・B住居跡堆積土上に地上土主体の粘上質シルトを厚さ5～10cm貼り、床面を作っている。中央がやや窪み、壁際がやや高くなっている。床面には生活



第20図 E・M区平面図

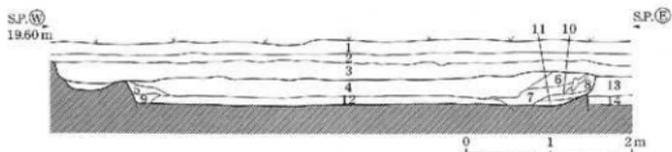


第 21 図 E・M区 SI 719 住居跡付近平面図



層 No	分類	土色・土性		特徴等	
1	表土・耕作土				
2	耕作土	10 Y R 2/3	黄褐色	シルト	
3	耕作後の砂土	10 Y R 3/3	暗褐色	砂質シルト	
4	SI 719 準植土	7.5 Y R 3/2	黄褐色	砂質シルト	
5		7.5 Y R 3/2	黄褐色	砂質シルト	
6		10 Y R 3/4	暗褐色	砂質シルト	
7		10 Y R 4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	
8		10 Y R 2/3	黄褐色	砂質シルト	
9		10 Y R 2/3	黄褐色	粘土質シルト	
10		7.5 Y R 3/2	黄褐色	砂質シルト	
11	周溝抜き穴埋土	10 Y R 3/4	暗褐色	シルト	
12		10 Y R 4/4	黄褐色	粘土	
13		検出面	7.5 Y R 3/4	暗褐色	粘土
14		埋設時の堆積層	10 Y R 2/3	黄褐色	粘土
15	粘土床	10 Y R 4/6	黄褐色	粘土質シルト	
16		10 Y R 4/4	黄褐色	粘土	
17	縦柱	10 Y R 3/3	暗褐色	粘土質シルト	
18	縦柱囲り方型土	10 Y R 4/4	黄褐色	粘土	
19	SI 720 B 周溝抜き穴	10 Y R 3/4	暗褐色	粘土	
20		10 Y R 4/4	黄褐色	粘土	
21	SI 720 B 粘土床	10 Y R 4/6	黄褐色	粘土	
22		10 Y R 3/4	暗褐色	粘土	
23	SI 720 A 周溝抜き穴	10 Y R 2/3	黄褐色	粘土	
24		10 Y R 3/3	暗褐色	粘土	

E・M区 SI 719・720 A・B住居跡断面図



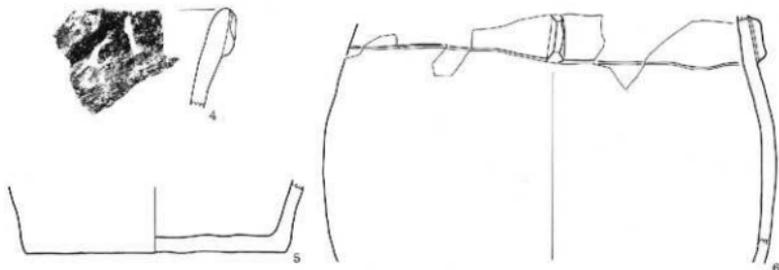
層 No	分類	土色・土性		特徴等
1	表土・耕作土	10 Y R 3/4	暗褐色	シルト
2	回割作土	10 Y R 3/3	暗褐色	シルト
3	盛土	10 Y R 2/3	黄褐色	シルト
4	SI 736 人為的な堆土	10 Y R 4/3	にぶい黄褐色	シルト
5		7.5 Y R 3/4	暗褐色	シルト
6	カマド跡土	7.5 Y R 4/3	黄褐色	シルト
7		7.5 Y R 3/2	黄褐色	シルト
8	7.5 Y R 3/4	暗褐色	粘土質シルト	
9	溝溝埋土	10 Y R 2/3	黄褐色	シルト
10	埋設時の堆積	7.5 Y R 4/4	黄褐色	シルト
11	検出面	6 Y R 3/6	暗赤褐色	粘土質シルト
12	粘土床	10 Y R 4/4	黄褐色	粘土
13	SI 746 堆積土	10 Y R 3/3	暗褐色	砂質シルト
14		7.5 Y R 3/2	黄褐色	シルト

E・M区 SI 736・746住居跡断面図

第22図 E・M区 SI 719・720A・B・736・746住居跡断面図



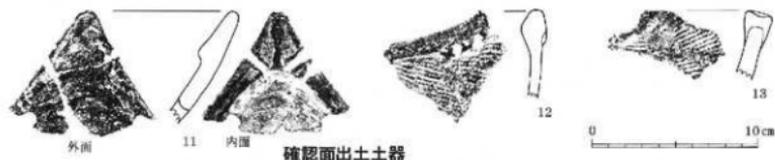
SI 579 出土土器



SI 581(725) 出土土器



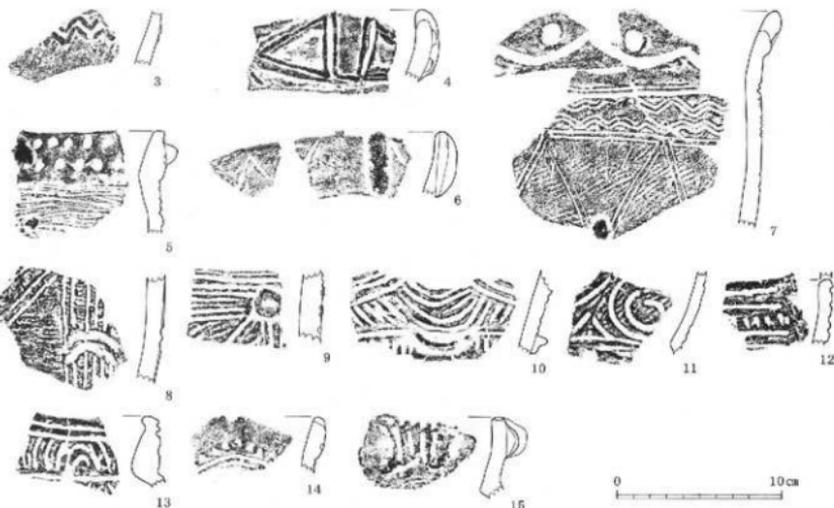
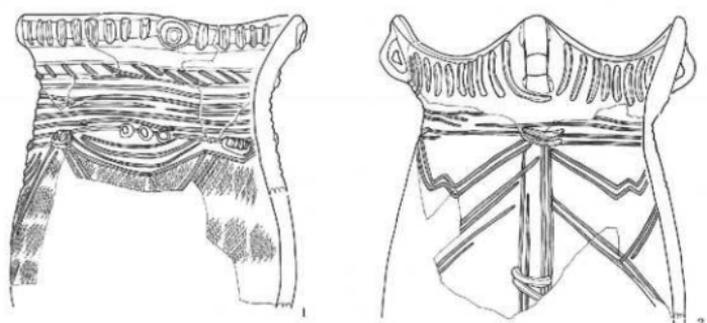
SI 583 出土土器



確認面出土土器

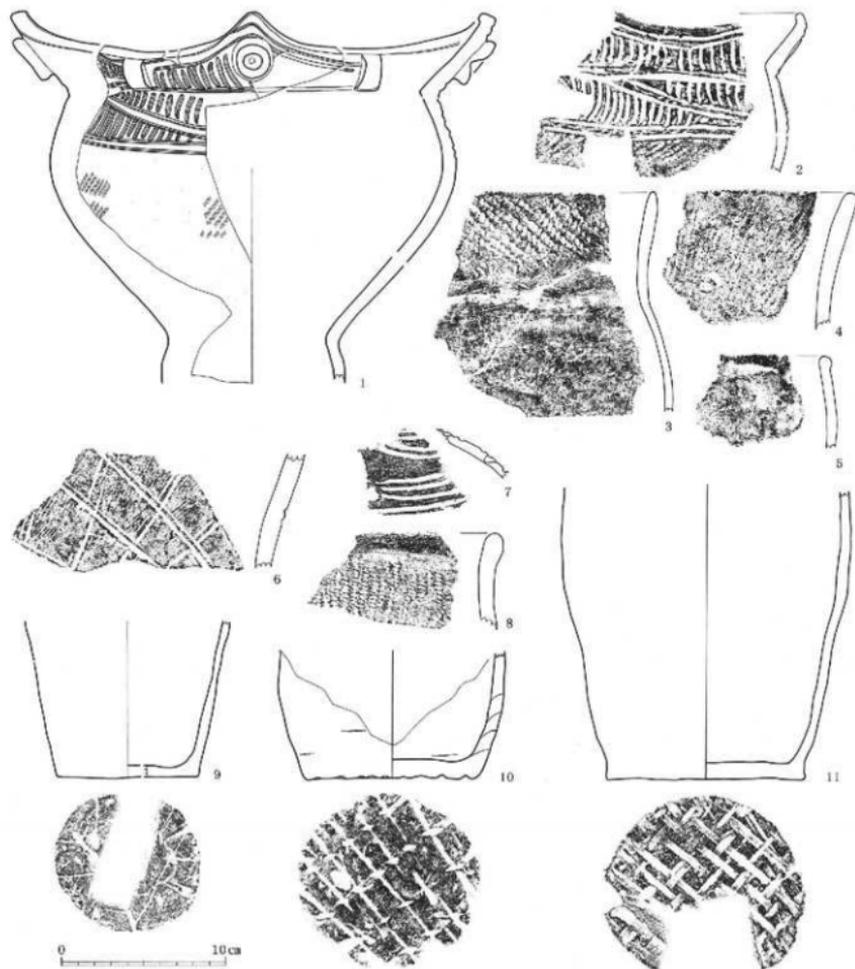
番号	区	遺構・層位	層 種	文様・胎地の特徴	時期	写真
1	E	SI 579 - 一室	深鉢	口縁部:突起のつく平縁「く」字状沈線文、縄文(RL)。結節文	大木6~7	14-6
2	E	SI 579 - 一室	深鉢	口縁部:波状縁、弧状沈線文	大木6	14-8
3	E	SI 579 - 一室	深鉢	口縁部:平縁、刻目文、平行沈線文、内面沈線文 柄部:刻目文	新屋築室-築5	14-6
4	E	SI 581(725) - 遺構	深鉢	口縁部:波状縁、縦位沈線文、弧状沈線文	大木6	14-7
5	E	SI 581(725) - 一室	深鉢	底様:網代巻	不明	
6	E	SI 581(725) - 遺構	深鉢	胎地:現位巻帯	大木7 a	14-9
7	E	SI 583 - 遺構	深鉢	口縁部:波状縁、斜位連続短沈線文	大木6	14-10
8	E	SI 583 - 遺構	深鉢	口縁部:平縁、横位巻帯、手負竹管による縦位連続短沈線文(隠帯上)	大木6~7 a	14-12
9	E	SI 583 - 遺構	深鉢	口縁部:波状縁、波頂部に隆帯、縦位刻目文、区画地縁文、刻目文(溝線上)、口縁に若干平行沈線文、縦位平行沈線文、内面横位沈線文	大木7 a	14-13
10	E	SI 583 - 遺構	深鉢	口縁部:平縁、区画沈線文、網文(L)	大木7	14-11
11	E	遺構	深鉢	口縁部:波状縁、内面斜位短沈線文、穿孔(編成後)	大木7 a	14-14
12	E	遺構	深鉢	口縁部:波状縁、波頂部に刻目文、縄文(L,R)	大木7 a	14-15
13	E	遺構	深鉢	口縁部:突起のつく平縁、縄文(L)	大木7	14-16

第 23 図 E・M区 SI 579・581(725)・583 住居跡出土土器



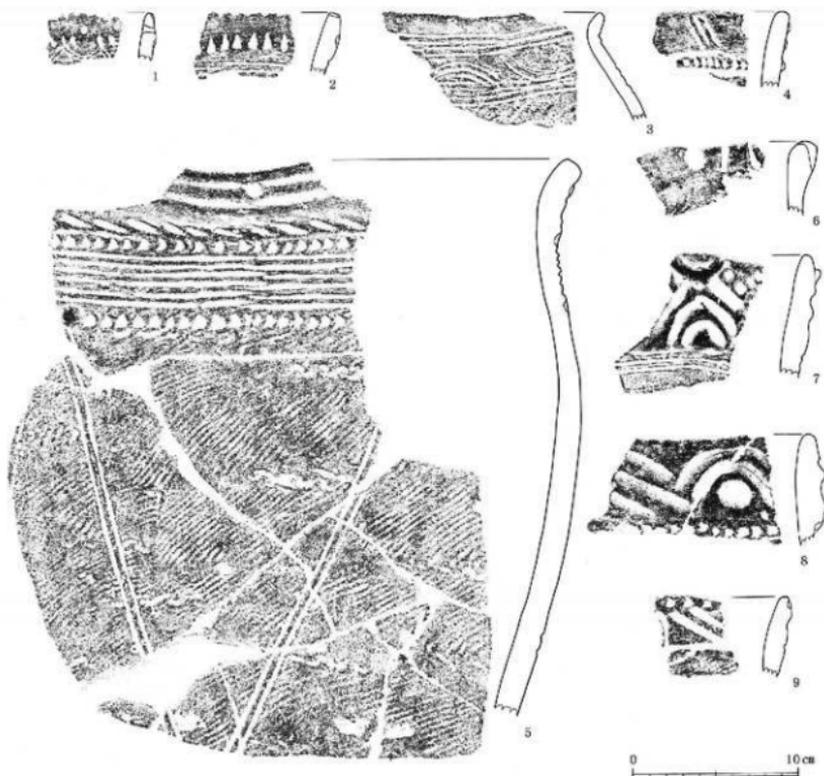
番号	区	遺構・層位	器名	文様・装飾の位置	時期	写真
1	M	SI 716 - Ⅱ SI 714 - Ⅱ	深鉢	口縁部：平線、縦位連続短沈線文、円形貼付文、円形の穿孔（貼付文上）、縦位踏線、斜位連続短沈線文（除扉上） 胴部：半截竹管による横位平行沈線文・平行沈線文、円形貼付文、横凹形貼付文、縦位刻目文（横凹形貼付文上）、縄文（L）	大木6	15-1
2	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	口縁部：波状線、縦位横状貼付文、弧状沈線文 胴部：半截竹管による平行沈線文、縄文	大木6	15-2
3	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	胴部：断歯状粘土細貼付文、縄文	大木6	15-4
4	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	口縁部：平線、縦位、斜位踏線、粘土細貼付文（除扉上）	大木6	15-5
5	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	口縁部：平線、粘土踏線付文、円形竹管による刻目文 胴部：円形貼付文、半截竹管による横位平行沈線文	大木6	15-6
6	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	口縁部：平線、縦位貼付文、縦位沈線文	大木6~7 a	15-7
7	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	口縁部：波状線、円形の穿孔、踏線文 胴部：半截竹管による横位平行沈線文・断歯状沈線文・平行沈線文、粘土細貼付文、縄文（L）	大木6	15-8
8	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	胴部：弧状文、半截竹管による平行沈線文、縄文	大木6	15-8
9	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	胴部：半截竹管による平行沈線文、円形貼付文、縄文	大木6	15-9
10	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	口縁部：波状線、弧状貼付文、半截竹管による口縁に沿う平行沈線文・弧状沈線文・斜位連続短沈線文・縦位刻目文	大木6	15-10
11	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	口縁部：波状線、断歯状沈線文、縄文	大木6~7 a	15-11
12	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	口縁部：平線、縦位粘土細貼付文（側面）、半截竹管による横位平行沈線文、縦位刻目文	大木7	15-12
13	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	口縁部：波状線、口縁に沿う平行沈線文、弧状沈線文、縦位連続短沈線文、横位沈線文	大木7 a	15-13
14	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	口縁部：波状線、断歯状刻目文、口縁に沿う断歯状刻目文・半截竹管による平行沈線文	大木6~7 a	15-14
15	M	SI 716 - Ⅱ	深鉢	口縁部：平線、口縁刻目文、方形貼付文、縦位短沈線文（貼付文上）	大木7 ?	15-15

第 24 図 E・M 区 SI 716 住居跡出土土器（1）



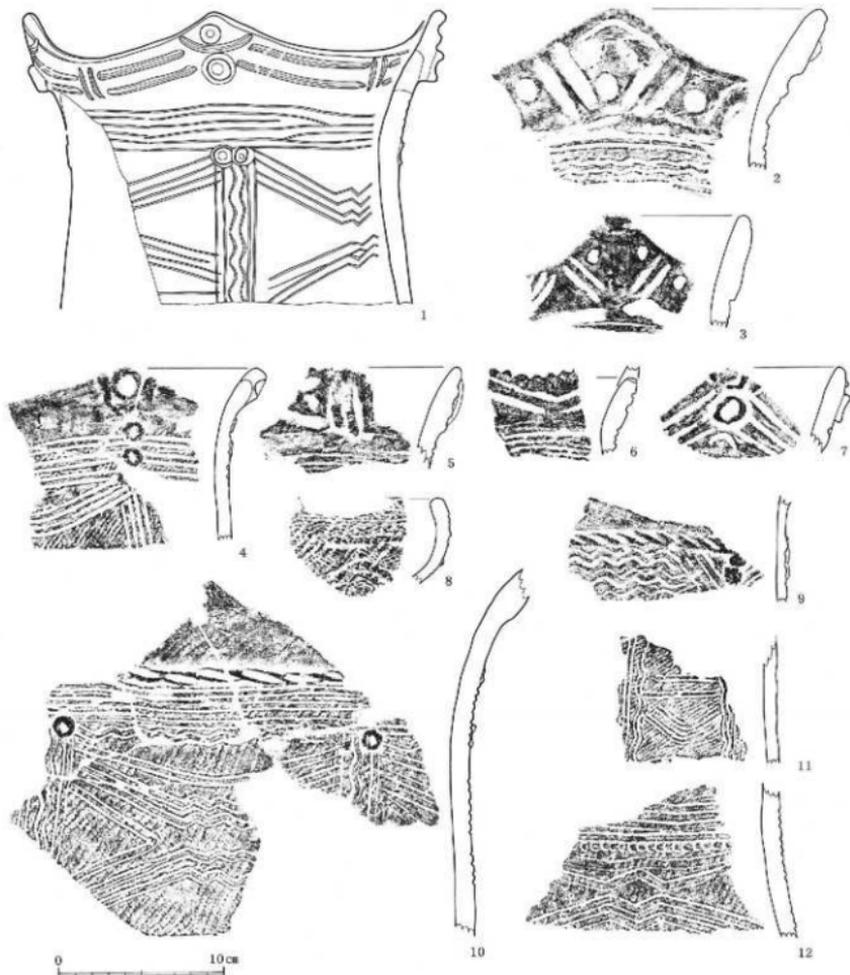
番号	区	遺跡・層位	器種	文様・装飾の特徴		
				時期	写真	
1	M	SI 716 - 堆	深鉢	口縁部：放射状、円形貼付文、円形の穿孔（貼付文上）、幅位貼付文、手蔵竹管による口縁に沿う沈線文・幅位連続沈線文・横位平行沈線文 胴部：手蔵竹管による斜位区画平行沈線文・渦巻状沈線文・横位平行沈線文、縄文(L) 金糸斜形	大木 7 a	15-16
2	M	SI 716 - 堆	深鉢	口縁部：波状縁、手蔵竹管による口縁に沿う沈線文・斜位連続沈線文・横位平行沈線文 胴部：手蔵竹管による斜位区画平行沈線文・横位平行沈線文、縄文(L,R) 金糸斜形	大木 7 a	15-17
3	M	SI 716 - 堆	深鉢	口縁部：平縁、縄文 (R,L,R) 胴部：無文	不明	15-18
4	M	SI 716 - 堆	深鉢	口縁部：平縁、縄文	不明	15-20
5	M	SI 716 - 堆	深鉢	口縁部：平縁、無文 胴部：無文	不明	15-20
6	M	SI 716 - 堆	深鉢	胴部：手蔵竹管による格子状沈線文、縄文(L)	大木 6 ~ 7	15-23
7	M	SI 716 - 堆	煮鉢	胴部：変形上字文（胎面なし）	大木 6 - 7	15-21
8	M	SI 716 - 堆	深鉢	口縁部：平縁、無文 胴部：縦走縄文(L,R)	不明	15-22
9	M	SI 716 - 堆	深鉢	胴部：無文 底部：木炭痕	不明	15-24
10	M	SI 716 - 堆	深鉢	胴部：無文 底部：銅代痕	不明	15-25
11	M	SI 716 - 堆	深鉢	胴部：無文 底部：銅代痕	不明	15-26

第25図 E・M区 SI 716住居跡出土土器（2）



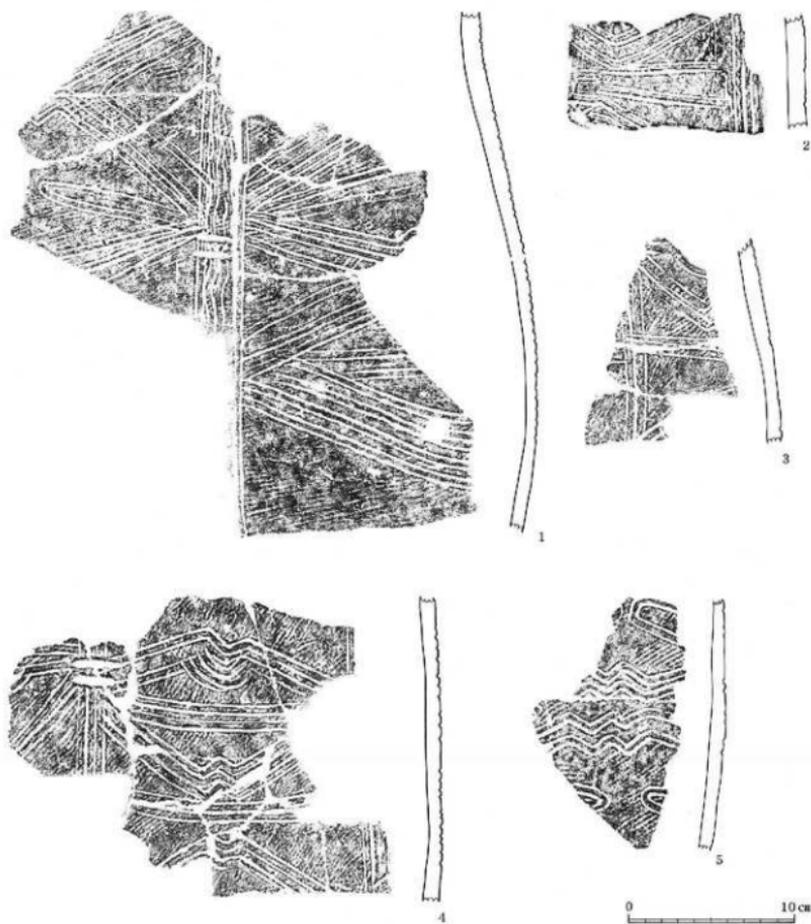
番号	区	発掘・層位	器 種	文様・装飾の特徴	時期	写真
1	M	SI 719-地	深鉢	口縁部：平縁、口唇部刻目文、垂線刻目文、半載竹管による垂弧文、穿孔（横成筒）	大木5	
2	M	SI 719-地	深鉢	口縁部：平縁、口唇部刻目文、垂線刻目文、半載竹管による横位平行沈線文	大木5	16-2
3	M	SI 719-地	深鉢	口縁部：平縁、刻文、胴部：半載竹管による平行沈線文・垂弧文、刻文	大木5	16-4
4	M	SI 719-地	深鉢	口縁部：平縁、斜位粘土貼付文、横位刻目、刻目文（横成筒）	大木5 ?	16-3
5	M	SI 719-地 SI 721-地	深鉢	口縁部：垂弧縁、口縁に沿う平行沈線文、内縁の穿孔、横位垂帯、斜位連続短沈線文（縁帯上） 胴部：三角部の連続刻目、半載竹管による横位平行沈線文・平行沈線文、円形刻付文、刻文(L&R)	大木6	16-1
6	M	SI 719-地	深鉢	口縁部：垂弧縁、横位刻目文	大木6	16-5
7	M	SI 719-地	深鉢	口縁部：平縁、垂弧刻付文、斜位沈線文、垂弧沈線文、側面伏線文、半載竹管による横位平行沈線文	大木6	16-6
8	M	SI 719-地	深鉢	口縁部：平縁、円形の穿孔、垂弧沈線文、斜位平行沈線文、半載竹管による横位連続刻目文	大木6	16-8
9	M	SI 719-地	深鉢	口縁部：平縁、横位連続刻目文；斜位平行沈線文 胴部：刻文	大木6	16-7

第26図 E・M区 SI 719住居跡出土土器（1）



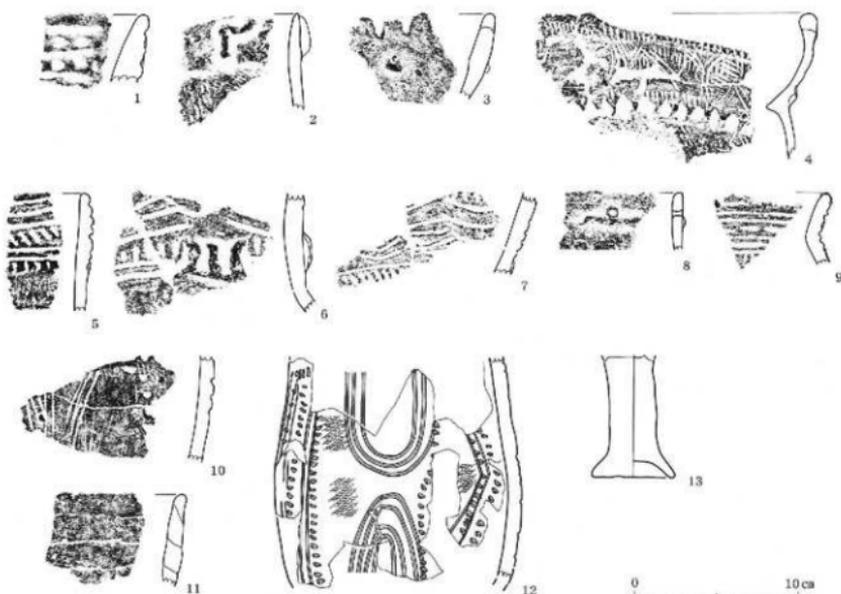
番号	区	遺構・層位	器種	文様・裝飾の特徴	時期	写真
1	M	SI 719 - 準	深鉢	口縁部：波状線、円形の穿孔、弧状沈線文、円形貼付文、口縁に沿う平行沈線文、縦位加沈線文 胴部：半截竹管による横位平行沈線文・平行沈線文、円形貼付文、縄文	大木6	10-11
2	M	SI 719 - 準	深鉢	口縁部：波状線、輪状貼付文、円形の穿孔、山形加沈線文、斜位平行沈線文 胴部：半截竹管による横位平行沈線文・平行沈線文	大木6	16-9
3	M	SI 719 - 準	深鉢	口縁部：波状線、輪状貼付文（斜位）、円形の穿孔、斜位平行沈線文 胴部：半截竹管による横位沈線文、円形貼付文、縄文(L.R)	大木6	16-10
4	M	SI 719 - 準	深鉢	口縁部：波状線、円形の穿孔、輪状貼付文 胴部：半截竹管による横位平行沈線文・平行沈線文、円形貼付文、縄文(L.R)	大木6	16-14
5	M	SI 719 - 準	深鉢	口縁部：平線、輪状貼付文、円形の穿孔、斜位沈線文 胴部：半截竹管による横位平行沈線文	大木6	16-15
6	M	SI 719 - 準	深鉢	口縁部：波状線、口唇部刻目文、口縁に沿う平行沈線文 胴部：半截竹管による横位平行沈線文	大木6	16-16
7	M	SI 719 - 準	深鉢	口縁部：波状線、弧状沈線文、口縁に沿う平行沈線文、円形貼付文、弧状沈線文	大木6?	16-13
8	M	SI 719 - 準	深鉢	胴部：半截竹管による横位平行沈線文・弧状沈線文 口縁部：横位沈線文、弧状沈線文、半截竹管による平行沈線文	大木6	16-17
9	M	SI 719 - 準	深鉢	胴部：横位刻目文（除帯上）、円形貼付文、半截竹管による平行沈線文	大木6	16-18
10	M	SI 719 - 準、SI 7	深鉢	口縁部：細文(L.R) 胴部：横位刻目文、斜位貼付文、半截竹管による横位平行沈線文、平行沈線文、円形貼付文、縄文(L.R)	大木6	16-12
11	M	SI 719 - 準	深鉢	胴部：半截竹管による平行沈線文、縄文(L.R)	大木6	16-19
12	M	SI 719 - 準	深鉢	胴部：半截竹管による横位平行沈線文・横位刻目文・平行沈線文、縄文	大木6	16-20

第 27 図 E・M区 SI 719 住居跡出土土器 (2)



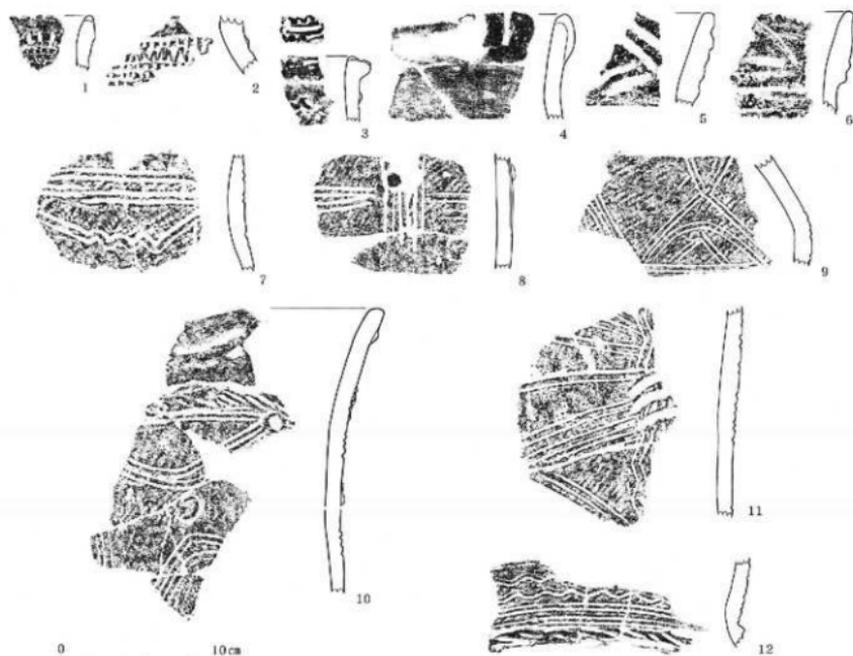
番号	区	遺構・層位	器種	文様・装飾の特徴	時期	写真
1	M	SI 719 一層	深鉢	胴部：半截竹管による平行波線文、横位短波線文、縄文(L)	大木6	17-5
2	M	SI 719 一層	深鉢	胴部：半截竹管による平行波線文、縄文	大木6	17-4
3	M	SI 719 一層	深鉢	胴部：半截竹管による平行波線文、縄文	大木6	17-2
4	M	SI 719 一層	深鉢	胴部：半截竹管による平行波線文、横位短波線文、縄文(L)	大木6	17-1
5	M	SI 719 一層	深鉢	胴部：半截竹管による平行波線文、縄文(L,R)	大木6	17-3

第28図 E・M区 SI 719住居跡出土土器(3)



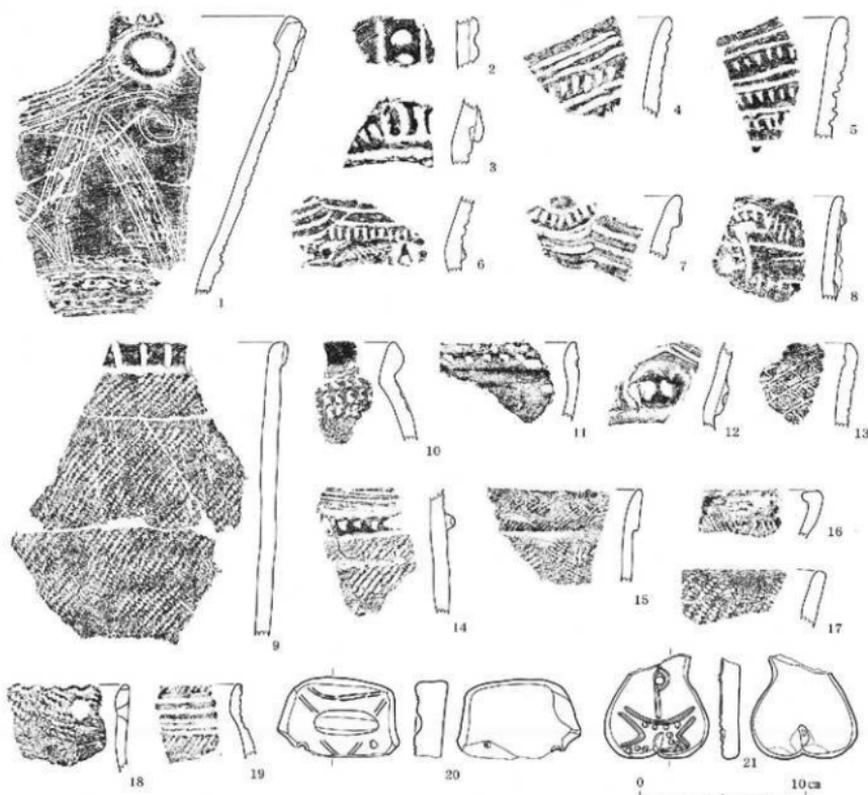
番号	区	遺構・層位	器種	文様・装飾の特徴	時期	写真
1	M	SI 719-堆	甗鉢	口縁部：平縁、横位沈線文、三角形の連続彫去	大木6~7	17-6
2	M	SI 719-堆	甗鉢	口縁部：平縁、縦位足付文、胴文、刺部：縄文	大木7 a	17-7
3	M	SI 719-堆	甗鉢	口縁部：波状縁、波状彫刻目文、輪上磨込付文	大木7	17-8
4	M	SI 719-遺構	深鉢	突起のつく平縁、縦位連続彫目文、縦位沈線文、縦位連続知沈線、三角形の連続彫去 胴部：縄文	大木7 a	17-9
5	M	SI 719-堆	深鉢	口縁部：波状縁、口縁に向う平行沈線文、縦位平行沈線文、刺部：縦位連続彫目文	大木7	17-10
6	M	SI 719-堆	深鉢	口縁部：波状縁、口縁に向う平行沈線文、弧状沈線文、縦位連続知沈線文、横位沈線文、方形貼付文、縦位知沈線文（貼付文上）	大木7	17-11
7	M	SI 719-堆	深鉢	口縁部：縦位彫目文、磨込文、横位沈線文、縦位連続彫目文	大木7	17-12
8	M	SI 719-堆	深鉢	口縁部：平縁、横位磨込、穿孔（磨込後）	大木6~7	17-13
9	M	SI 719-堆	深鉢	口縁部：突起のつく平縁、縦位貼付文（口唇部）、刺目文（口唇部）、半截竹管による横位平行沈線文、縦位連続知沈線文	大木6~7	17-14
10	M	SI 719-堆	深鉢	胴部：半截竹管による平行沈線文、三角形の連続彫去	大木7 b	17-15
11	M	SI 719-堆	深鉢	口縁部：平縁、灰文	不明	17-16
12	M	SI 719-堆	深鉢	胴部：半截竹管による平行沈線文、三角形の連続彫去、縄文(RL)	大木7 b	17-17
13	M	SI 719-素	甗鉢	胴部：灰文	不明	17-18

第29図 E・M区 SI 719住居跡出土土器(4)



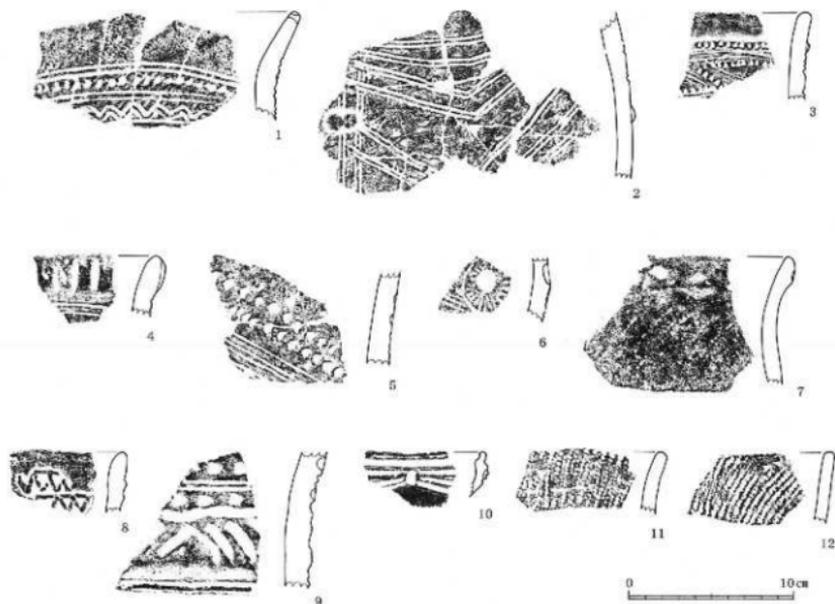
番号	区	遺構・層位	目録	文様・編織の特徴	時期	写真
1	M	SI 721 一庫	深鉢	口縁部：平織。口唇部斜目文。底位斜目文。縦位幾何。濃縮羽突列	大木5	18-1
2	M	SI 721 一庫	深鉢	胴部：横位幾何。濃縮斜目文（縁部上）。縦位斜目文（縁部上）	大木5	18-3
3	M	SI 721 一庫	深鉢	口縁部：平織。平行する斜目文（口唇部）。縦位斜目文（縁部上）	大木5	18-2
4	M	SI 721 一庫	深鉢	口縁部：突起のつく平織。縦位幾何文	大木6	18-4
5	M	SI 721 一庫	深鉢	口縁部：縦位幾何。斜位幾何文	大木6	18-5
6	M	SI 721 一庫	深鉢	口縁部：縦位幾何。斜位幾何文。横位幾何文	大木6	18-6
7	M	SI 721 一庫	深鉢	胴部：半籠竹管による横位平行縦文・平行縦文。縦文（L,R）	大木6	18-7
8	M	SI 721 一庫	深鉢	胴部：半籠竹管による平行縦文。縦位斜目文。縦文（L）	大木6	18-8
9	M	SI 721 一庫	深鉢	胴部：半籠竹管による平行縦文。縦位斜目文（縁部上）。縦文（L）	大木6	18-12
10	M	SI 721 一庫	深鉢	口縁部：濃縮斜目文。縦位幾何。斜位幾何文（縁部上）。半籠竹管による平行縦文。縦位斜目文	大木6	18-10
11	M	SI 721 一庫	深鉢	胴部：半籠竹管による平行縦文。縦位幾何文。縦文	大木6	18-9
12	M	SI 721 一庫	深鉢	口縁部：半籠竹管による横位平行縦文・縦位幾何文。横位幾何。縦位斜目文（縁部上）	大木6	18-13

第30図 E・M区 SI 721 住居跡出土遺物（1）



番号	区	遺構・層位	器種	文様・装飾の特徴	時期	写真
1	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：波状縁。波頂部刻目文。腹位加沈線文(内部)。環状縁線文。平織竹管による口縁に沿う平行沈線文・垂線刻目文・向中状平行沈線文・平行沈線文。横位縁飾。環状唇文(絶縁上)	大木 7a	18-11
2	M	SI 721-1堆	深鉢	胴部：環状縁飾。指環状耳環(須藤之)	大木 7b	18-14
3	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：方形貼付文。腹位加沈線文(貼付文上)。斜位刻目文。横位沈線文	大木 7	18-15
4	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：波状縁。口縁に沿う平行沈線文。横位連続刻目文	大木 7	18-16
5	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：波状縁。平織竹管による口縁に沿う平行沈線文。腹位連続刻目文。軸十握貼付文	大木 7	18-17
6	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：波状縁。環状縁線刻目文。貼付文。刻目文(貼付文上)。脚文	大木 7	18-18
7	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：波状縁。環状縁飾。連続刻目文(縁部上)。口縁に沿う平行沈線文	大木 7	18-19
8	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：平縁。環状縁飾。刻目文(縁部上)。腹位刻目文。腹位沈線文	大木 7	18-20
9	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：平縁。腹位刻目文。胴部：環文(R.R)	大木 7	18-21
10	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：平縁。環文。胴部：平織竹管による連続刻目文	大木 7	18-22
11	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：平縁。三角形の連続刻目文。胴部：無文	大木 7	18-23
12	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：斜位沈線文。方形貼付文。指環状耳環(貼付文上)。波状沈線文	大木 7	18-24
13	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：平縁。格子状沈線文	時期不明	18-25
14	M	SI 721-1堆	深鉢	胴部：平織竹管による環状平行沈線文。腹位縁飾。三角形の連続刻目文(縁部上)。環文(R)	大木 7	18-26
15	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：平縁。口縁部～胴部：環文(R)	不明	18-27
16	M	SI 721-1堆	鉢	口縁部：平縁。環文	不明	18-28
17	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：平縁。環文(R.R)	不明	18-29
18	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：平縁。口唇部刻目文。環文(R.R)。穿孔(軸成地)	不明	18-30
19	M	SI 721-1堆	深鉢	口縁部：平縁。口唇部刻目文。腹位平行沈線文。内面腹位沈線文。胴部：環文(R.R)	後期後葉	18-31
20	M	SI 721-1堆	土俵	胴部～胴部表：平織竹管による平行沈線文・波状文。胴内面のくぼみ。穿孔。胴部～胴部表：腹位貼付地帯跡	大木 6 ~ 7b	18-32
21	M	SI 721-1堆	土俵	胴部～胴部表：中輪縁。環状沈線文。竹管状工具による連続刻目文。腹位刻目文による溝の表現。胴部～胴部表：腹位刻目文による溝の表現	大木 6 ~ 7b	18-33

第31図 E・M区 SI 721住居跡出土物(2)



番号	区	遺構・層位	部 種	文様・装飾の特徴	時 期	写 真
1	M	SI 714-壺	深鉢	口縁部：波状線、半截竹管による平行沈線文、横位連続刺目文、縄文(LR) 胴部：半截竹管による縦位沈線文・横位沈線文	大木6	14-17
2	M	SI 714-壺	深鉢	胴部：半截竹管による平行沈線文、円形刺目文	大木6	14-18
3	M	SI 714-壺	深鉢	口縁部：平縁、横位連続刺目文(種非上) 胴部：半截竹管による横位平行沈線文・波状文、刺目文	大木5	14-19
4	M	SI 732-壺	深鉢	口縁部：平縁、横位連続沈線文、半截竹管による横位平行沈線文	大木6	14-20
5	M	SI 732-壺	深鉢	口縁部：三角形の連続刺目文、半截竹管による横位平行沈線文	大木6	14-23
6	M	SI 732-壺	深鉢	口縁部：円形の穿孔、系沈線文、連続沈線文	大木7	14-21
7	M	SI 732-壺	深鉢	口縁部：平縁、縄文(LR)	不明	14-24
8	M	SI 720A-壺	深鉢	口縁部：平縁、帯垂状粘土継ぎ付文	大木5	14-22
9	M	SI 722-壺	深鉢	口縁部：半截竹管による横位平行沈線文、三角形の刺目文、山形短沈線文、横位短沈線文	大木6?	14-25
10	M	SI 743-壺	高杯	口縁部：平縁、内面横位沈線文、胴部：突形工字文(粘痕あり)	堀込~磯野	14-26
11	M	SI 744-壺	深鉢	口縁部：平縁、縄文(LR)	不明	14-28
12	M	SI 744-壺	深鉢	口縁部：平縁、縄文(LR)	不明	14-27

第 32 図 E・M区 SI 714・732・720A・722・743・744 住居跡出土器



図号	区	遺構・方位	形種	文様・装飾の特徴	特徴	写真
1	M	SK728 - 遺構	深鉢	口縁部：平縁、半截竹管による幅寄せ平行沈線文	大木 6? 18-34	
2	M	SK728 - 遺構	深鉢	口縁部：副竹縁帯、連続斜目文（縁帯上）、横位連続斜目文	大木 7a 18-35	
3	M	SK734 - 遺構	深鉢	胴部：半截竹管による平行沈線文、縄文	大木 6 18-36	
4	M	SK735 - 地	深鉢	胴部：横位縁帯、斜位縦沈線文（縁帯上）、半截竹管による平行沈線文、縄文	大木 6 18-37	
5	M	SK735 - 地	深鉢	胴部：筋上磨蝕付文、半截竹管による平行沈線文・連続斜目文、円形磨蝕付文、縄文、余象斜形?	大木 6 18-38	
6	M	SK737 - 遺構	高杯	口縁部：波状縁、口唇部沈線文、内面横位沈線文、胴部：変形工字文（貼藁なし）	大木 6 18-39	
7	M	SK745 - 地	深鉢	口縁部：平縁、変形工字文（貼藁なし）、胴部：横位沈線文	大木 6 18-40	
8	M	PE37 - 遺構	深鉢	胴部：半截竹管による平行沈線文、円形磨蝕付文	大木 6 18-41	
9	M	PE41 - 遺構	深鉢	口縁部：平縁、半截竹管による平行沈線文・筋面柱状沈線文、縄文（I.R）	大木 6 18-42	
10	M	PE46 - 遺構	深鉢	口縁部：波状縁、横位斜目文、胴部：半截竹管による平行沈線文、横位縁帯、斜位連続斜目沈線文（縁帯上）、斜位短沈線文	大木 6 18-43	
11	M	P147 - 遺構	深鉢	口縁部：平縁、口唇部斜目文、斜位斜目文、半截竹管による平行沈線文	大木 6 18-44	
12	M	SK723 - 地	深鉢	口縁部：裏部円形波状縁、口唇に斜角筋文（I.R）、縦位波帯、斜文（LX 縁帯上）、磨蝕文、胴部：無文	大木 7a 19-1	

第33図 E・M区 SK723・728・734・735・737・745 土壌他出土土器

層（炭化物、焼土、砂質シルトなど）が薄く堆積し、北壁付近には焼け面がある。

〔周溝〕上幅40cm前後、深さは床面から20～30cm以上ある。北、西、南壁で確認していることから住居をほぼ全周していると思われる。北・西壁では壁柱、南壁ではその抜き穴を確認した。

〔埋土〕地山粒を含む黒褐色～暗褐色砂質シルト主体の自然堆積層である。

〔出土遺物〕堆積土から大木5～中期前葉大木7 a 式期の土器が多数出土している（第26～29図）。

【S I 720 A・B住居跡】

〔位置・検出状況〕調査区中央S 40・W36付近で確認した（第21・22図）。A→Bに拡張している。

〔重複〕S I 721より新しく、S I 719、S K 723・724・835より古い。

〔平面形・規模〕S I 721 Aは南北6 m、東西40 m以上、S I 721 Bは南北70 m、東西42 m以上で、平面形は隅丸方形または隅丸長方形と思われる。

〔壁〕壁はS I 719住居跡に壊されており、本来の立ち上がりは不明である。

〔床面〕詳細は不明であるが、北壁付近で一部確認した。南壁付近ではA段階の壁材または壁柱の抜き穴埋土が床面となっていたと思われる。

〔周溝〕北壁で上幅20cm前後の周溝を確認した。西、南壁では壁材または壁柱の抜き穴を確認した。

〔埋土〕S I 719住居跡に壊されており、残存していない。

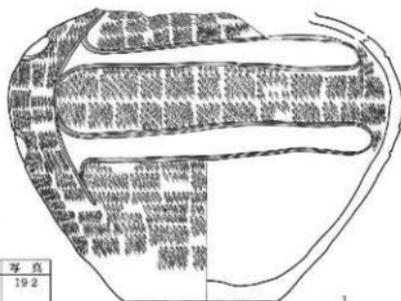
〔出土遺物〕堆積土から前期後葉（大木5式期）の土器が出土している（第32図8）。

②土壌

19基確認した。調査区中央W33～43に多く分布し、S I 719～722など周辺の住居跡より新しい傾向にある。規模は長径10～15m前後、短径06～10前後の隅丸長方形、楕円形のもの（S K 724・726・728・729・733・735・737・836・837・839～842）、長径15～29m前後、短径15m前後の不整形円形、不整方形のもの（S K 723・727・730・731・734・825）がある。堆積土はいずれも暗褐色シルト主体の自然堆積層である。遺物はS K 723・724から縄文時代中期前葉大木7式期の土器が主体的に出土している他、縄文時代前期後葉大木6式期の土器も出土している（第33図、第4表）。

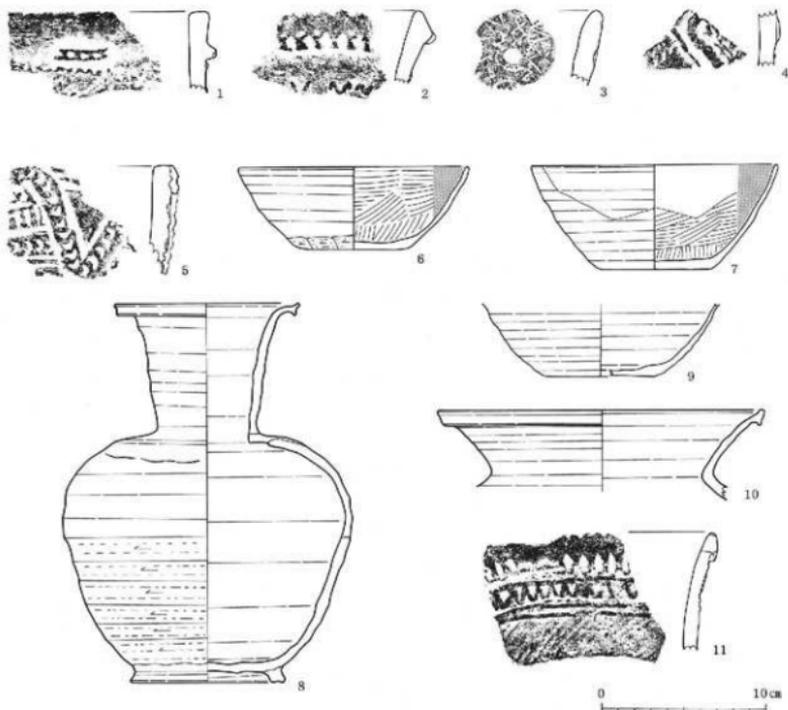
(2) 縄文時代後期中葉

調査区南東部S 15、W30付近で土器埋設遺構1基を確認した（S X 838）。直径40cmの円形、深さ20cmの掘り方に壺が正位に埋められていたものである。土器は4単位の横に細長い磨り消し縄文が施されるもので縄文時代後期宝ヶ峯式期のものと思われる（第34図）。



番号	区	遺構・層位	図種	文様・装飾の特徴	時期	写真
I	M	SX838 - 遺構	壺	胴部：区画紋・磨り消し縄文 (RL) 底面：網代文	宝ヶ峯 (後期中葉)	19.2

第34図 M区 SX838 土器埋設遺構



番号	区	遺構・層位	品 種	文様・裝飾の特徴	時 期	写真
1	M	SI 736-前方土	漆鉢	口縁部：平縁、歯状隆起、三角形の連続彫文(魚骨上) 胴部：歯状隆起、三角形の連続彫文(魚骨上) 縄文	大木5	19-6
2	M	SI 736-前方土	漆鉢	口縁部：平縁、歯状隆起帯(口沿器)、歯状状粘土網貼付文	大木5	19-6
3	M	SI 736-前方土	漆鉢	胴部：歯状状隆起文、歯状状隆起文、円形の穿孔	大木5	19-7
4	M	SI 736-前方土	漆鉢	胴部：歯状状隆起文、縄文	大木5	19-8
5	M	SI 740-地	漆鉢	口縁部：平縁、止形貼付文、半截竹管による刺突状(粘付文上)、縦状刺目文、半截竹管による溝状刺目文	大木7	19-9
6	M	SI 740-地	土鉢器・鉢	外面：ロクロナデ、底面付着ケズリ 内面：ミガキ、黒色処理 底部：回転糸切りローゼリ	平安時代	19-3
7	M	SI 740-地	土鉢器・鉢	外面：ロクロナデ、底面付着ケズリ 内面：ミガキ、黒色処理 底部：回転糸切り無調整	平安時代	19-4
8	M	SI 740-地	土鉢器・鉢	外面：ロクロナデローゼリ 内面：ロクロナデ 底部：ケズリ 二段接合	平安時代	19-13
9	M	SI 740-地	土鉢器・鉢	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底部：回転糸切り無調整	平安時代	19-11
10	M	SI 740-地	土鉢器・鉢	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	平安時代	19-10
11	M	SI 740-遺構	漆鉢	口縁部：平縁、歯状隆起帯、歯状状粘土網貼付文 胴部：縄文	大木5	19-12

第35図 E・M区 SI 736・740住居跡(古代)出土土器

(3) 縄文時代晩期後葉～弥生時代前期

調査区北東端で竪穴住居跡1軒（S I 743）、土塘1基（S K 745）を確認した。いずれも堆積上は黒色シルト主体のものであるが、一部を検出したにすぎず詳細は不明である。遺物はS I 743住居跡から縄文時代晩期大洞A' 式期の土器、S K 745から大洞A' 式期～弥生時代前期の土器が出土している（第4表）。

(4) 古代

竪穴住居跡3軒を確認した（S I 580・736・740）。平面形は一辺50m前後の隅丸方形と思われる。方向は南辺でみるとW-10° -Nのもの（S I 580・740）、W-30° -Sのもの（S I 736）がある。このうちS I 736・740で床面の一部を確認した。S I 740はA→Bに拡張されB期のカマドを南東隅で確認した。床面、床付近の堆積土から9世紀前半の土師器杯、須恵器杯・長頸壺が出土している（第35図）。

【S I 736 住居跡】

〔位置〕 調査区南東隅S 15・W 18付近で確認した。

〔重複〕 S I 746より新しい。

〔平面形・規模〕 北東と南西隅が壊されているが、1辺50mの隅丸方形である。

〔方向〕 南辺でみるとW-30° -Sである。

〔壁〕 西壁でみると、ほぼ垂直に立ち上がる。壁の残存高は約40cmである。

〔床面〕 地山土主体の粘土質シルトを厚さ6～10cm貼り、床面を作っている。カマド付近がやや窪んでいるが基本的に水平で、炭化物、焼土など広がっている。

〔カマド〕 東辺中央で一部を確認した。

〔周溝〕 上幅20cm前後の溝が全周している。埋土は地山ブロックを含む黒褐色土である。壁材跡は確認できない。

〔堆積土〕 9層に分けられる（第22図下4～12）。下層から12が貼り床、11がカマド付近の焼け面、10が焼土・灰層、9が周溝埋土、6～8がカマド崩落土、4・5が人為的な埋土である。

〔出土遺物〕 床面から8世紀代の土師器（非ロクロ、外面：有段、内面：内黒）の他、縄文時代前期後葉大木5式期の土器が出土している（第35図）。

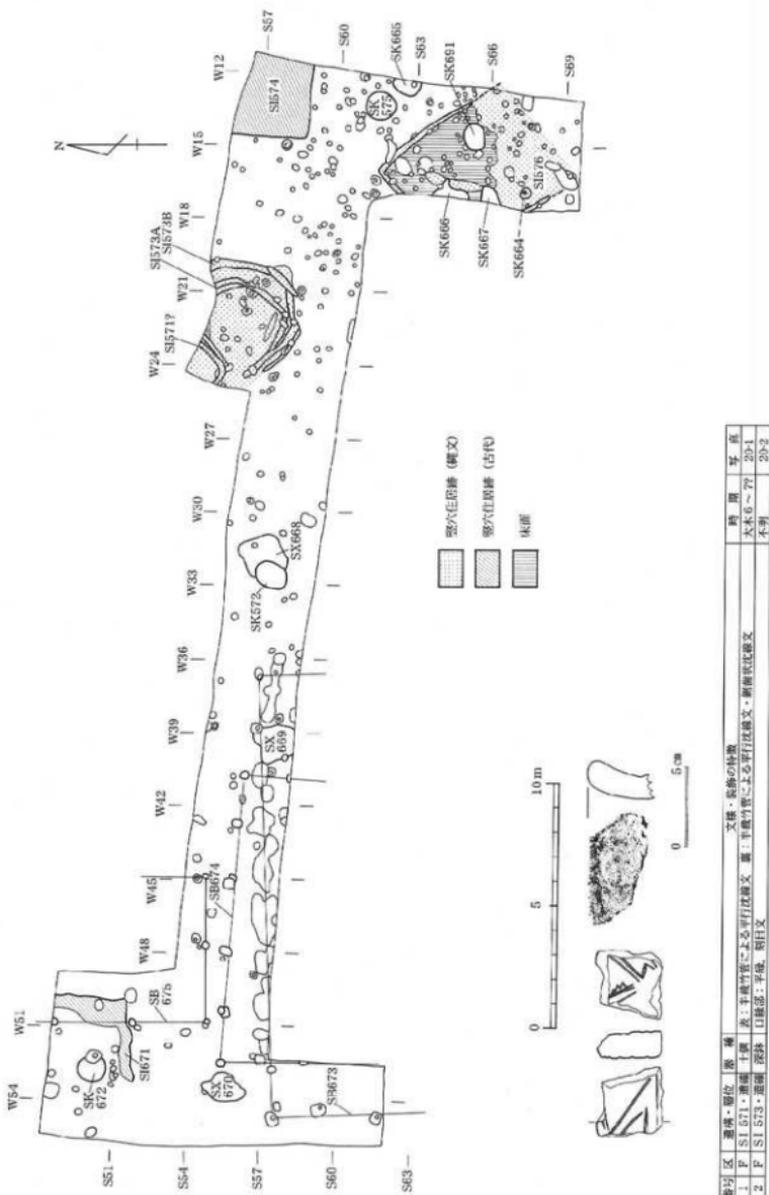
6. F区

竪穴住居跡5軒、土器埋設遺構1基、土塘6基、掘立柱建物跡3棟を確認した（第36図、第4表）。

(1) 縄文時代前期後葉～中期前葉

①竪穴住居跡

3軒確認した（S I 571・573・576）。いずれも残存状況が悪く、床面・周溝の一部を確認しただけである。周溝の状況から平面形が隅丸方形のもの（S I 571・576）、長楕円形のもの（S I 573）があり、S I 573はA→Bに拡張されている。方向はいずれも長軸方向でおよそN-45° -Wである。遺物は縄文時代前期後葉大木5～中期前葉大木7式期の土器、土偶などが出土している（第36図、第



第36図 F区平面図、SI 571・573住居跡出土遺物(土器・土偶)

4表)。

②土壌

7基確認した (SK 572・575・665～667・691)。いずれも規模が長径10～15m、短径10m前後の楕円形で、堆積土が暗褐色シルト主体の自然堆積層である。遺物はSK 575遺構確認時に縄文時代前期後葉大木5式期の土器が出土している (第4表)。

③土器埋設遺構

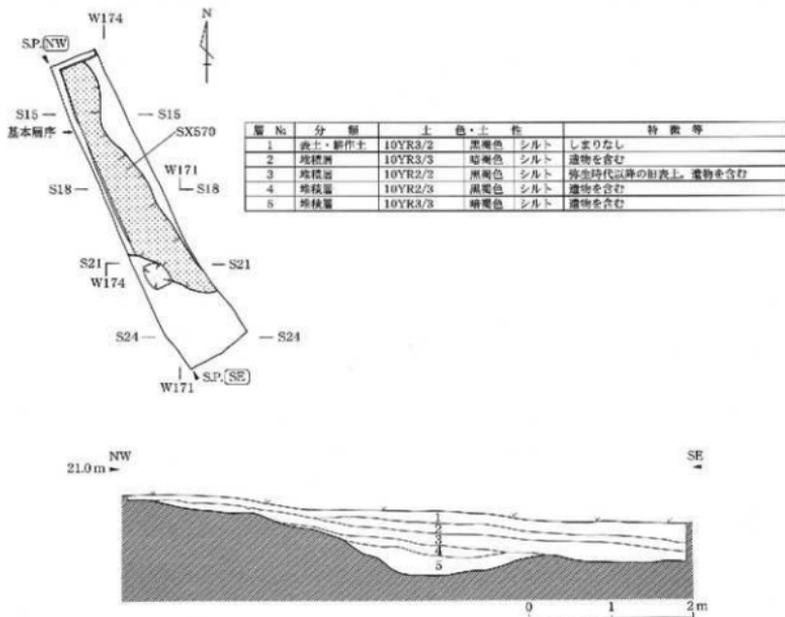
1基確認した (SX 664)。直径40cmの円形、深さ20cmの掘り方に深鉢の下部が正位に埋められていたもので、埋土には磨石、凹石が入れられていた。

(2) 古代

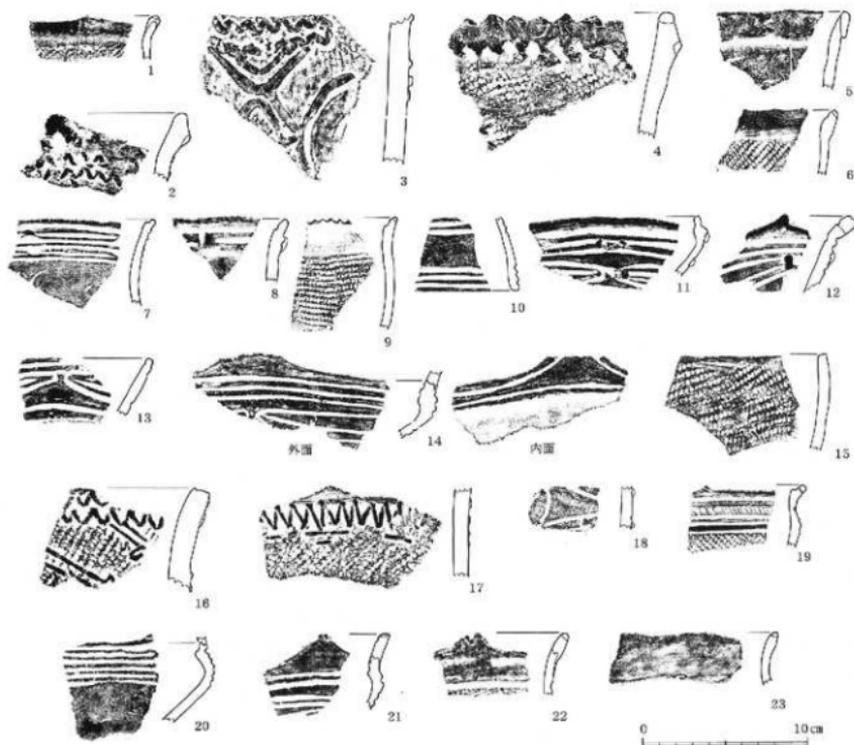
竪穴住居跡2軒を確認した (SI 574・671)。SI 574は南西隅、SI 671は南東隅を痕跡的に確認しただけである。方向はいずれもほぼ真北方向である。出土遺物はない。

7. G区

遺構は確認できなかったが西斜面で遺物を含む再堆積層 (SX 570) 1ヵ所を確認した (第37図)。4～5層から縄文時代前期大木4式期～弥生時代前期青木畑式期の土器が出土している (第38図)。



第37図 G区平面図・G区SX570再堆積層断面図



番号	区	遺構・層位	図 類	文様・装飾の特徴	母 形	号 裏
1	G	SX570-2 遺	深鉢	口縁部：突起のつく平縁（突起部埋圧） 無文 胴部：縄文(L.R)	大瓶 A	20-3
2	G	SX570-3 遺	深鉢	口縁部：波状縁、面状沈線、裏面状粘土継ぎ付文	大木 5	20-4
3	G	SX570-3 遺	深鉢	胴部：扇面状粘土継ぎ付文、粘土貼付文	大木 5	20-5
4	G	SX570-3 遺	深鉢	口縁部：平縁、面状沈線、縄文(L.R)	大木 5	20-6
5	G	SX570-3 遺	深鉢	口縁部：平縁、縦位沈線?	不明	20-7
6	G	SX570-3 遺	深鉢	口縁部：小波状縁、内面横位沈線文 胴部：縄文(L.R)	大瓶 A	20-8
7	G	SX570-3 遺	鉢	口縁部：平縁、内面横位沈線 口縁部～胴部：区字文	大瓶 A	20-8
8	G	SX570-3 遺	鉢	口縁部：平縁、区字文、内面横位沈線文、胴部：無文	大瓶 A	20-10
9	G	SX570-3 遺	深鉢	口縁部：平縁、口唇部刻目文、内面横位沈線文、胴部：横位沈線(L.R)	大瓶 A・深鉢	20-11
10	G	SX570-3 遺	高杯	胴部：横位平行沈線文	大瓶 A・深鉢	20-12
11	G	SX570-3 遺	高杯	口縁部：平縁、内面横位沈線文 胴部：変形工字文（貼付有り）	砂沢並行	20-13
12	G	SX570-3 遺	高杯	口縁部：突起のつく平縁、口唇部沈線文、内面 1 線に点状沈線文、横位沈線文 胴部：変形工字文（貼付有り）	砂沢並行	20-14
13	G	SX570-3 遺	鉢	口縁部：平縁、内面横位沈線 口縁部～胴部：変形工字文（貼付なし）	青木遺	20-15
14	G	SX570-3 遺	高杯	口縁部：突起のつく平縁、口唇部沈線文、内面口縁に点状沈線、横位沈線文 胴部：変形工字文（貼付なし）	青木遺	20-16
15	G	SX570-3 遺	深鉢	口縁部：平縁 口縁部～胴部：縄文(L.R)	不明	20-17
16	G	SX570-4・5 遺	深鉢	胴部：扇面状粘土継ぎ付文、平行粘土継ぎ付文、縄文(L.R)	大木 6a	20-18
17	G	SX570-4・5 遺	深鉢	胴部：扇面状粘土継ぎ付文、縄文(L.R)	大木 6b	20-19
18	G	SX570-4・5 遺	深鉢	胴部：人形帯状文、扇状小突起貼付	砂沢並行	20-20
19	G	SX574・5 遺	鉢	口縁部：突起のつく平縁、口唇部刻目文、内面横位沈線文 口縁部～胴部：横位平行沈線文、刻目文（沈線内充填） 胴部：縄文(L.R)	大瓶 C2 ~ A	20-21
20	G	SX570-4・5 遺	高杯	口縁部：突起のつく平縁、口唇部沈線文、内面横位沈線文 胴部：区字文	砂沢並行	20-22
21	G	SX570-4・5 遺	高杯	口縁部：突起のつく平縁、口唇部沈線文、内面口縁に点状沈線、横位沈線文 胴部：変形工字文	大瓶 A・砂沢並行	20-23
22	G	SX570-4・5 遺	深鉢	口縁部：突起のつく平縁、口唇部沈線文、横位沈線文 胴部：縄文(L.R)	横形遺	20-24
23	G	SX570-4・5 遺	深鉢	口縁部：波状縁、無文	不明	20-25

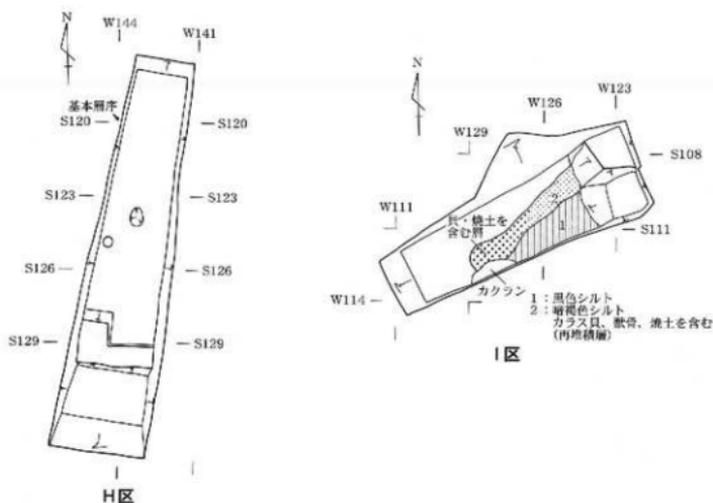
第 38 図 G 区 SK570 出土土器

8. H区

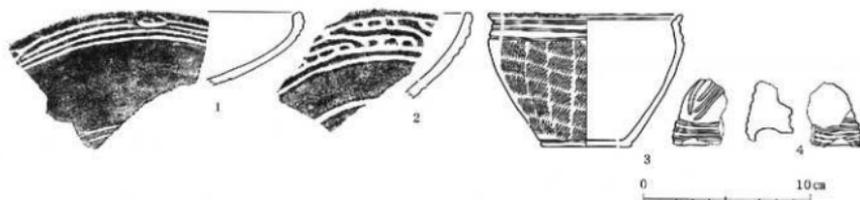
後世に大きく削平されており遺構は確認できなかった。遺物は表土等から縄文時代晩期～弥生時代前期他の土器が少量出土している（第40図）。

9. I区

遺構は確認できなかったが南斜面で遺物を含む再堆積層（SX 697）1カ所を確認した（第39図）。堆積層は平面確認で2層あり、1は黒色シルト主体、2は暗褐色シルト主体で、貝（カラス貝）、獣骨、焼土ブロックなどが含まれる。縄文時代晩期大洞C2～A式期の土器が出土している（第4表）。



第39図 H区・I区 平面図



番号	区	遺構・部位	図 類	文 様・装飾の特徴	時 期	写 真
1	H	遺構	横断	口縁部：平縁、人組二文文、胴部：縦位平行沈線文	大洞 B	20-26
2	H	遺構	透視	口縁部：平縁、口縁部～胴部：三垂状文、横位沈線文	大洞 B/C	20-27
3	H	遺物	鉢	口縁部：小段状縁、横位平行沈線文、内面横位沈線文、胴部：縄文(L.R)	大洞 C2	20-28
4	H	遺物	土器	胎製部：斜位沈線文、横位平行沈線文	弥生後葉	20-29

第40図 H区 出土遺物

10. J区

縄文時代晩期の上埧16基、土器埋設遺構2基、焼け面1ヵ所を確認した(第41図、第4表)。

①土埧

16基を確認した。①長径が15～18m前後の楕円形のもの(SK704・705・754・755)、②長径が10m前後の隅丸長方形のもの(SK702・703・748・751・753)、③長径が10m前後の円形・不整形のもの(SK706・749・750・752・757・758)、④平面形が不整形のもの(SK756)に分けられる。長軸の方向はおよそ北東のもの(SK702・705・751・753・756・757)と、およそ北西のもの(SK704・748・749・755・758)がある。堆積上はいずれも黒～黒褐色主体の自然堆積層である。遺物は遺構確認面、SK702～706堆積土などから縄文時代晩期大洞A式期の土器が出土している(第42図)。

②土器埋設遺構

2ヵ所確認した(SX760・761)。いずれも平面形が直径40cm前後の円形の掘り方に縄文時代晩期の土器が正位に埋設されていたもので、埋土は地山ブロックを含む黒～黒褐色シルト主体のものである。SX760の周辺約60cmは熱を受け赤色化している。

③焼け面

焼け面1ヵ所を確認した(SX759)。焼け面の範囲は長径1m、短径60cmの楕円形で、一部硬化している。遺物は縄文時代晩期大洞A式の土器が出土している(第42図)。

11. K区

竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡3棟、土埧35基、溝跡4条を確認した(第43図、第5表)。

(1) 縄文時代前期後葉～中期前葉

【S1738 竪穴住居跡】

〔位置・検出状況〕調査区南西部(S24・W114付近)で確認した。調査区南壁沿いに設定したサブトレンチで床面、西辺の周溝、焼け面を確認した。

〔重複〕SK708・763・793、SB804より古い。

〔規模・平面形〕東西26m、南北25m以上の隅丸長方形と推定される。

〔方向〕西辺でN-30°-Eである。

〔柱穴〕住居の南西部で1ヵ所確認した。掘方は直径30cmの円形で柱痕跡は12cmの円形である。

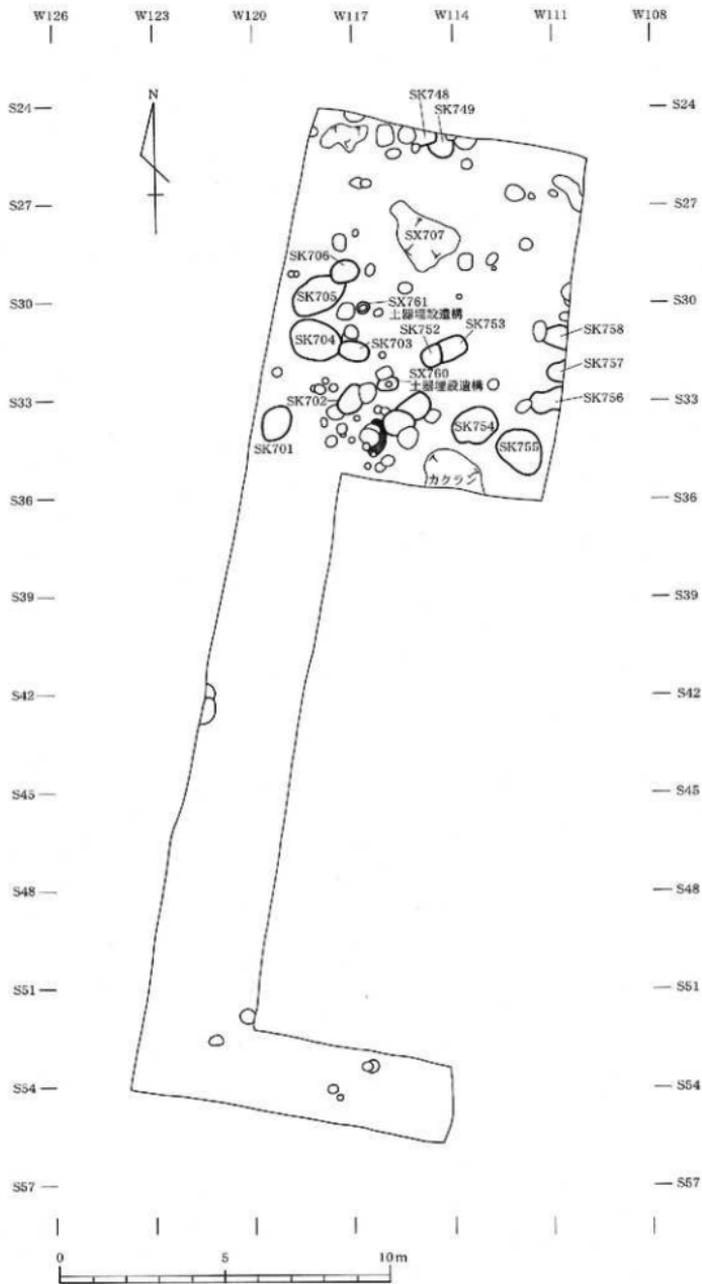
〔床面〕地山面を床面としている。住居の住居の長軸線上に直径16cmの焼け面が認められ、その周囲には炭化物が広がっている。

〔周溝〕西辺で確認した。東辺はピットに壊されており確認できなかった。幅42cm、深さ8cmで、暗褐色主体の自然堆積土が認められる。壁材痕は確認できなかった。

〔遺物〕床面から縄文時代晩期大洞A式期の土器が出土している(第45図)。

(2) 縄文時代晩期

①竪穴住居跡



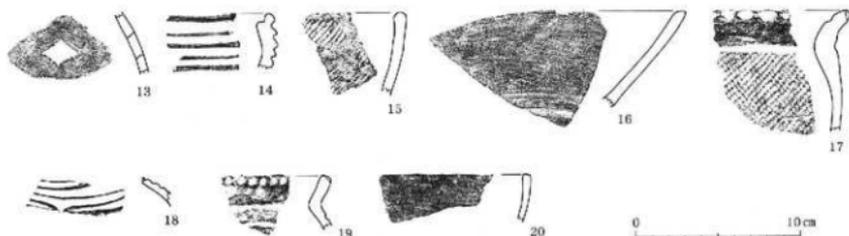
第41図 J区平面図



SK701・702 土坑出土遺物



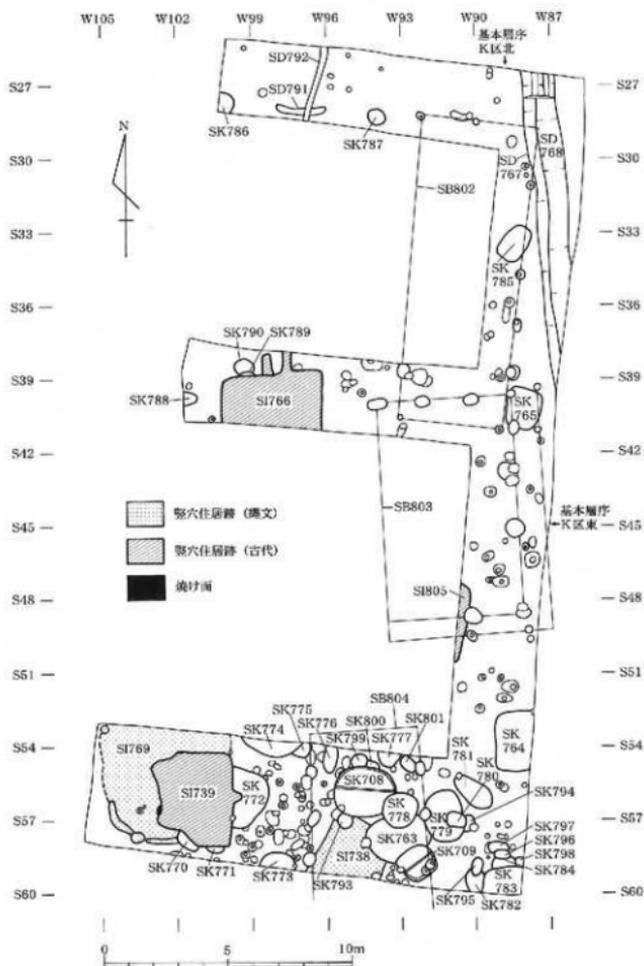
SK705 土坑出土遺物



SK707 他 出土遺物

発掘区	遺構・層位	器種	文様・裝飾の特徴	時期	写真
1	J SK701-遺構	深鉢	口縁部：平縁。赤胎東羽状織文(L,R, RI)。胴部：赤胎東羽状織文	不明	20-30
2	J SK702-壺	壺	胴部：褐土彫刻付文。横位平行沈線文。斜行沈線文	後期後葉	20-31
3	J SK702-埴	浅鉢	胴部：雲形付文。横位平行沈線文。斜行沈線文	大洲 C1	20-32
4	J SK702-埴	壺	胴部：工字文	大洲 A	20-33
5	J SK702-埴	浅鉢	口縁部：平縁。凹字文。胴部：無文	大洲 A	20-34
6	J SK702-埴	壺	胴部：工字文	大洲 A	20-35
7	J SK702-埴	土器	胴部表：羽状斜交文。縦文(L,R) 胴部裏：赤胎東羽状織文(L,R, RI)	無期後葉	20-36
8	J SK705-埴	鉢	口縁部：平縁。口唇部変化連珠刻目文。内面横位沈線文。胴部：平行沈線文	土坑C~A	21-1
9	J SK705-埴	深鉢	口縁部：平縁。口唇部押正。内面横位沈線文。胴部：横位平行沈線文。縦文(L,R)	後期後葉	21-2
10	J SK705-埴	深鉢	口縁部：平縁。口唇部押正。内面横位沈線文。胴部：横位沈線文	後期後葉	21-3
11	J SK705-埴	深鉢	口縁部：平縁。口唇部～胴部：赤胎東羽状織文(RI, L,R)	不明	21-4
12	J SK705-埴	深鉢	口縁部：平縁。縦文(L,R)	不明	21-5
13	J SK707 遺構	香炉形土器	胴部：菱形のすかし。カクラン	後期前葉	21-6
14	J Pit.2-埴	鉢	口縁部：平縁。横位平行沈線文。内面横位沈線文	大洲 A~B(前期)	21-7
15	J Pit.4-埴	深鉢	口縁部：平縁。縦文(L,R) 胴部：無文	後期～後期	21-8
16	J Pit.17-遺構	浅鉢	口縁部：平縁。無文。胴部：無文	不明	21-9
17	J Pit.22-埴	深鉢	口縁部：平縁。口唇部刻目文。内面横位沈線文。胴部：横位沈線文。縦文(L,R)	大洲 A~B(前期)	21-10
18	J Pit.22-埴	壺	胴部：凹字文	大洲 A	21-11
19	J Pit.22-埴	深鉢	口縁部：平縁。口唇部刻目文。胴部：横位沈線文	大洲 A~B(前期)	21-12
20	J Pit.22-埴	小型鉢	口縁部：平縁。無文。胴部：無文	不明	21-13

第 42 図 SK701・702 土坑、SK707、Pit 出土遺物



第43图 K区平面图

1軒確認した (S I 769)

【S I 769 竪穴住居跡】

〔位置・検出状況〕 調査区南西端部 (S 21・W 120 付近) で確認した。後世に大きく削平されており周溝、床面の一部、焼け面、支柱穴1カ所を確認しただけである。

〔重複〕 S I 739、S K 770 より古い。

〔規模・平面形〕 東西 52 m、南北 50 m以上の隅丸長方形と推定される。

〔方向〕 西辺でほぼ真北方向である。

〔支柱穴〕 住居の南西部で1カ所確認した。掘方は直径 30 cm の円形で柱痕跡は 12 cm の円形である。

〔床面〕 地山面を床面としている。南西支柱穴の 1 m 東で直径約 50 cm の焼け面を確認した。

〔周溝〕 南西隅で南辺、西辺の一部を確認した。幅は 20～30 cm で痕跡的に認められる。

〔遺物〕 床面から縄文時代晩期人洞A式期の土器が出土している (第 45 図)。

②土壌

16基確認した。調査区南側に集中している。a、長径 20～25 m の楕円形のもの (S K 708・763・774・779)、b、長径 20 m 前後の隅丸長方形のもの (S K 7764・772・783)、c、長径 15 m 前後の円形・不整形のもの (S K 709・765・773・778・781)、d、長径 06～10 m の円形・楕円形のもの (S K 770・771・775・776・780・782・784・787～790・797～801) がある。遺物は縄文時代晩期の土器が出土している (第 45 図、第 5 表)。

【S K 708 土壌】

〔位置・検出状況〕 K区南部 (S 22・W 112 付近) で確認した。

〔重複〕 S K 793・799・800 より新しく、S K 778 より古い。

〔規模・平面形〕 長径 25 m、短径 20 m、深さ 80 cm で、平面形は楕円形である。

〔方向〕 長軸でほぼ東西方向である。

〔断面形〕 底面はほぼ水平で、壁は垂直に立ち上がる円筒状である。

〔堆積土〕 地山ブロックを少量含む暗褐色～褐色シルト主体の自然堆積層で 1～7 層に分けられる。

〔遺物〕 堆積土から縄文時代中期、晩期の土器が少量出土している (第 5 表)。

【S K 709 土壌】

〔位置・検出状況〕 K区南部 (S 25・W 110 付近) で確認した。

〔重複〕 S K 763 より新しく、S B 804 より古い。

〔規模・平面形〕 長径 16 m、短径 15 m、深さ 20 cm で、平面形は不整形形である。

〔方向〕 長軸で E-35° -N である。

〔断面形〕 底面はほぼ水平で、西壁は垂直、東壁は緩やかに立ち上がる。

〔堆積土〕 地山ブロック・小礫を少量含む暗褐色シルト主体の自然堆積層である。

〔遺物〕 堆積土から縄文時代晩期の土器が出土している (第 45 図、第 5 表)。

(2) 古代

① 竪穴住居跡

3軒確認した（S I 739・766・805）。

【S I 739 竪穴住居跡】

〔位置・検出状況〕K区南西端部（S 21・W 120 付近）で確認した。

〔重複〕S I 769（縄文時代）、SK 770～772より新しい。

〔規模・平面形〕東西32m以上、南北45mの隅丸方形である。

〔方向〕東辺でほぼ真北方向である。

〔カマド〕東辺中央に付く。

〔遺物〕堆積土から非ロクロ土師器の他、縄文時代前期後葉大木5式期、縄文時代後期後葉の土器が出土している（第5表）。

【S I 766 竪穴住居跡】

〔位置・検出状況〕調査区中央部（S 6・W 116 付近）で確認した。

〔重複〕SK 789より新しい。

〔規模・平面形〕東西41m、南北25m以上の隅丸方形である。

〔方向〕東辺でほぼ真北方向である。

〔カマド〕北辺中央に付き、1回東側に作り替えられている。

〔遺物〕堆積土から土師器甕、須恵器環などが出土している（第5表）。

② 掘立柱建物跡

【S B 802 建物跡】

K区北東（N 6～S 6・W 107～112）で確認された桁行6間、梁行2間の南北棟建物跡である。S D 767・768より古く、SK 765より新しい。平面規模は桁行が東側柱列で総長125m、柱間寸法が北から（25m）、38m（2間分）、20m、22m、22m、梁行きが北側柱列で総長46m、柱間寸法が23m等間である。方向は東側柱列でN-7°-Eである。柱穴は長径20～40cmの円形を基調としている。

埋土は地山ブロックを少量含む暗褐色土主体である。出土遺物はない。

(3) 中近世

掘立柱建物跡2棟（S B 803・804）、溝跡2条（S D 767・768）を確認した。掘立柱建物跡は2棟とも全容は不明であるがS B 803は桁行5間、梁行4間の東・南廂付き南北棟と思われる。S B 804は東と西側柱列が2間分確認しただけである。溝跡は2条とも幅10m前後の南北溝跡でS D 767からS D 768へと作り替えられている。S B 803・804建物跡とS D 767・768溝跡は方向がN-5°-Wで揃っていること、柱穴埋土・溝堆積土がややグライ化したしまりのない暗褐色土主体であることなどが共通していることから、ほぼ同時期に存在したものと考えられる。出土遺物はない。

12. L区

竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡5棟、土壌16基、溝跡5条を確認した（第44図、第5表）。

(1) 縄文時代

① 竪穴住居跡

1軒確認した（S I 824）。縄文時代後期以降のものと考えられる。

【S I 824 竪穴住居跡】

〔位置・検出状況〕 N 3・W 78 付近で主柱穴2カ所、焼け面1カ所を確認した。

〔重複〕 S B 825 より古い。

〔規模・平面形〕 東西26m、南北25m以上の隅丸長方形と推定される。

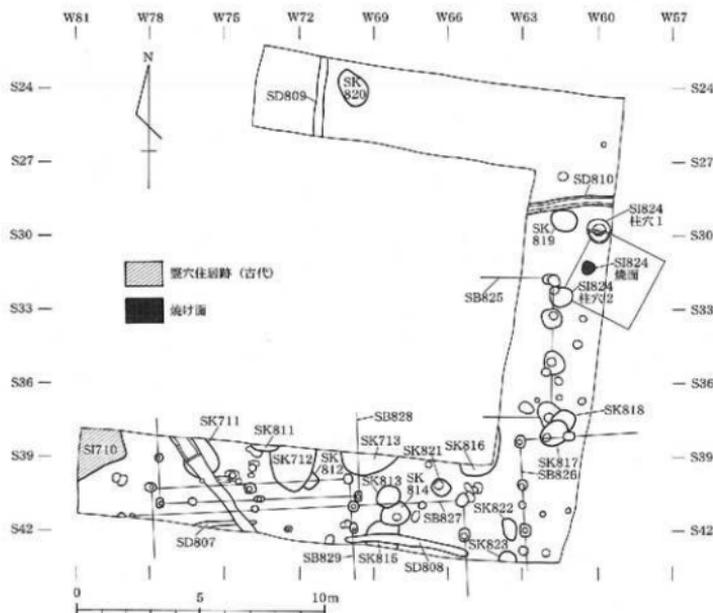
〔方向〕 中軸線でおおよそW-30° -Nである。

〔主柱穴〕 2カ所確認した（S I 824 柱穴1・2）。柱穴1は直径約10mの不整形円で、柱痕跡は直径40cmの円形である。埋土は地山ブロックを含む暗褐色土である。柱穴2は抜き取られているため詳細は不明であるが、柱穴1と柱穴2の柱間寸法はおおよそ30mと推定される。

〔床面〕 確認できなかった。住居の住居の長軸線上に直径50～60cmの焼け面を痕跡的に確認した。

〔周溝〕 確認できなかった。

〔遺物〕 柱穴1埋土から縄文時代後期頃の土器が1点出土している（第5表）。



第44図 L区平面図

②土壌

5基確認した(SK 711・712・713・816・817)。L区南側に集中している。土壌の全容がわかるものはないが、長径20m前後、短径15m前後の楕円形のものと思われる。堆積土はいずれも暗褐色土主体の自然堆積土である。遺物はSK 711・713から縄文時代前期(大木5・6)、SK 712から縄文時代晩期(大洞A)の土器が出土している(第45図)。

(2) 古代

南西端で竪穴住居跡1軒(SI 710)を確認した、南東隅を検出しただけで詳細は不明である。遺物は堆積土から土師器・須恵器・縄文土器(晩期大洞A)が出土している。

(3) 中近世

掘立柱建物跡3棟(SB 826・828・829)を確認した。大きさがわかるものはない。いずれも柱穴が長径30～50cmの円形、隅丸方形。埋土はしまりのない暗褐色土主体のものである。建物の方向もN¹°—Wである。出土遺物はない。

(4) 時期不明の遺構

掘立柱建物跡1棟(SB 825)、溝跡(SD 806～810)、土壌(SK 813・814・822・823・817～820)については時期不明であるが、重複関係からSK 817・818は中世以前、SB 825はそれ以前となる。



K区 SI 739、SK709・763他出土遺物

L区 SI 710、SK711・713出土土器

番号	区	遺構・層位	品種	文様・装飾の特徴	時期	写真
1	K	SI 739-地	深鉢	口縁部：粘土網貼付文。縦位平行沈線文。横文(RL)	後期後遺	21-19
2	K	SK 709-準	高鉢	胴部：平行短半指造付文。織文	大木 5	21-14
3	K	SK 709-準	高鉢	口縁部：半線。口唇部押圧。内面横位沈線文	不明	21-18
4	K	SK 763-遺線	鉢	口縁部：半線。口唇部押圧目立。縦位平行沈線文。斜線：横文(LR)	大洞 B/C	21-15
5	K	SK 763-遺線	深鉢	口縁部：小波沈線。内面縦位沈線文。胴部：横位沈線文。横文(LR)	大洞 A'	21-18
6	K	SK 763-遺線	高坪	口縁部：半線。内面横位沈線文。口唇部～胴部：折字文。斜線：横文	大洞 A'	21-20
7	K	遺線	土角	胴部：白粉の黄孔。半截竹筒による平行沈線文。斜線部：半截竹筒による平行沈線文	大木 6?	21-17
8	L	SI 710-遺線	深鉢	口縁部：波状線。口縁に約90°平行沈線文。平行沈線文	大木 7	21-21
9	L	SK 711-遺線	深鉢	口縁部：半線。船倉状沈線文	大木 6?	21-22
10	L	SK 711-遺線	深鉢	口縁部：半線。押圧横文(L)	大木 7	21-23
11	L	SK 713-遺線	深鉢	口縁部：半線。口唇部船倉状粘土網貼付文	大木 5	21-24

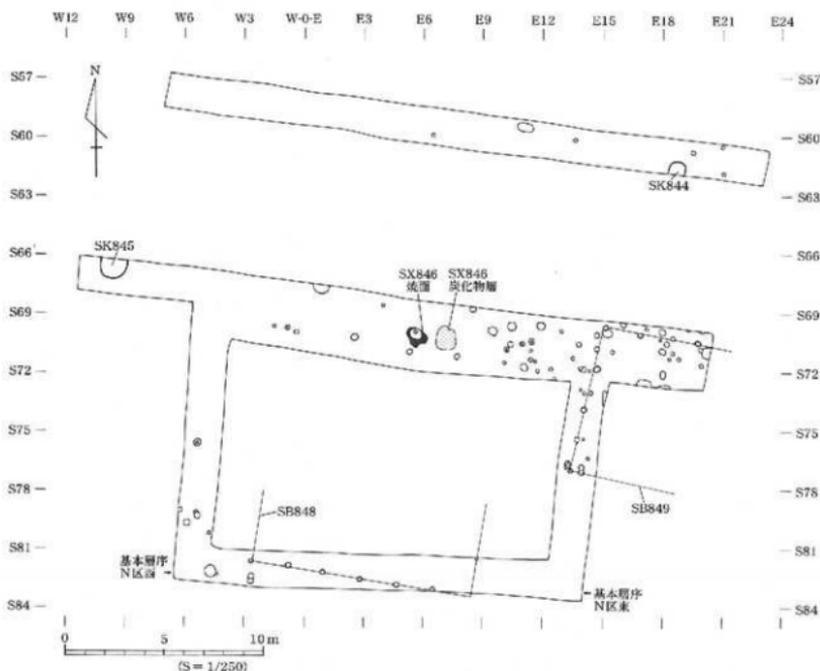
第45図 K区・L区出土遺物

13. N区

掘立柱建物跡2棟 (SB 848・849)、焼け面1ヵ所 (SX 846)、炭化物集中地点1ヵ所 (SX 847)、土壌2基 (SK 844・845) などを確認した (第46図、第5表)。このうちSB 848・849建物跡は柱列の方向が揃う (西側柱列でN-12° -E) ことからほぼ同時期のものと考えられ、SX 846 焼け面とSX 847 炭化物集中地点は位置的にセットと思われる。遺構の時期はSX 846 焼け面とSX 847 炭化物集中地点が摩滅した土師器が出土していることから古代と考えられる。SB 848・849建物跡は柱穴埋土がしまりのない暗褐色土であることなどからおおよそ中世以降、SK 844・845土壌は不明である。

14. O区

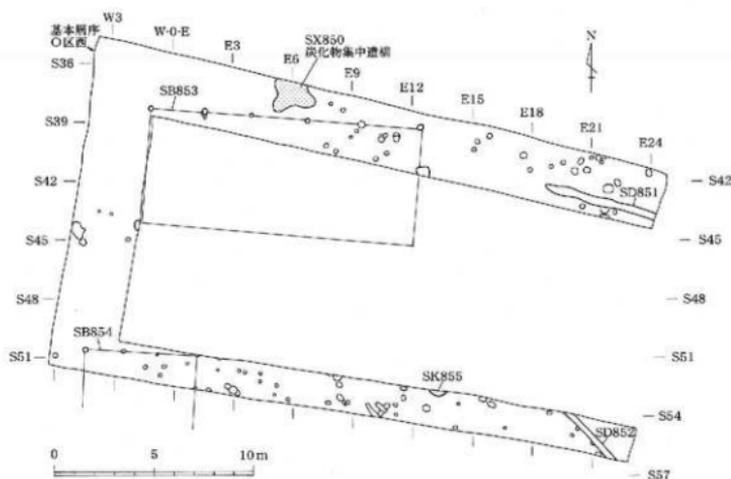
掘立柱建物跡2棟 (SB 853・854)、炭化物集中地点1ヵ所 (SX 850)、溝跡 (SD 851・852)、土壌1基 (SK 855) などを確認した (第47図、第5表)。このうちSB 853・854建物跡は柱列の方向が揃う (西側柱列でN-5° -E) ことからほぼ同時期のものと考えられる。遺構の時期はSB 853・854建物跡、SD 851・852溝跡は埋土・堆積土の特徴からおおよそ中近世、SK 855土壌、SX 850炭化物集中地点は不明である。



第46図 N区平面図

15. P区

遺構、遺物とも確認できなかった (第2図)。



第 47 図 O区平面図

K	SI	SB	SK	SX	SD
A	5	0	34	1	1
B	3	0	23	3	0
C	6	2	56	1	0
D	4	2	16	4	0
E・M	23	1	22	1	0
F	5	3	6	4	0
G	0	0	0	1	0
H	0	0	0	0	0
I	0	0	0	1	0
J	0	0	17	4	0
K	6	3	35	0	4
L	2	5	16	0	5
N	0	2	2	2	0
O	0	1	1	1	2
P	0	0	0	0	0
計	54	19	228	23	12

SI : 竪穴住居跡
 SB : 竪穴柱礎跡
 SK : 土壇・土築盛
 SX : 検出票・土器埋没遺構・灰積層など
 SD : 溝跡

第 1 表 発見した遺構数

遺構の時期 (大区分)

- A : 縄文時代前期後半 (大木 5) ~ 中期前半 (大木 7 b) ー 大木 6 ~ 7 a 中心
 B : 縄文時代後期後半 ~ 後葉ころ
 C : 縄文時代後期後半 ~ 弥生時代前期
 D : 古代
 E : 中近世

A区

遺構No.	遺構	区	形状	平面形	長径×短径(m)	時期	出土遺物・備考
599	S.K.	A	S 7・W 87	不明?	(3.0) × 1.1	A	
587	S.K.	A	S 6・W 87	不明?	(1.8) × (0.8)	D	(遺構) 縄文。(遺) ロクロ土製器
588	S.K.	A	S 5・W 102	楕円形	2.9 × 2.0	A	
589	S.K.	A	S 6・W 100	不整形	3.6 × 2.5	A	(遺構) 大木 7。(遺) 大木 6
590	S.K.	A	S 2・W 135	円形	1.1 × 1.1	A	(遺構) 大木 6・7
591	S.I.	A	S 1・W 111	楕円形?	(8.0) × 4.5	A	(遺構) 大木 6 ~ 7, 大木 6
592	S.K.	A	S 6・W 110 ~ 111	不整形	(3.0) × 1.8	A	
593	S.I.	A	S 6・W 111 ~ 111	楕円のみ	幅 0.9	A	(遺構) 大木 6・7
600	S.K.	A	S 2・W 126	円形	1.6 × 1.4	A	(遺) 大木 6 ~ 7
601	S.K.	A	S 0・W 156	円形	1.6 × 1.3	A	(遺) 大木 7
602	S.K.	A	N 1・W 126	楕円形	1.7 × 1.3	A	(遺) 大木 6
603	S.K.	A	N 2・W 128	楕円形	1.5 × 1.2	A	(遺) 大木 6
604	S.K.	A	S 1・W 123	不整形	1.7 × 1.3	A	(遺) 縄文
608	S.K.	A	S 3・W 102	不整形?	(4.3) × (1.0)	A	
622	S.D.	A	S 10・W 92 ~ 92	楕円	幅 0.6	A	
623	S.K.	A	S 9・W 95	不明	2.7 × 2.4	A	
624	S.K.	A	S 9・W 93	不整形	0.7 × 0.5	A	
625	S.K.	A	S 9・W 95	不整形	3.2 × 2.2	A	
626	S.K.	A	S 10・W 96	不明	幅 0.6	A	
627	S.K.	A	S 9・W 102	不明?	2.6 × 2.0	A	
628	S.K.	A	S 9・W 100	楕円形	1.0 × 0.6	A	
629	S.K.	A	S 9・W 100	不整形	2.7 × 2.5	A	
630	S.K.	A	S 8・W 98	楕円形	1.2 × 0.9	A	
631	S.K.	A	S 9・W 98	不整形	1.4 × 0.8	A	
632	S.K.	A	S 6・W 98	不整形	1.1 × 1.0	A	
633	S.K.	A	S 6・W 98	円形	1.7 × 1.5	A	
634	S.K.	A	S 8・W 104	不明	0.8 × 0.8	A	
635	S.K.	A	S 6・W 103	不整形	0.9 × 0.7	A	
636	S.K.	A	S 0・W 105	楕円形	0.9 × 0.7	A	
638	S.I.	A	S 2・W 110	不明		A	縄文のみ
639	S.K.	A	S 2・W 116	楕円	0.8 × 0.7	A	
610	S.K.	A	S 1・W 116	不整形	2.0 × 2.0	A	
641	S.K.	A	S 2・W 122	楕円形	0.7 × 0.5	A	
642	S.K.	A	S 1・W 117	円形	1.8 × 1.6	A	
643	S.K.	A	S 0・W 120	不整形	(1.6) × 1.3	A	
644	S.I.	A	N 2・W 111 ~ 111	楕円形	1.3 × 4.5	A	
645	S.I.	A	N 2・W 114 ~ 114	楕円形?	(1.0) × 4.0	A	
646	S.X.	A	S 2・W 133	不整形	3.5 × (2.2)	D	
617	S.K.	A	N 3・W 125	楕円形?	(1.0) × 0.5	A	
648	S.K.	A	N 5・W 134	楕円形?	0.7 × (0.4)	A	
649	S.K.	A	S 3・W 136	円形	0.8 × 0.7	A	

B区

遺構No.	遺構	区	形状	平面形	長径×短径(m)	時期	出土遺物・備考
527	S.K.	B	S 51・W 143			E	新石器
530	S.K.	B	S 50・W 132			E	(遺構) 縄文
541	S.X.	B	S 42・W 136 ~ 136	楕円形	20.0 × 4.0	C	弥生時代前期の埴輪台倉
542	S.K.	B	S 39・W 129	不整形	1.8 × 1.6	B	(遺) 縄文
543	S.K.	B	S 38・W 129	楕円形	1.1 × 0.9	B	(遺) 大木 6・7
544	S.K.	B	S 37・W 127	円形	1.1 × 1.1	B	(遺) 大木 6, 縄文後葉 高塚 1 (弥生時代)
545	S.K.	B	S 33・W 129	円形	1.0 × 0.8	B	(遺) 大木 6, 縄文後葉 高塚 1 (弥生時代)
546	S.K.	B	S 33・W 128	円形	1.0 × 0.8	B	(遺) 大木 6 ~ 7, 高塚 1 (弥生時代)
547	S.K.	B	S 32・W 126	楕円形	1.1 × 0.8	B	(遺) 縄文
548	S.K.	B	S 29・W 129	円形	1.1 × 1.0	B	
557	S.K.	B	S 51・W 132			E	新石器
605	S.X.	B	S 0・W 134 ~ 134		(3.0) × (4.0)	C	(遺) 土師器, 縄文後葉。(遺) 縄文
606	S.K.	B	S 51・W 139	円形	1.8 × (1.4)	C	高塚 1, 大木 5 b, 大木 A ー 砂鉄付片
607	S.K.	B	S 50・W 139	円形	1.8 × (1.2)	C	
609	S.I.	B	S 15・W 122 ~ 122	楕円	(6.8) × (4.2)	A	
610	S.I.	B	S 29・W 124	楕円	(7.0) × 5.0	A	
611	S.I.	B	S 15・W 122 ~ 122	楕円	(1.0) × 2.5	A	
612	S.X.	B	S 15・W 122 ~ 122	楕円	(3.0) × (7.5)	C	高塚 1
613	S.K.	B	S 40・W 129	楕円形	1.2 × (0.5)	B	
614	S.K.	B	S 28・W 124	楕円形	2.0 × (1.0)	B	
615	S.K.	B	S 21・W 130	不整形	1.7 × 1.3	B	
616	S.K.	B	S 16・W 131	楕円形	1.1 × 0.7	B	
617	S.K.	B	S 16・W 131	楕円形	1.0 × 0.7	B	
618	S.K.	B	S 16・W 132	楕円形	0.8 × 0.7	B	
619	S.K.	B	S 15・W 134	楕円形	1.3 × 1.1	B	
620	S.K.	B	S 18・W 134	円形	0.7 × 0.7	B	
621	S.K.	B	S 15・W 135	円形	0.7 × 0.6	B	
698	S.K.	B	S 51・W 140			E	新石器
699	S.K.	B	S 51・W 140			E	新石器

第 2 表 A 区・B 区遺構属性表

C区

遺構No.	種類	区	位置	平面形	長×短径(m)	時期	出土遺物・備考
501	S-K	C	S 63・W 121	不整楕円形	1.4 × 0.6	C	土師器 人骨・埴土山・白磁片等
502	S-K	C	S 62・W 124	楕円形	1.0 × (0.5)	C	土師器
503	S-K	C	S 62・W 121	楕円形	(0.8) × (0.3)	C	土師器
504	S-K	C	S 63・W 120	楕円形	1.2 × 0.8	C	土師器
505	S-K	C	S 62・W 121	楕円形	1.2 × 0.8	C	土師器
506	S-K	C	S 64・W 120	不整楕円形	1.4 × 0.8	C	土師器
507	S-K	C	S 64・W 122	不明		C	土師器
508	S-K	C	S 64・W 122	楕円形	(0.8) × (0.3)	C	土師器
509	S-K	C	S 63・W 122	楕円形	(1.1) × (0.7)	C	土師器
510	S-K	C	S 64・W 122	楕円形	(0.8) × (0.6)	C	土師器
511	S-X	C	S 65・W 121	不明	直径 0.34	C	土師器
512	S-K	C	S 65・W 121	不整楕円形	1.4 × 0.6	C	土師器
513	S-K	C	S 65・W 122	不整楕円形	(1.2) × (0.8)	C	土師器
514	S-K	C	S 65・W 120	楕円長方形	(1.1) × 0.6	C	土師器
515	S-K	C	S 64・W 120	楕円長方形	1.4 × (0.5)	C	土師器
516	S-K	C	S 65・W 118	不整楕円形	1.0 × 0.5	C	土師器
517	S-K	C	S 65・W 118	不整楕円形	0.9 × (0.3)	C	土師器
518	S-K	C	S 65・W 119	不明	(0.6) × (0.2)	C	土師器
519	S-K	C	S 65・W 118	楕円形	(0.7) × (0.4)	C	土師器
520	S-K	C	S 65・W 117	楕円形	(0.8) × (0.7)	C	土師器
521	S-K	C	S 65・W 116	不整楕円形	(1.4) × 0.9	C	土師器
522	S-K	C	S 65・W 118	楕円長方形	(0.8) × 0.7	C	土師器
523	S-K	C	S 65・W 119	不整方形	1.2 × 1.0	C	土師器
524	S-K	C	S 64・W 119	不整形	(0.6) × (0.5)	C	土師器
525	S-K	C	S 65・W 117	不整楕円形	1.4 × 0.7	C	土師器
526	S-K	C	S 64・W 119	不整楕円形	1.7 × 0.7	C	土師器
527	S-K	C	S 63・W 118	不整楕円形	0.8 × 0.8	C	土師器
528	S-K	C	S 63・W 119	楕円形	1.2 × 0.6	C	土師器
529	S-K	C	S 63・W 118	楕円形	1.3 × 0.6	C	土師器
530	S-K	C	S 63・W 117	不整楕円形	1.0 × 0.6	C	土師器
531	S-K	C	S 63・W 117	不整楕円形	(0.8) × 0.6	C	土師器
532	S-K	C	S 63・W 117	不明	(0.6) × (0.4)	C	土師器
533	S-K	C	S 63・W 116	不整楕円形	0.7 × 0.6	C	土師器
534	S-K	C	S 64・W 116	不整楕円形	1.2 × 0.7	C	土師器
535	S-K	C	S 64・W 117	楕円形	1.0 × 0.8	C	土師器
536	S-K	C	S 64・W 116	楕円形	1.3 × 0.6	C	土師器
538	S-K	C	S 65・W 115	不明	(0.7) × (0.3)	C	土師器
539	S-K	C	S 63・W 114 ~ 116	長楕円形?	(2.0) × (1.4)	A	(遺構) 大木 6
540	S-K	C	S 63・W 121	楕円形?	(0.5) × (0.2)	C	土師器
541	S-K	C	S 63・W 121	楕円形?	0.7 × (0.4)	C	土師器
549	S-K	C	S 63・W 120	楕円形	(0.8) × (0.5)	C	土師器
560	S-K	C	S 64・W 120	不整楕円形?	(0.5) × (0.4)	C	土師器
561	S-K	C	S 64・W 121	楕円形?	(0.6) × (0.3)	C	土師器
562	S-K	C	S 64・W 117	不整形	(0.8) × (0.6)	C	土師器
563	S-K	C	S 64・W 114	不整楕円形	0.8 × 0.6	C	土師器
590	S-I	C	S 66 ~ 69・W 87 ~ 92	楕円長方形	(1.5) × (3.5)	D	(遺構) ロウソク燭臺・須臾器・大瓶・大甕 ~ 土師器
597	S-I	C	S 68 ~ 69・W 82 ~ 85	楕円長方形	(5.9) × 3.0	A	(遺構) 大木 5b ~ 7, 大甕(2ヶ), 大甕(1ヶ)
598	S-I	C	S 68 ~ 69・W 82 ~ 85	楕円長方形	10.0 × 4.0	A	(遺構) 大木 5b ~ 7, 大甕(2ヶ), 大甕(1ヶ)
599	S-I	C	S 68 ~ 69・W 82 ~ 85	楕円長方形	7.5 × (2.5)	A	(遺構) 大木 5b ~ 7, 大甕(2ヶ), 大甕(1ヶ)
676	S-I	C	S 64・W 94 ~ 98	楕円長方形	(3.0) × (1.5)	D	
677	S-K	C	S 64・W 98	楕円形	(1.0) × 1.0	D	
678	S-K	C	S 69・W 108	不整楕円形	3.1 × 1.0	D	
679	S-K	C	S 71・W 108	不整楕円形	0.7 × 0.7	D	
680	S-K	C	S 72・W 108	楕円形	1.1 × 0.8	D	
681	S-K	C	S 72・W 109	不整楕円形	1.2 × 0.8	D	
682	S-K	C	S 73・W 110	不整楕円形	2.0 × (1.6)	D	
683	S-K	C	S 63・W 11 ~ 117	区間 × 3周壁土壇	(5.2) × 4.5	B	区間 × 3周壁土壇から 6.1kg・1.5・1.5, 前柱・前壁から 1.5・1.5・(2.0)
684	S-B	C	S 62 ~ 65・W 14 ~ 120	3周 × (間隔) 土壇	東側 6.0	E	区間 × 3周壁土壇から 6.1kg・1.5・1.5, 前柱・前壁から 1.5・1.5・(2.0)
685	S-K	C	S 69・W 105	楕円形	0.8 × 0.7	D	
686	S-K	C	S 69・W 105	楕円形	1.2 × 0.7	D	
687	S-K	C	S 69・W 105	楕円形	0.6 × 0.5	D	
688	S-K	C	S 69・W 105	楕円形	0.6 × 0.5	D	
689	S-K	C	S 69・W 105	楕円形	0.6 × 0.6	D	
690	S-K	C	S 65・W 99	不整楕円形	2.4 × 0.6	D	
遺構No.	種類	区	位置	平面形	長×短径(m)	時期	出土遺物・備考
549	S-I	D	S 66 ~ 61・W 65 ~ 70	楕円長方形	4.5 × 3.7	D	(遺構) 土師器, 大木 5
551	S-I	D	S 31 ~ 36・W 62 ~ 66	楕円長方形?	(4.6) × 4.0	D	(遺構) 大木 6・7
552	S-I	D	S 32 ~ 36・W 62 ~ 66	楕円長方形	3.0 × 3.6	D	(遺構) 土師器
554	S-K	D	S 66 ~ 61・W 65 ~ 70	楕円長方形	(8.6) × 4.6	A	(遺構) 土師器
555	S-K	D	S 69 ~ 63・W 69 ~ 73	楕円長方形?	(3.0) × 4.0	A	(遺構) 大木 7, 土師
564	S-X	D	S 58・W 60	不明		楕円形	
565	S-X	D	S 60・W 60	不明		楕円形	
566	S-X	D	S 60・W 60	不明		楕円形	
569	S-K	D	S 62・W 84	楕円形?	1.5 × (0.5)	C	
651	S-X	D	S 62・W 84	楕円形?	(1.8) × (1.8)	D, A	
652	S-K	D	S 60・W 81	楕円形	.7 × (0.7)	C	
653	S-K	D	S 58・W 84	楕円形	(1.2) × (0.5)	C	
654	S-K	D	S 58・W 81	不整楕円形	1.5 × (0.5)	C	
655	S-K	D	S 60・W 81	不整楕円形	1.3 × 0.7	C	
656	S-K	D	S 61・W 78	楕円形	1.8 × 1.4	C	
657	S-K	D	S 59・W 78	不整楕円形	2.0 × 1.7	C	
658	S-K	D	S 60・W 76	楕円形	2.0 × 1.7	C	
659	S-K	D	S 58・W 72	不整楕円形	2.0 × 1.5	C	
661	S-K	D	S 63・W 69	楕円形	(2.0) × (0.8)	C	
662	S-K	D	S 60・W 60	不整楕円形	1.9 × 1.7	C	(遺構) 土師器, 大木 6 ~ 7
691	S-B	D	S 27 ~ 30・W 31 ~ 37	3周 × 1 周壁土壇	4.0 × 3.0	D	区間 × 3周壁土壇から 1.5・1.2・1.5, 前壁 3.0
692	S-K	D	S 46・W 74	不明	(0.8) × 0.8	C	
693	S-B	D	S 46・W 73 ~ 80	(区間) × (1周)	2.8	C	区間 × 1.4・1.4
694	S-K	D	S 46・W 81	不整楕円形?	(2.2) × (0.8)	C	
695	S-K	D	S 46・W 83	不明	(1.8) × (1.8)	C	
696	S-K	D	S 51・W 69	不整楕円形	(0.8) × 0.7	C	

第3表 C区・D区遺構属性表

E・M区

遺構No	種類	区	位置	平面形	長×幅(m)	時期	出土遺物・備考
565	S	F	S 22~25・W 41~49	長方形	5.1(33)×5.5(35)	A	土器(5)と同じ産物
579	S	F	S 25~28・W 41~49	長方形	(7.5)×(6.5)	A	
580	S	F	S 25・W 72~75	長方形	(2.5)×(2.0)	D	(焼)大木S b・6
581	S	F	S 29~36・W 60~67	隅丸長方形?	S.1(7.25)範囲	A	
583	S	F	S 32~39・W 49~47	隅丸長方形?	(4.5)×(3.0)	A	(焼)大木S・6・7
584	S	F	S 43~49・W 31~31	隅丸長方形?	(4.5)×(3.0)	A	(焼)大木S・6・7、(焼)大木S
585	S	F	S 41・W 58	隅丸長方形?	幅6.3	A	
714	S	F	S 44~47・W 32~39	長方形	(8.0)×3.0	A	大木6
716	S	F	S 46~53・W 35~32	不整形	6.2×2.5	A	(焼)大木S・6・7、大木A、西産物
719	S	F	S 37~44・W 39~39	長方形	4.6×2.7×2.7	A	
720	S	F	S 39~44・W 36~39	不整形	A:5.8×(4.3) B:7.3×(4.5)	A	大木S、A-1(杉板)
721	S	F	S 35~41・W 49~45	不整形	5.2×(4.0)	A	(焼)大木S・6・7
722	S	F	S 34~39・W 38~43	不整形	6.0×4.5	A	大木6
723	S	F	S 38・W 40	円形	1.8×1.4	A	大木7
724	S	F	S 39・W 40	円形	1.0×1.0	A	
725	S	F	S 29~36・W 38~48	不整形	7.5×6.0	A	(焼)大木6・7、(焼)焼文産物
726	S	F	S 31・W 39	楕円形	0.8×0.6	A	大木7
727	S	F	S 24・W 40	不整形	1.7×1.4	A	大木6
728	S	F	S 31・W 38	不整形	0.8×0.7	A	大木6~7
729	S	F	S 30・W 38	楕円形	(0.8)×(0.8)	A	大木6~7
730	S	F	S 31・W 37	不整形	(1.8)×1.8	A	
731	S	F	S 32・W 37	不整形	1.4×1.2	A	大木6
732	S	F	S 29~31・W 31~33	長方形	(4.0)×3.0	A	大木S・6
733	S	F	S 33・W 34	楕円形	1.0×0.7	A	
734	S	F	S 43・W 39	楕円形	1.8×1.3	A	大木6
735	S	F	S 48・W 33	楕円形	1.0×0.8	A	
736	S	F	S 33~39・W 31~31	隅丸長方形	東面4.3×西面5.5	D	5(土器)、土師器(井口口内・内底・若狭)
737	S	F	S 32~39・W 19	隅丸長方形	1.5×0.9	C	大木6、西産物
740	S	F	S 31~33・W 21~29	隅丸長方形	A:東面3.3 B:東面3.4	D	5(土器)、A-1(杉板)、西産物、土師器、土師器、土師器、土師器
741	S	F	S 33・W 31	円形	1.0×(0.3)	A	
742	S	F	S 33・W 23	不整形	1.0×(0.7)	D	
743	S	F	S 39・W 16~19	不整形	幅0.75	C	大木A
744	S	F	S 31~36・W 15~15	隅丸長方形?	(南北3.5)×(東西2.5)	C	大木7 b?
745	S	F	S 36・W 13	隅丸長方形?	1.4(北)×0.8	C	大木6、大木A'、西産物
746	S	F	S 49~52・W 16	不明	(南北3.0)	C	大木5?
830	S	F	S 37~39・W 47~47	長方形		A	A:東面3.3、B:東面5.4(南北3.0)、A-1(杉板)
831	S	F	S 37・W 48	楕円形		A	南北4.0、A-1(杉板4.0)、B-1(東西3.4)
832	S	F	S 37・W 36	隅丸長方形?		A	
833	S	F	S 33~36・W 33~33	隅丸長方形?	(東西4.0)×(南北2.2)	A	
834	S	F	S 35・W 23	隅丸長方形?		A	堀溝の外
835	S	F	S 36・W 37	不整形	1.5×1.5	A	
836	S	F	S 49・W 32	楕円形		A	
837	S	F	S 33・W 20	円形	0.7×0.7	A	
838	S	F	S 46~51・W 23~30	楕円形		B	十国堂設備(焼文産物×式)
839	S	F	S 33・W 40	楕円形		A	
840	S	F	S 35・W 38	楕円形	1.2×0.7	A	
841	S	F	S 46・W 43	隅丸長方形	1.2×0.8	A	
842	S	F	S 47・W 41	隅丸長方形	1.0×1.0	A	
843	S	F	S 40~46・W 38~57	東西線		E	

F区

遺構No	種類	区	位置	平面形	長×幅(m)	時期	出土遺物・備考
571	S	F	S 58・W 24	長方形	4.5×(4.5)	A	(焼)土師器(大木6)、大木7
572	S	F	S 68・W 33	隅丸形	1.2×1.2	A	(焼)土師器
573	S	F	S 56~28・W 30~34	長方形	4.5×(4.5)	A	A-1(杉板)、(焼)大木6~7、西産物
574	S	F	S 56~28・W 30~34	長方形	(3.0)×(3.0)	A	
575	S	F	S 62・W 13	円形	1.3×1.2	A	(焼)大木S b
576	S	F	S 62~70・W 12~17	長方形?	6.3×5.0	A	(焼)大木6、大木A
664	S	F	S 16・W 17	円形	直径60cm	A	土師器設備
665	S	F	S 63・W 12	楕円形	1.2×0.8	A	
666	S	F	S 64・W 17	不整形	1.6×(0.4)	A	
667	S	F	S 66・W 17	楕円形	(0.9)×(0.7)	A	
668	S	F	S 58・W 32	不整形	2.1×1.8	A	風雨木板
669	S	F	S 60・W 20	不整形	(1.0)×1.0	A	風雨木板
670	S	F	S 50・W 24	不整形	1.2×1.2	A	風雨木板
671	S	F	S 48~52・W 50~53	隅丸長方形?	(3.5)×3.0	D	
672	S	F	S 50・W 33	円形	1.0×1.0	A	
673	S	F	S 27~31・W 36~35	隅丸長方形?	1.8×(4.6)	E	柱間土師器(井口内)から1.8×2.4
574	S	F	S 26~30・W 41~32	隅丸長方形?	1.8×(3.4)	E	柱間土師器(井口内)から2.2×2.8、2.4×3.0、 柱間土師器(井口内)から1.7×1.7
675	S	F	S 49~55・W 46~51	隅丸長方形?	(6.0)×6.0	E	柱間土師器(井口内)から3.3×3.5、土師器(井口内)から3.2×3.5
570	S	G	S 12~25・W 18~18	不明		A	東面線、焼文産物大木S-1(杉板)南産物
697	S	X	S 56~112・W 12~12	不明		A	内産物、大木B-1(杉板)南産物 (焼)大木C、A

J区

遺構No	種類	区	位置	平面形	長×幅(m)	時期	出土遺物・備考
701	S	J	S 34・W 119	不整形	1.2×0.8	A	大木C 2-A
702	S	J	S 33・W 117	楕円形	1.0×0.7	C	大木A-A
703	S	J	S 31・W 117	楕円形	0.9×0.7	C	大木A-A
704	S	J	S 31・W 118	不整形	1.6×1.2	C	大木6
705	S	J	S 30・W 118	不整形	1.6×1.1	C	大木6
706	S	J	S 29・W 117	楕円形	0.9×0.7	C	大木6
707	S	J	S 28・W 119	楕円形		C	大木6
748	S	J	S 25・W 113	楕円形	(0.6)×0.7	C	
749	S	J	S 25・W 113	楕円形	(0.8)×0.7	C	
740	S	J	S 24・W 118	楕円形	0.9×0.7	C	
751	S	J	S 33・W 113	楕円形	(1.0)×0.7	C	
752	S	J	S 32・W 114	不整形	0.8×0.6	C	
753	S	J	S 32・W 114	楕円形	(0.9)×0.7	C	
754	S	J	S 31・W 114	不整形	1.5×1.1	C	
755	S	J	S 34・W 112	不整形	1.6×1.3	C	
756	S	J	S 33・W 111	不整形	(1.0)×0.7	C	
757	S	J	S 32・W 111	不整形	(0.7)×0.6	C	
758	S	J	S 31・W 111	不整形	0.8×0.7	C	
759	S	J	S 31・W 110	楕円形	1.1×0.8	C	焼打物、(焼)大木A
760	S	J	N 2・W 134	楕円形	0.8×0.4	C	土師器設備、焼打物
761	S	J	N 4・W 135	楕円形		C	土師器設備、焼打物

第4表 E・M区、F区、J区遺構属性表

区	遺構No	種類	区	位置	平面形	長径×短径m	時期	出土遺物・備考
K区	708	SK	K	S.56・W.95	楕円形	2.5×2.1	C	断面図あり。
	709	SK	K	S.55・W.92	不整形	(南東3.0)×(北東3.7)	C	断面図あり。
	738	SK	K	S.55・W.96	楕円形	南東3.8 / (東西3.2)	C	断面図あり。土レン子散乱。西端、掛け面あり。
	739	S	L	S.56・W.102	楕円形	南東3.8 / (東西3.2)	D	土製土器・土レン子・土製土器・土製土器・土製土器
	762	S	L	S.56・W.102	不整形	1.7×1.4	C	焼土
	763	SK	K	S.40・W.88	楕円形	2.8×1.9	C	大木5.0×6.0・大木A
	764	SK	K	S.54・W.89	楕円形	2.1 / (1.5)	C	焼いぼ状のもの。骨入り。
	765	SK	K	S.40・W.88	不整形	1.7×1.4	C	焼土
	766	S	L	S.40・W.99	楕円形	東西4.0×(南北2.4)	D	土製土器・土製土器・土製土器・土製土器・土製土器
	767	SD	K	S.24~40・W.87	南北溝	幅0.9	E	
	768	SD	K	S.42~49・W.87	南北溝	幅1.0	E	
	769	S	L	S.55・W.103	楕円形	東西5.2×(南北4.7)	C	大木A
	770	SK	K	S.58・W.102	不整形	1.1×(0.5)	C	
	771	SK	K	S.58・W.106	不整形	0.7×(0.4)	C	
	772	SK	K	S.56・W.99	不整形	2.4×(0.6)	C	
	773	SK	K	S.59・W.98	円形	1.0 / (0.7)	C	
	774	SK	K	S.54・W.98	不整形	2.4×(0.7)	C	
	775	SK	K	S.54・W.97	楕円形	0.6×(0.6)	C	
	776	SK	K	S.54・W.98	不整形	1.1 / (0.6)	C	
	777	SK	K	S.54・W.93	不整形	0.8 / (0.8)	C	
	778	SK	K	S.56・W.83	円形	1.4×1.4	C	
	779	SK	K	S.56・W.91	不整形	2.1×1.5	C	
	780	SK	K	S.57・W.91	楕円形	0.8×0.6	C	
	781	SK	K	S.55・W.90	不整形	1.8×1.0	C	
	782	SK	K	S.59・W.90	楕円形	1.0 / (0.8)	C	
	783	SK	K	S.59・W.89	楕円形	1.6 / (1.5)	C	
	784	SK	K	S.58・W.89	楕円形	1.0×(0.5)	C	
	785	SK	K	S.53・W.88	不整形	1.8×1.1	D?	
	786	SK	K	S.28・W.100	楕円形	0.8 / (0.7)	D?	
	787	SK	K	S.28・W.94	円形	0.7 / (0.7)	D?	
	788	SK	K	S.40・W.102	楕円形	(0.7)×(0.6)	D?	
	789	SK	K	S.39・W.99	円形	(0.7)×(0.6)	D?	
	790	SK	K	S.38・W.99	円形	0.7 / (0.7)	D?	
	791	SD	K	S.28・W.96	南北溝	幅0.3	E	
	792	SD	K	S.55~28・W.96	南北溝	幅0.4	E	
	793	SK	K	S.57・W.95	円形	0.7 / (0.7)	C	
	794	SK	K	S.57・W.95	円形	0.7 / (0.7)	C	
	795	SK	K	S.59・W.90	楕円形	0.7 / (0.4)	C	
	796	SK	K	S.59・W.89	楕円形	0.7 / (0.4)	C	
	797	SK	K	S.58・W.89	楕円形	0.7 / (0.5)	C	
798	SK	K	S.55・W.88	不明	(0.4) / (0.4)	C		
799	SK	K	S.54・W.96	円形	0.7 / (0.7)	C		
800	SK	K	S.54・W.94	不明	(0.5)×(0.4)	C		
801	SK	K	S.55・W.93	楕円形	0.6×(0.6)	C		
802	S	L	S.38~40・W.91	南北溝	断面図あり	E		
803	S	L	S.40~49・W.91	南北溝	断面図あり	E		
804	S	L	S.51~59・W.92	南北溝	断面図あり	E		
805	S	L	S.49・W.91	楕円形	南北3.2×不明	D		
区	遺構No	種類	区	位置	平面形	長径×短径m	時期	出土遺物・備考
L区	710	S	L	S.39・W.80	楕円形	(東西2.4)×(南北1.7)	D	(遺構) 大木B、土器
	711	SK	L	S.39・W.76	不整形	(1.7)×1.8	A~C	(遺構) 大木B
	712	SK	L	S.39・W.72	不整形	(1.8)×1.8	A~C	(遺構) 燧石
	713	SK	L	S.39・W.69	不整形	(2.0)×1.5	A~C	(遺構) 大木C
	806	SD	L	S.38~49・W.81	南北溝	幅0.7	E	
	807	SD	L	S.42・W.74~76	東西溝	幅0.5	E	東西溝
	808	SD	L	S.42・W.66~70	東西溝	幅0.4	E	東西溝
	809	SD	L	S.53~26・W.71	南北溝	幅0.4	E	南北溝
	810	SD	L	S.29・W.61~63	東西溝	幅0.4	E	東西溝
	811	SK	L	S.39・W.72	楕円形	1.1 / (0.7)	A~C	
	812	SK	L	S.40・W.71	楕円形	0.6 / (0.6)	A~C	
	813	SK	L	S.41・W.68	円形	1.0×1.0	A~C	
	814	SK	L	S.42・W.68	不整形	1.2 / 1.0	A~C	
	815	SK	L	S.42・W.76	不整形	(1.3)×1.3	A~C	
	816	SK	L	S.39・W.65	楕円形	2.5×1.8	A~C	
	817	SK	L	S.36・W.62	楕円形	1.2×1.0	A~C	
	818	SK	L	S.37・W.61	楕円形	(0.9)×0.8	A~C	
	819	SK	L	S.37・W.62	楕円形	1.1×1.0	A~C	
	820	SK	L	S.24・W.70	不整形	1.5×1.0	A~C	
	821	SK	L	S.28・W.66	不整形	0.8 / (0.7)	A~C	
	822	SK	L	S.42・W.64	不整形	1.0×0.6	A~C	
	823	SK	L	S.43・W.64	円形	0.7 / (0.7)	A~C	
	824	S	L	S.30~34・W.60	南北溝	幅0.4	E	
	825	S	L	S.32~38・W.62	南北溝	幅0.5	E	半壊穴2ヶ所、焼付痕。
	826	S	L	S.38~42・W.63	南北溝	幅0.5	E	
	827	S	L	S.6~41・W.66	南北溝	幅0.5	E	桁行3間以上×縦行2間以上
	828	S	L	S.38~41・W.65	南北溝	幅0.5	E	桁行4間以上×縦行2間以上
	829	S	L	S.42~41・W.65	南北溝	幅0.5	E	桁行3間以上×縦行2間以上の西側
	830	S	L	S.42~41・W.65	南北溝	幅0.5	E	桁行2間以上×縦行2間以上の西側
	区	遺構No	種類	区	位置	平面形	長径×短径m	時期
N・O区	844	SK	N	S.61・W.17	楕円形	(0.8) / (0.8)	不明	
	845	SK	N	S.67・W.19	楕円形	(1.0)×1.3	不明	
	846	SK	N	S.70・E.7	不整形	1.4×0.8	D	焼付痕、S×N46とセット焼痕。
	847	SK	N	S.70・E.7	不整形	1.2×1.0	D	炭化物集中遺構。
	848	S	N	S.61~64・E.3~E.2	東西溝	桁行3間×縦行1間以上	E	
	849	S	N	S.61~64・E.3~E.2	東西溝	桁行3間×縦行4間以上	E	
	850	S	N	S.38・W.6	不整形	2.2×2.0	不明	炭化物集中遺構。
	851	SD	O	S.43・E.18~24	東西溝	幅50cm	E	
	852	SD	O	S.31~35・W.14~16	南北二重溝	幅80cm	E	
	853	SD	O	S.51・E.1~5	不明	(桁行3間1×(縦行1間))	E	

第5表 K区、L区、N区、O区遺構属性表

第四章 考 察

今回、竪穴住居跡54軒、掘立柱建物跡19棟、土墳228基（うち土壇墓45基）、土器埋設遺構3基、溝跡18条、遺物包含層1か所などを確認した。これらは遺物や堆積土の特徴、特徴的な遺物の時期等によりおおよそ(1)縄文時代前期後葉～中期前葉、(2)縄文時代後期中葉、(3)縄文時代晩期後葉～弥生時代前期、(4)古代、(5)中近世のものに分けられ、数的には(1)(3)が主体となる。

ここでは、主要な遺構の時期と特徴等を記述し、その後、遺跡の性格について検討する。

I. 遺構の時期と特徴

(1) 縄文時代前期後葉～中期前葉

〔竪穴住居跡〕

竪穴住居跡はA、B、C、D、E・M、F区でJ、K、L区付近の空間を環状に囲むように確認した。平成11・12年度調査区ではW10～135に南に開く半円状に当該期の竪穴住居跡を確認していることから、N20～S75、W10～135が集落の範囲と考えられる（第48図）。

竪穴住居跡の時期は、縄文時代前期後葉大木5式期～中期前葉大木7b式期の遺物が出土していることから、大きくはこの時期のものと考えられるが、これらを竪穴住居跡の長軸方向、特徴的な遺物、重複関係などをもとにみてもと、

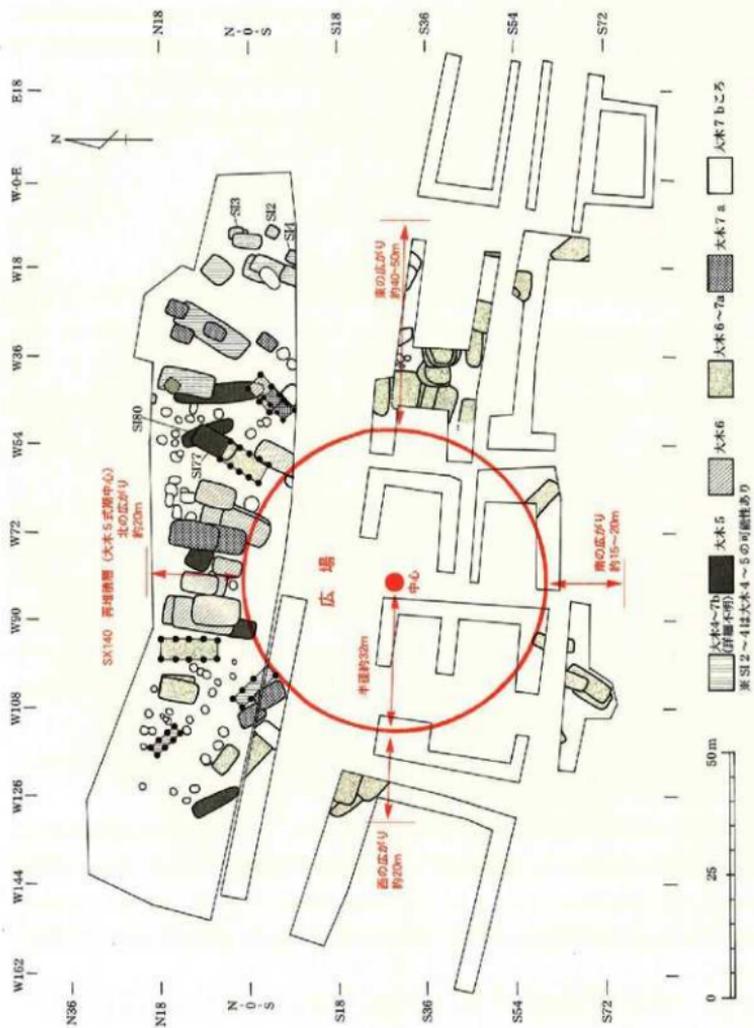
- ①竪穴住居跡の長軸方向は不明だが、遺物は鋸歯状粘土紐貼付文を主文様とするもの（S I 746）。
- ②竪穴住居跡の長軸方向が空間の中心を向き、遺物は、器形が4単位の小波状口縁をもつ下膨らみの長胴形のものや金魚鉢形で、主文様が半截竹管文（平行沈線文、短沈線文など）、円形貼付文、円形刺突文、縦位貼付文・隆帯等が施されるものであるが、出土遺物がないものも少数含まれる（A区：S I 591・638・644・645、B区：609～611、C区：S I 539・597～599、D区：S I 554、E・M区：S I 579・581・583・584・761・714・716・719～722・831、F区：S I 571・573・576、K区S I 738）。
- ③竪穴住居跡の長軸方向が空間の中心を向かず、A区の重複関係から②より新しいと思われるもの（S I 583・732・744・833）に分けられる。

時期は遺物の特徴等から①は縄文時代前期後葉大木5式期ころ、②は縄文時代前期後葉大木6式期～中期初頭大木7a式期ころ、③は縄文時代中期初頭大木7a式期以降であるが、縄文時代中期前葉大木7b式期の遺物も出土していることから縄文時代中期初頭大木7a式期～中期前葉7b式期ころと考えたい。なお、調査の性格上、②の竪穴住居跡を大木6式期、7a式期などに分類することは困難であった。

以上のことから、竪穴住居跡は①→②→③と変遷し、数的には②が主体になると推定される。これらの竪穴住居跡の特徴を時期ごとにみてもと次ようになる（第48図）。

〔大木5式期〕

今回は1軒（MFS I 746）検出しただけだが、平成11・12年度調査区で5軒以上確認している。主



第48図 縄文時代前期後葉～中期前葉の遺構

に遺跡北側・東側に散在している。住居跡は①長軸約18mの長方形基調のもの、②長軸約7～9mの長方形のもの、③一辺約3mの正方形のものがある。①はいわゆるロングハウスと呼ばれる大型住居跡、③は支柱が一木柱の小型住居跡・小型竪穴遺構で、大型住居に伴ってその外側（東側）に位置しているのが特徴的である。住居跡の方向は長軸方向がN-0°～30°-Wのもの、N-20°～30°-Eがあるが特に規則性は認められない。なお、S I 77は当該期のS I 80より新しく、竪穴住居跡の長軸方向も後述する環状集落を形成する竪穴住居跡と一致していることから、環状集落の始まりが大木5式期まで遡る可能性も考えられている（佐藤・三好：2003）。

【大木6～7 a式期】

竪穴住居跡がA区東側、J、K、L区付近の空間を囲むように環状に分布し、長軸方向も空間の中心を向くことから、A区東側、J、K、L区付近の空間（広場）を囲むように環状集落を構成する時期と考えられる。環状集落の特徴をまとめてみると、以下のようになる。

- ①集落の規模はN 20～S 75 付近、W 10～135 付近の東西約125 m、南北約95 mの楕円形、広場はK区北東隅付近を中心とする半径約32 m（直径約64 m）の円形と推定される。
- ②竪穴住居跡の大半は広場の外側約20～30 mの範囲に認められるが、集落の東側では約50 mまで範囲が広がる。
- ③竪穴住居跡の長軸方向は、基本的に広場の中心を向いている。
- ④竪穴住居跡はほぼ同位置で2～3回の変遷がみられ、各住居も2～3回作り替えられている。
- ⑤竪穴住居跡の平面形は、規模が大き（長径18 m前後）長方形を基調としたもの、これより小規模（長径7～9 m程度）な長方形・方形を基調としたものがあり、重複関係から前者より後者の方が新しい傾向にある。

このうち①②については、集落の範囲はN 20～S 75、W 10～135 であるが、その東側も平坦な地形が続いていることから、当時、この空間を何らかの形で利用していたことは想像に難しくなく、約300 m東方の丘陵先端部まで生活範囲だったと予想される。一方、南、西、北については沢や急崖になるなど地形的制約があるため、居住域は限られていたと考えられる。

【大木7 a式期以降～大木7 b式期】

竪穴住居跡の長軸方向が広場の中心を向かず、環状配置を採る強い規制が解けた時期と考えられるが、竪穴住居跡が前段階の環状集落の範囲内に引き続き認められることから、居住域については何らかの規制があったと思われる。なお、当該期は、出土遺物の中で最も新しい遺物はM区S I 719 堆積土出土の深鉢胴部資料（第29図12）で、大木7 b式でも比較的新しいものと考えられることから、縄文時代中期前葉大木8式期直前まで存続したと推定される。

【土城】

平成11・12年度調査区のおぼろ全域と、E・M区にまとまって分布する。住居跡に隣接して認められるのが特徴的である。

(2) 縄文時代後期中葉

M区SX 838 土器埋設遺構がある。SX 838 土器埋設遺構は残存状況が悪く、詳細は不明であるが、土器の文様から縄文時代後期中葉宝ヶ峯式期でも比較的新しいものと考えられる。

(3) 縄文時代晩期後葉～弥生時代前期

縄文時代晩期後葉～弥生時代前期のものを一括して検討するが、時期が明確なものについては個々に記述する。竪穴住居跡、土壌、土壌墓、土器埋設遺構、遺物包含層、貝層などがある（第49図）。

【竪穴住居跡・焼け面】

2軒確認した（K区SI 769、M区SI 743）。このうちK区SI 769から大洞A式期の土器が出土している。その他、本来は住居跡に伴うと思われる焼け面3ヵ所（J区SX 759～761）を確認した。

【土壌】

土壌は大きく①B・J区、②D・K区、③M区東端3つのグループに分けられ、①②に多く認められる。なお、B区で確認した土壌の中には、B区SK 544・545 および平成11・12年度調査区西側で縄文時代後期の遺物も出土していることから、縄文時代後期のものも含まれる可能性がある。

【土壌墓・土器埋設遺構】

C区西端に密集している。SK 501 土壌墓に埋葬された人骨のC14年代測定やSX 511 土器埋設遺構（土器棺墓）の特徴などから縄文時代晩期後葉～弥生時代前期ころのものと思われる。

【遺物包含層・貝層】

遺物包含層は1ヵ所確認した（SX 541）。一部を精査しただけだが、弥生時代前期の土器が主体的に出土しており、このころに形成されたものと考えられる。ただし、沢頭にあたるため良好な包含層ではない。その他、調査は行っていないが、B区西側の急崖に形成された縄文時代晩期の貝層を確認している。

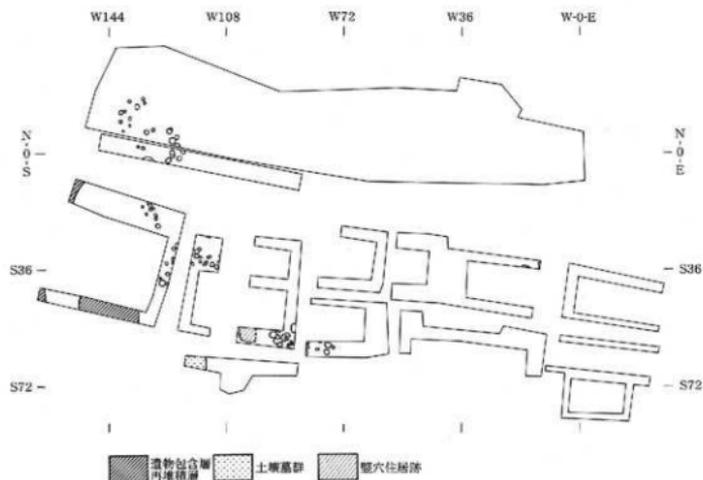
以上のように、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の住居跡、墓跡、捨て場は、主に遺跡の南西部で確認できる。なかでもC区西端の土壌墓群は残存状況も良好で、当時の埋葬方法等を知る上で有意であった。しかし、後世の削平により失われた可能性があるものの、居住域を明確にできなかった点に課題が残った。

(4) 古代

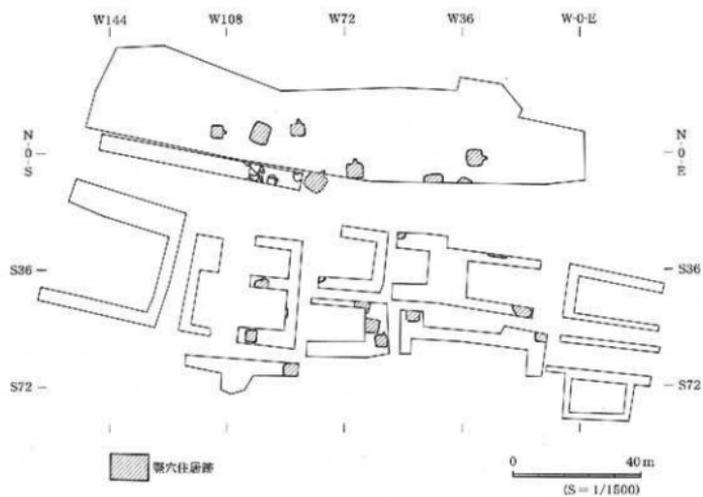
古代の遺構と認識できるのは、平面形が隅丸方形を呈する竪穴住居跡と、堆積土に土師器が含まれる土壌である。分布状況をみると遺跡中央の平坦部に散在して認められる（第50図）。年代のわかるものはM区SI 740 住居跡で、出土遺物から9世紀前半と考えられる。

(5) 中近世

掘立柱建物跡、溝跡があり、A区、K～M区付近にみられるが遺構数は少ない。掘立柱建物跡はいずれも柱列の方向が真北方向またはわずかに西に偏るものである。溝跡（SD 767・768）もほぼ同方向である。



第49図 縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構



第50図 古代の遺構

II. 調査成果とまとめ

今回の調査は本遺跡の性格をより明確にすることを目的に行ったものである。ここでは、第二章に記した調査目的に対応する形で調査成果をまとめ、遺跡の性格について検討する。

1. 調査目的と成果

調査の目的(①～⑤)と成果は次の通りである。

- ①遺跡の範囲を明確にする。
- ②縄文時代前期後葉～中期前葉の集落構成(主に環状集落)を確認する。
- ③縄文時代前期後葉～中期前葉の遺物包含層の有無を確認する(主に丘陵南斜面)
- ④縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の土壌墓の範囲を確認する
- ⑤丘陵西側斜面にある貝層の範囲・内容を確認する。

①については、おおよそ渠道若柳塚館線の南側の丘陵全体である(第1・2図)。調査の結果、遺構はN・O区付近まで確認でき、それ以东では認められなかったため主要な遺構の範囲は丘陵西端(およそW200)からN・O区(E27付近)までと考えられる(第48～50図)。しかし、平坦な地形が続く北東側の調査が不十分であることなどから遺跡の範囲については、これまで通りと考えたい。

②について、縄文時代前期後葉大木5式期～中期前葉大木7b式期の集落はN20～S74付近、W10～130付近と考えられる。なお、確実な遺構はないが平成11・12年度調査区で縄文時代前期大木4式期の土器が少量出土していることから、このころから生活の場になっていた可能性もある。大木5式期の住居跡は北・東側に散在して認められる。縄文時代前期後葉大木6式期～中期前葉大木7a式期の住居跡は環状集落を構成していることがわかった。また、A区S I 591住居跡から北陸系の深鉢の破片(縄文時代中期新保式、大木7a式期並行)が1点出土しており(第5図3)、北陸方面との関連が注目される。

ところで、近県における当該期の環状集落の発見例は、岩手県遠野市新田Ⅱ遺跡(佐藤・小向:2002)(現在の綾織新田遺跡、註4)、胆沢町大清水上遺跡(註5)、北上市蟹江館跡遺跡(北上市教育委員会:1993)、湯田町峠山牧場Ⅰ遺跡(財)岩埋文:1996)、雫石町塩ヶ森Ⅰ遺跡(財)岩埋文:1982)、秋田県協和町上ノ山Ⅱ遺跡(秋田県教育委員会:1988・1989)などがある。時期は綾織新田遺跡は縄文時代前期大木2～4式期で大型住居跡によって構成される集落跡の初期事例、その他の遺跡はこれに後続する時期である。このうち大清水上遺跡は縄文時代前期後葉大木5式期中心で本遺跡より一段階古い環状集落で、大型住居帯の外側に小型住居帯が配置されているが、この中に炉をもたず、住居中央に支柱が1本だけの特徴的な小型住居跡が報告されている。本遺跡でも、時期等に不明な点があるが、環状集落が本格化する前の大木4～5式期段階の可能性のある小型住居跡・小型竪穴遺構(S I 2・3・4)が集落の外側(北東側)に認められる。現段階で具体的な用途については不明で、本遺跡では床面に炭化物が密に認められることや集落の外側に位置することなどから住居跡の他に作業場の可能性も考えているが、この点については類例の増加を待ち、検討すべきことと思われる。なお、綾織新田遺跡では大型住居とともに支柱をもたない一辺15m前後の小型竪穴遺構が発見され、その規模等

から作業場、埋葬施設などの可能性を考えている。このようなことから、小型住居跡や小型竪穴遺構は縄文時代前期頃に大型住居に伴って特徴的に認められるものかもしれない。

③について、遺跡北側の沢頭に縄文時代前期後葉大木5式期中心の再堆積層（SX140）を確認している（佐藤・三好：2003）。SX140には縄文時代前期以外の遺物は含まれないことなどから、本来はこの付近がゴミ捨て場（遺物包含層）であったものが、再堆積したものと思われる。また、遺跡の西側で縄文時代晩期ころの遺物を含む貝層を確認しているが、これらの下層に存在する可能性もある。

④について、土壌墓群の範囲は遺跡南西のC区西側付近に限定される。年代はSK501土壌墓に埋葬されていた人骨の放射性炭素年代測定の結果、人骨の年代はおおよそ2405BPで縄文時代晩期後葉～弥生時代前期のものと考えられる。土壌墓群は比較的残存状況が良好で骨の位置などからある程度埋葬形態が想定できた。仰臥屈葬位で埋葬されたものは、長径14m前後×短径07m前後の楕円形、隅丸長方形、側臥屈葬位で埋葬されたものは、前者より規模が小さく、D字に似た不整形形、楕円形の掘り方をもつなど土壌墓の平面形との関係が認められ、本遺跡では前者が主流であることがわかった。なお、当該期の居住域について、大洞A式期頃の住居跡はJ・K区で2軒確認でき、おおよそ遺跡南西部に居住域があると予想されるが、M区でも住居跡や土壌が確認され、東にも居住域が広がる可能性もある。

⑤について、B・G区では検出できなかったが、B区から約20m西側の斜面付近に貝層が散布しているのを確認した。詳細は不明だが、縄文時代晩期の遺物が含まれるので、おおよそ④の時期のものと思われる。

その他、縄文時代後期中葉～後葉、古代、中近世の遺構も少数確認した。

2. まとめ

上述したとおり、本遺跡は縄文時代前期後葉から中近世に至るまで断続的に営まれた集落跡である。

特に縄文時代前期後葉大木6式期～中期初頭大木7a式期の環状集落が発見されたのは宮城県内では初めてで、東北地方中南部の拠点集落を考える上で重要な遺跡となった。しかし、縄文時代前期後葉大木5式期中心の捨て場は確認できたものの、環状集落が形成されていた時期の捨て場や墓域は確認できなかった。

また、不足な点があるものの、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の住居跡（居住域）、土壌墓（墓域）、遺物包含層（捨て場）を確認できたことは大きな成果である。なかでも土壌墓は残存状況が良好で、当時の埋葬方法等を知る貴重な遺構である。

註

註1：蟹沢遺跡では平成14年度に町道改良工事に伴う事前調査が行われ縄文時代中期後葉（大木10式期）～後期前葉（南境式期）、古代の集落跡を発見した。報告書は平成16年度刊行予定である。

註2：東北歴史資料館（1989）では「北上川中流域貝塚群」としている。

註3：これらの土壌は古代の土壌と特徴も似ているため、古代のものが含まれている可能性もある。

註4：平成14年（2002年）11月に国指定史跡となる。遺跡名は報告書刊行段階では「新田Ⅱ遺跡」（佐藤・小向：2002）であったが、史跡申請にあたり「綾織新田遺跡」に改められた。

註5：平成14年（2002年）11月2日に行われた現地説明会資料によるものである。

引用・参考文献

相原淳一（1986）：「小梁川遺跡遺物包含層土器編一七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第117集

相原淳一・中鉢琢也（2002）：「平成13年度嘉倉貝塚確認調査概報一伊治城跡他」『築館町文化財調査報告書』第15集

秋田県鹿角市教育委員会（1985～2000）：『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書』①～⑦

秋田県教育委員会（1988）：「上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡一東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ」『秋田県文化財調査報告書』第166集

秋田県教育委員会（1989）：「上ノ山Ⅱ遺跡一東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ（補遺）」『秋田県文化財調査報告書』第186集

阿部博志（1980）：「原田遺跡一東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第63集

阿部志（1975）：「蟹沢遺跡一宮城県文化財発掘調査略報（昭和50年度）」『宮城県文化財調査報告書』第40集

阿部志（1990）：「倉崎貝塚・唐木崎貝塚」『泊町文化財調査報告書』第1集

阿部志・遊佐五郎（1978）：「長者原貝塚」『南方町文化財調査報告書』第1集

伊東信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』第1巻

岩手県教育委員会（1998）：「岩手の貝塚」『岩手県文化財調査報告書』第102集

江坂輝彦（1950）：「北上川流域奥部貝塚の調査」『貝塚』29土曜会

小川出・村田晃一（1985）：「今熊野遺跡Ⅱ縄文・弥生時代編」『宮城県文化財調査報告書』第114集

加藤孝（1955）：「宮城県登米郡新田村糠塚貝塚について」『登米郡新田村史』

加藤孝・後藤勝彦（1975）：「宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告書」『南方町史』資料編

北上市教育委員会（1993）：「蟹沢遺跡発掘調査概報」『北上市埋蔵文化財調査報告書』第14集

興野義一（1968）：「迫川流域の石器時代文化」『山台郷土研究』第18巻第3号

興野義一（1969）：「糠塚貝塚について」『日本考古学年報』第17巻

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1982）：「塩ヶ森Ⅰ遺跡」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第31集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1995）：「峠山牧場Ⅰ遺跡B地区範囲確認調査報告書」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第233集

- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (2000) : 『白山牧場 I 遺跡 B 地区発掘調査報告書—東北横所自動車道
秋田線建設事業関連遺跡発掘調査』『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第 320 集
- 佐藤信行 (1973) : 「築館町高倉貝塚調査概報—宮城県下に於ける最奥部の貝塚—」『築館町史資料』築館町文化財保護委
員会
- 佐藤信行 (1976) : 「原始・古代」『築館町史』築館町史編纂委員会
- 佐藤浩彦・小向裕明 (2002) : 「新出 II 遺跡」『遠野市埋蔵文化財調査報告書』第 13 集
- 佐藤憲幸・三好秀樹 (2003) : 「高倉貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第 192 集
- 須藤隆 (1968) : 「東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究—縄文文化から弥生へ—」纂修堂
- 手塚均 (1985) : 「田柄貝塚 I—遺構・土器編—」『宮城県文化財調査報告書』第 111 集
- 東北歴史資料館 (1989) : 「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25
- 中川久夫 (1992) : 「伊豆沼・内沼付近の地形・地質」『伊豆沼・内沼環境保全対策に関する報告書』
- 丹羽茂 (1981) : 「大木式土器」『縄文文化の研究』4
- 林謙作 (1984) : 「宮城県下の縄文期貝塚群」『宮城の研究』第 1 巻清文堂
- 藤沼邦彦 (1969) : 「長根貝塚第 I トレンチの層序と遺物」『宮城県文化財調査報告書』第 19 集
- 古川工業高等学校郷土研究会 (1974) : 『うなぎ沢遺跡現地説明会資料』
- 福島県立博物館 (1988) : 「三貫地貝塚」『福島県立博物館調査報告』第 17 集
- 宮城県教育委員会 (1975) : 「蟹沢遺跡」宮城県文化財調査報告書』第 40 集
- 宮古市教育委員会 (1995) : 「崎山貝塚—範囲確認調査報告書—」『宮古市埋蔵文化財調査報告書』第 44 集
- 武藤康弘 (1996) : 「縄文時代の大型住居—長方形大型住居の共時的通時的分析」『縄文式生活構造』同成社
- 森真喜 (1980) : 「木戸遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書 III」『宮城県文化財調査報告書』第 69 集
- 森真喜 (1983) : 「佐内屋敷遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書 VII」『宮城県文化財調査報告書』第 93 集
- 山内清男 (1937) : 「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』第 1 巻 1 号。山内清男先史考古学論文集第 1 冊 (1967・

嘉倉貝塚出土人骨に関する食性復元と放射性炭素年代測定

独立行政法人国立環境研究所

化学環境研究領域・動態化学研究室

米田 穰

1. はじめに

本研究では、宮城県栗原郡築館町字萩沢加倉に立地する嘉倉貝塚から出土した2個体の人骨について、炭素と窒素の同位体比を測定し、彼らがタンパク質を摂取した食料を推定することを試みた。あわせて、放射性炭素を測定することで、これらの個体が死亡してからの経過時間を測定した。

嘉倉貝塚はカラスガイ、オオタニシ、イシガイなどを含む淡水性の貝塚として知られており、縄文時代人のタンパク質源としてそれらが重要であった可能性が考えられる。湖沼や河川などの生物では、環境汚染の影響が陸上や海洋などよりも顕著であり、現生の淡水性魚貝類の同位体比は大きく攪乱されている可能性がある。とくに窒素同位体は富栄養化によって脱窒反応が引き起こされ、その結果、自然状態よりも高い値を示しているものと考えられる。そのため、先史時代の食生活で淡水性魚貝類がどの程度重要だったのかを評価することは容易でない。本研究では、琵琶湖湖底に位置する滋賀県栗津第3貝塚から出土した淡水魚の骨を使って、縄文時代に人為的な攪乱を受けていない淡水魚の同位体比を検討した。さらに、縄文時代中期から後期にかけて琵琶湖沿岸にくらした人々を参考に、縄文時代晩期に伊豆沼沿岸にくらした人々の食性を検討した。また、縄文時代晩期に東北にくらした人々が様々な環境でどのように適応していたのかを調べるために、太平洋沿岸の貝塚遺跡と内陸の洞穴遺跡から出土した人骨についても分析を行ったのであわせて報告する。

2. 資料と方法

本研究では2001年に嘉倉貝塚から発掘された人骨資料2個体から、それぞれ2点の試料を採取した計4点を分析に供した。C-3区西側の墓域の501号墓塚に埋葬された熟年期後半程度の男性個体(501-a号)から上腕骨と大腿骨の一部を、これに接して出土した別個体(501-b号)から脛骨および大腿骨の一部を採取した。これらの土壌は縄文時代晩期後葉に属するものと考えられている。縄文時代晩期人骨の比較試料として、岩手県東山町に位置する熊穴洞穴から出土した人骨群と、太平洋沿岸部に立地する里浜貝塚(宮城県鳴瀬町)、子貝塚(岩手県久慈市)、中沢浜貝塚(岩手県陸前高田市)から出土した個体のデータを示す。

人骨試料は0.5~1.0gの緻密質を採取して分析試料とした。純水中で超音波洗浄した後、0.2mol/Lの水酸化ナトリウム溶液に12時間浸けて、フミン酸などの土壌有機物を除去し凍結粉砕した。この粉末試料をセルロース膜に封入し、1規定の塩酸と穏やかに反応させて、残存する有機物を抽出した。さらに、残存物を純水中で90℃に加熱することでコラーゲンのみを可溶化し、外部から滲入した土壌有機物と生体組織に由来するコラーゲンを分離した。90℃の純水10mL中で約12時間加熱することでゼ

ラチン化を実施して、遠心分離後に得られた上澄みを凍結乾燥した (Longin, 1971)。

上記の方法で抽出されたコラーゲンから約 0.25mg を分取して、炭素・窒素安定同位体比分析に供した。同位体比測定には元素分析計・高精度安定同位体比質量分析システムを使用した。測定精度では 1 標準偏差は炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$) は 0.1% 以下、窒素同位体比 ($\delta^{15}\text{N}$) は 0.3% 以下である。元素分析計では同時に炭素と窒素の含有量を測定しており、炭素と窒素の含有量が生体のコラーゲンと大きくずれていないか、コラーゲンの保存状態を検討する。

ここで測定される同位体比は、次のように定義されるデルタ値という単位で表記される。これらの数字は標準物質の同位体比からのズレを千分率で表記したものである。炭素では標準物質にペレムナイト化石 (PDB) が用いられ、窒素では大気中 N_2 (AIR) の $^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$ 比が基準となっている。

$$\delta^{13}\text{C} = \left[\frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{sample}}}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{PDB}}} - 1 \right] \times 1000 (\text{‰})$$
$$\delta^{15}\text{N} = \left[\frac{(^{15}\text{N}/^{14}\text{N})_{\text{sample}}}{(^{15}\text{N}/^{14}\text{N})_{\text{AIR}}} - 1 \right] \times 1000 (\text{‰})$$

つづいて、抽出されたコラーゲンを 2.5mg 秤量し、真空にした二重石英ガラス封管内で 850°C に加熱し、二酸化炭素を得た。この真空ラインにて液体窒素およびドライアイスのトラップを用いて純粋な二酸化炭素に精製した後、水素と鉄粉触媒を入れた石英ガラス製反応容器に封入し、650°C でグラファイトへと還元した (Kitagawa et al. 1993)。上記の方法で作製したグラファイト試料をアルミニウム製サンプルホルダーに充填し、国立環境研究所加速器分析施設 (NIESTERRA) の AMS 施設を用いて ^{13}C 濃度比を計測した。約 10 分間の計測を 4 回繰り返して、計数に伴う統計誤差とともに測定の繰返し精度を誤差として計算している (Tanaka et al. 2000)。米国標準局 (NIST) 発行のシュウ酸 (RM-4990C) を同時に測定し、補正計算の標準試料として使用した。同時に国際原子力機関 (IAEA) 発行の標準物質 IAEA-C6 を同時に測定して測定の精度および確度を評価した。

3. 放射性炭素年代測定

表 1 に嘉倉貝塚の人骨試料 2 個体から採取した 4 試料の分析結果を示す。kakura-1 については 1 分量のコラーゲンが残存していなかったため、放射性炭素の測定は行わなかった。試料と同時に測定した IAEA-C6 は 15061pMC (%現代炭素) という保証値にたいして、15006 ± 071pMC という結果が得られており、測定は十分に高精度に行われている。しかし、同一個体から得られた試料 kakura-3 と kakura-4 で 200 年以上の差がでており、これは測定による誤差では説明できない。

コラーゲンの保存状態を示す C/N 比を見ると、kakura-2 と kakura-3 が生体のコラーゲンで示される値 (2.9-3.6; DeNiro, 1985) と一致するが、kakura-4 では 4.24 という異常な値を示している。この試料は他の 2 点よりも小さな年代値を示していることから、植物などに由来する後世の有機物が混入していた可能性が考えられる。年代測定を行わなかった kakura-1 でも C/N 比が 3.85 と大きいため、こ

の2試料の分析結果は食性復元の議論からも除外した。kakura-2とkakura-3を比較すると両者の年代値はおおよそ2450 BPで非常によく一致しており、ほぼ同時期に埋葬されたと考えられる。おおよそ2450 BPという年代は、従来考えられてきた東北地方の縄文時代晩期の放射性炭素年代(3250~2250 BP; キーリ・武藤, 1982)から、晩期後葉という考古学的推定年代と矛盾しない。人骨試料の場合、食物によっては海産物のように放射性炭素年代が攪乱されている場合があるが(Yoneda et al., 2001)、嘉倉貝塚の場合はその影響は小さかったものと考えられる。

4. 同位体食性分析

図1に日本で得られた主要な食用動植物の炭素・窒素同位体比の分布と、琵琶湖で採取された淡水魚の同位体比を示す。現生の淡水魚では窒素同位体比が非常に高いことが明らかである(Yamada et al., 1998)。一方、粟津第3貝塚から得られたナマズ、ギギ、フナの試料では、窒素同位体比が現生のものよりも低く、炭素同位体比については海生魚類よりも低いことが示された。また、肉食性のナマズやギギが雑食性のフナよりも窒素同位体比が高く、食物連鎖で上位に位置していることが復元された。

現代の淡水魚における窒素同位体比が非常に高いのは、琵琶湖へと周辺から流れこむ生活廃水によって富栄養化が進んだことによって引き起こされたと考えられる。し尿や生活廃水に含まれる窒素やリンは藻類の異常繁殖をもたらすが、多くは動物プランクトンなどに利用されることなくバクテリアによって分解される。そのときに酸素が大量に消費されるため、酸素が少ない状態になってしまう。還元的状態では、硝酸還元バクテリアが硝酸イオンを取り込み、最終的に窒素を排出する脱窒がおこるが、その時に同位体比の小さい窒素を排出するため、生態系に循環する硝酸イオンの窒素は非常に高い同位体比となることが知られている。したがって、汚染がすすんだ現代の湖沼環境では淡水魚の同位体比は大きく攪乱されており、過去の人々の食生活を復元するのにデータを用いることは難しいと考えられてきた。今回の結果でも、淡水性魚貝類については考古遺物などから自然の状態のデータを復元する必要があることが明らかになった。

縄文時代中期の滋賀県粟津第3貝塚から出土した魚骨試料をもとに、人為的な攪乱をうけていない淡水魚の同位体比を復元した(図1)。その結果をふまえて、他の代表的な食料資源と嘉倉貝塚の縄文時代人の分析結果を比較した(図2)。人骨試料のデータは、食物中のタンパク質からコラーゲンがつくられるときに、同位体が一定の割合で変化するため、その分を補正した値を図示している。あわせて、粟津第3貝塚の人骨試料と東北地方の内陸洞穴遺跡(岩手県熊洞穴)と沿岸貝塚遺跡(宮城県甲浜貝塚・岩手県二子貝塚・岩手県中沢浜貝塚)にくらした縄文時代晩期のひとつの分析結果を比較のために示している(片山・米田, 1997; 米田, 2001)。

コラーゲンに記録された炭素・窒素同位体比から過去の人々の食性を復元すると、嘉倉貝塚における食生活は同じ縄文時代後期に近隣にくらした集団よりも、地域も時期もことなる粟津第3貝塚のものと同様であると推定された。粟津貝塚は琵琶湖の湖底に位置する湖沼沿岸の淡水性貝塚であり、湖沼を重要な食料源とする食生活が嘉倉貝塚と共通していたと考えられる。粟津貝塚の分析結果は、淡水魚のデータで示された範囲に分布しており、縄文時代晩期の嘉倉貝塚集団が湖沼から多くのタン

パク質を得ていたことを示唆している。

一方で、太平洋沿岸貝塚の縄文時代晩期集団は海生魚類を中心としていたことが示される。集団内で比較的大きな変異が認められ、それらが海生魚類とC₃植物をむすぶ直線上に分布することから、彼らのタンパク質源としては海産物が重要であり、同時に陸上のC₃植物も利用した食生活が想定される。また、岩手県熊穴洞穴から発掘された縄文時代晩期の集団も、嘉倉貝塚人とは少々異なる食性をもっていたようである。熊穴洞穴では、比較的窒素同位体比が低い値を示しており、草食動物に近い同位体比である。しかし、草食動物を中心とした食生活としては、若干炭素同位体比が高く、淡水魚よりも栄養段階の低い湖沼生物が主要なタンパク質源であった可能性がある。実際に、熊穴洞穴からは多くのカワシンジュガイの貝殻が出土しており、彼らは淡水性の貝類を主要なタンパク質源としたのかもしれない。人為的な攪乱をうけていない淡水貝類の同位体比については現状では十分なデータは得られていないが、淡水魚のデータから推定すると、熊穴洞穴のひとびとが淡水貝類を主要なタンパク質源として利用していても矛盾しない。同時期に東北地方の内陸に適應した人々であっても、湖沼沿岸にすんだ人々と山間の洞穴にすんだ人々では、食生活が明らかに違っていたことが示された。

5. 結語

嘉倉貝塚から出土した人骨試料を対象に、残存するタンパク質コラーゲンを抽出して、放射性炭素年代測定と炭素・窒素安定同位体比にもとづく食性の推定を行った。放射性炭素年代は、501a 号人骨で2454 BP、501b 号人骨で2432 BPを示しており、縄文時代晩期後葉という考古学的な推定と一致する結果が得られた。両者はほぼ同時期に埋葬されたようである。

一方、安定同位体比の分析から、嘉倉貝塚の縄文時代人は縄文時代中期の粟津貝塚の人々とよく似た食生活をおくっていた可能性が示唆された。粟津貝塚は琵琶湖の湖岸に立地しており、周辺の植生は嘉倉遺跡とは大きく異なると考えられる。しかしながら、湖沼周辺という環境条件が両遺跡での生業活動の特徴づけるものだったようだ。宮城県には縄文後期の青島貝塚など内陸に淡水性貝塚遺跡が存在し、湖沼沿岸環境に適應した縄文文化が存在したのと思われる。一方で、嘉倉貝塚と同時期とみられる太平洋岸の貝塚や山間部の集団はそれぞれ海産物や淡水貝類などを利用しており、周辺環境に適應した特長のある食生活をおくっていたと推定される。逆に今回のデータからは、立地条件の異なる遺跡を季節的に移動して利用したり、保存可能な食料資源が大規模に流通したとは考えにくい。縄文時代の東西差については、サケ・マスなどが利用できるかどうか、人口支持力の差となったとの指摘があるが（山内, 1964）、今回の分析結果では地域差よりも周辺環境の相違によって食生活が異なることが示唆された。まだ、限られた遺跡に関するデータしか出ていないが、今後さらにいろいろな環境に適應した縄文時代集団を分析することで、彼らの暮らし振りがより具体的に復元できるようになると期待される。

謝辞

人骨試料採取は、東北大学医学部百々幸雄教授、瀧川渉助手のご協力を得て実施した。また、粟津

貝塚の魚骨試料の分析には、滋賀県文化財保護協会の瀬口眞司氏より便宜を賜った。記して謝意を表す。本研究の分析では文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(B)2)課題番号14340271)の一部を使用した。

引用文献

- DeNiro, M. J. (1985). Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction. *Nature* 317, 806-809.
- 片山一道・米田穰 (1997). 粟津湖底遺跡で出土した縄文中期の人骨。「琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告1 粟津湖底遺跡第3貝塚(粟津湖底遺跡I)」pp.406-413 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会.
- Longin, R. (1971). New method of collagen extraction for radiocarbon dating. *Nature* 230, 241-242.
- Tanaka, A., M. Yoneda, M. Uchida, T. Uehiro, Y. Shibata, and M. Morita (2000). Recent advances in ^{14}C measurement at NIES-TERRA. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B* 172, 107-111.
- Yamada, Y., T. Ueda, T. Koitabashi, and E. Wada (1998). Horizontal and vertical isotopic model of Lake Biwa ecology. *Japanese Journal of Limnology* 59, 409-427.
- 山内清男 (1964) 日本先史文化概説 日本原始美術1縄文式土器. 平凡社.
- 米田穰 (2001). 里浜貝塚出土人骨試料の炭素・窒素安定同位体比に基づく食性復元と放射性炭素年代測定。「鳴瀬町文化財調査報告書第6集 里浜貝塚 平成11年度発掘調査概報」(鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文文化村歴史資料館編) pp.55-62 奥松島縄文文化村歴史資料館.
- Yoneda, M., A. Tanaka, Y. Shibata, and M. Morita, K. Uzawa, M. Hirota, M. Uchida, (2002). Radiocarbon marine reservoir effect in human remains from the Kitakogane site, Hokkaido, Japan. *Journal of Archaeological Science* 29(5), 529-536.

表1. 嘉倉貝塚出土人骨における同位体分析および元素分析の結果

資料番号	土壌	部位	C(%)	N(%)	C/N	$\delta^{13}\text{C}(‰)$	$\delta^{15}\text{N}(‰)$	^{14}C 年代(BP)
kakura-1	SK501-a	右上腕骨	17.2	5.2	3.85	- 21.3	10.0	ND
kakura-2	SK501-a	左上腕骨	32.3	11.6	3.25	- 19.5	10.1	2454 ± 45
kakura-3	SK501-b	左 脛 骨	36.4	12.4	3.43	- 19.5	9.6	2432 ± 85
kakura-4	SK501-b	左大腿骨	29.0	8.0	4.24	- 19.8	11.5	2228 ± 45

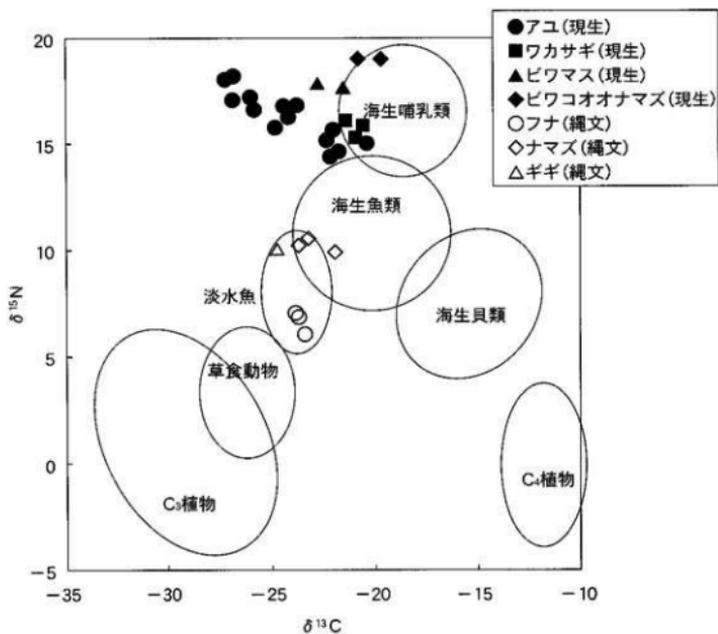


図1 現代と縄文時代の琵琶湖産淡水魚における炭素・窒素同位体比の比較

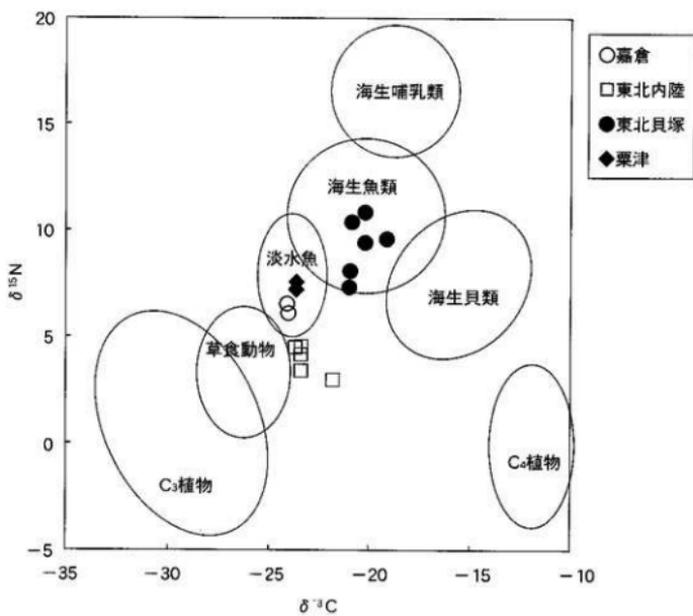


図2 コラーゲンの炭素・窒素同位体比から推定された嘉倉貝塚人骨などのタンパク質源

築館町嘉倉貝塚出土人骨について

東北大学大学院医学系研究科人体構造学講座

瀧川 渉・佐伯史子・百々幸雄

1. はじめに

宮城県築館町嘉倉貝塚の2001年度発掘調査において、C-3区から縄文時代晩期後葉に相当すると思われる土壌墓群が検出された。そのうち501号土壌墓では北側に頭部を向けた屈位姿勢の人骨が1体確認され(SK-501a号)、さらにその傍らからは別個体の人骨の下肢が出土した(SK-501b号)。本稿はそれらの人骨に関する形態人類学・解剖学的所見である。

2 SK-501a号

【全身の保存状況と遺存部位】

頭蓋のほぼ全体が遺存するものの、全身の保存状況はかなり不良である。顔面頭蓋では特に眼窩下縁から上顎にかけての部分が失われている。脳頭蓋は頭頂骨や後頭骨が断片的に欠損し縫合の観察がいくらか困難であるものの、全体的な接合は可能であった。

骨幹では頸椎より下位の椎骨は残っておらず、骨盤は左寛骨の大坐骨切痕周辺部のみが見受けられる。上肢では、現場の出土状況によって上腕骨と橈骨、尺骨の存在をかわらうじて確認できた程度で、断片化が著しい。下肢では、左右大腿骨の近位周辺部、左右脛骨の遠位周辺部が遺存する他、左右腓骨および踵骨の断片が認められる。

本個体の歯式は次の通りである。歯冠計測は破損・咬耗が激しいため実施していない。

3-4		3		※		3									
□	□	□	P2	□	C?	□	△	△	/	C	□	□	□	□	□
□	□	□	P2	□	C?	/	/	11?	12?	△	■	P2	□	□	□
2		3				L ₃ J						3			

□：歯槽閉鎖 △：歯槽開放 ■：歯槽閉鎖の途中 /：不明

※：抜歯の可能性がある歯槽閉鎖 二重横線は歯槽が残存している部分

各歯種の上に記された数字はBrocaの定義による咬耗度を示す。

0：まったく咬耗が見られない。

1：エナメル質に咬耗が認められるが、咬頭の形状は明確。

2：象牙質が所々に露出している。

3：咬合面においてエナメル質が全体に磨耗し、象牙質が全面に露出する。

4：歯根近くまで磨耗が進行する。

【年齢推定】

上顎・下顎の歯槽において、生前にかなりの数の歯が脱落していること、遺存する限りの歯の咬耗が3度以上に達しているものが見られること、頭蓋で確認できる限りの縫合(左ラムダ縫合)が外板

において一部閉塞していることから、熟年期後半程度と推定される。

【性別判定】

頭蓋における乳様突起のサイズが大きくほぼ鉛直方向に突出すること、眉間が隆起すること、外後頭隆起が垂下し後頭部周辺の筋付着面が発達することから、男性と判断される。なお、左寛骨の大坐骨切痕周辺部が残存するものの、切痕の角度を観察するには遺存状況が悪く、性別判定には利用できなかった。

【各部の特徴】

A. 頭蓋 (写真1)

脳頭蓋の上面視は類卵円形で、頭蓋長幅指数では中頭に該当する。後面視は砲弾形に近いが、頭頂部の矢状稜は目立って突出している訳ではない。側頭骨乳突部が外側にやや張り出す。乳様突起は母指大で大きく鉛直方向に突出し、男性的である。後頭骨の外後頭隆起は垂下し、上項線が明瞭に走行する。また、外後頭隆起から大後頭孔に向かって、外後頭嵯が形成されている。脳頭蓋における三主縫合の大半は遺存状況が悪く、外板ではわずかに矢状縫合と左ラムダ縫合の一部が観察できる程度である。

顔面部では、眼窩下縁から上顎にかけての部分が失われており、特に左側は復元不能であった。そのため、眼窩の明確な形状を確認することはできないが、眉弓には若干の隆起が見られる。鼻根部にはわずかながら陥凹が認められるものの、鼻骨の下半部は欠損しており、その形状を明らかにし得ない。左半部を欠くため顔面の幅は計測不能だが、遺存する限りの右半部から概観すると、低顔の印象が強い。

上顎・下顎とも、多くの歯が生前に脱落しており、歯槽が閉鎖している。切歯および臼歯にも歯槽閉鎖が認められるものの、木彫体が高齢なことから考え合わせると、風習的抜歯が施されていたか否かは判断が困難である。ただし、右上顎第二切歯における歯槽閉鎖は、その形状から見る限り、風習的抜歯による可能性も否定できない。なお、下顎は多くの歯が脱落したことにより、骨体部が退縮しつつある。

B. 四肢骨

上肢はいずれも保存状況が悪くその特徴を明らかにしにくい。上腕骨骨体部の扁平性は強い印象がある。下肢では、まず大腿骨では左右とも近位骨体部が中心に残され、上部最大径右 31 mm、左 31.5 mm、最小径右 29 mm、左 27.5 mm で、上部断面示数右 93.5、左 87.3 でいずれも扁平性は弱い。また、殿筋粗面にあたる部分が隆起し、稜線状を呈する。骨体中央部は残されていないため、その断面形態は不明である。脛骨は左右とも遠位付近が残され、計測値として示すことはできないが扁平性が強いようである。

【病変】 (写真2)

第2頸椎(軸椎)から第5頸椎にかけて、椎間関節と椎弓板が上下の椎骨間で融合する状況が観察された。ただし、融合は左右対称ではなく、右では第2から第4頸椎にかけて、左では第4から第5頸椎の間に限定されている。一方、各頸椎の椎体辺縁には嚙状の骨棘が少なからず確認されるが、これ

らは加齢に伴う変形性関節炎と判断される。以上の所見から、本個体は生前に頸部に相当な運動障害を蒙っていたものと推察される。

3. SK-501b号

301号土壙墓において、SK-501a号の腰部西側に認められた人骨である。左右の大腿骨（左右とも骨体部のみ）と脛骨（右は近位周辺、左は遠位周辺の骨体部）が確認されているが、保存状況はやや不良である。重複する部位がなく、しかも左右が揃って並べられていることから、同一個体の骨の可能性が高い。

年齢推定は困難だが、サイズの大きさや筋付着部の発達状況から見て、恐らく成年には達しているものと考えられる。骨盤や頭蓋が遺存していないので性別判定が難しいが、大腿骨の太さや粗線の発達状況から察して、男性と推測される。

右大腿骨の骨体中央部では矢状径 30.5 mm、横径 25 mm、周長 87 mm を計測し、中央断面示数は 122.0 である。骨体後面の粗線が発達し、いわゆる柱状大腿骨の様相を呈する。骨体上部では最大径 29.5 mm、最小径 24 mm、断面示数 81.4 となり、扁平性は弱い。

右脛骨の骨体中央部では最大矢状径 33 mm、横径 20 mm、中央断面示数 60.1 で扁平脛骨と見なされる。後面のヒラメ筋線が隆起し、第4稜が鉛直方向に走行する。

4. まとめ

- 1) SK-501a号とSK-501b号はそれぞれ別個体であることが確認され、SK-501a号は熟年期後半程度の男性の可能性が高く、SK-501b号は成年男性と推測される。
- 2) SK-501a号は、頭蓋においては低顔の印象が強く鼻根部が陥凹すること、後頭部の外後頭隆起が垂下し明瞭な上項線が見られること、四肢骨では大腿骨の上部扁平性が弱いのに対し脛骨が扁平であることなどから、縄文人の様相が濃厚である。SK-501b号でも、大腿骨や脛骨の断面形態や筋付着部の発達状況などで、縄文人の特徴が認められる。
- 3) SK-501a号の歯槽からは多数の歯が生前に脱落しており、切歯や臼歯においても歯槽閉鎖が一部で認められる。風習的抜歯が施されていたかどうかは判断が難しいが、右上顎第2切歯の歯槽閉鎖は、風習的抜歯による可能性を否定し得ない。
- 4) SK-501a号の頸椎では、第2～第5頸椎の椎弓において骨性融合が見られることから、生前に頸部を自由に動かすことができなかったものと判断される。

表1. 嘉倉貝塚SK-501a号人骨の頭蓋計測値

Martin No.	計測項目	(mm)
【頭蓋】		
1	脳頭蓋最大長	184
5	頭蓋底長	141
8	脳頭蓋最大幅	(145)
9	最小前頭幅	102
12	最大後頭幅	107
17	バジオン・プレグマ高	(144)
40	顔長	(102)
48	上顔高	(65)
【下顎骨】		
66	下顎角幅	141
70	下顎枝高	(62)
71	下顎枝幅	(31)
Index No.		
示数項目		
示数項目 (%)		
8/1	頭蓋長幅示数	(78.8)
17/1	頭蓋最高示数	(78.3)
17/8	頭蓋幅高示数	(99.3)
12/8	横頭頂後頭示数	(73.8)
40/5	顎示数	(72.3)
71/70	下顎枝示数	(50.0)

表2. 嘉倉貝塚SK-501a号人骨の頭蓋形態小変異

観察項目	r.t.	l.t.
1. 前頭縫合	(-)	(-)
2. 眼窩上神経溝	(-)	(-)
3. 眼窩上孔	(-)	(-)
4. 横後頭縫合痕跡	(+)	(+)
5. アステリオオン小骨	(-)	(-)
6. 後頭乳突骨	(-)	(-)
7. 頭管	(-)	(+)
8. 第三後頭顆	(-)	(-)
9. 前顆結節	(-)	(-)
10. 傍顆突起	(-)	(-)
11. 舌下神経管二分	(-)	(+)
12. フシケ孔	(-)	(-)
13. 卵円孔形成不全	(-)	(-)
14. ウェサリウス孔	(-)	(-)
15. 口蓋隆起	(-)	(-)
16. 外耳道骨瘤	(±)	(±)
17. 横頭骨縫合痕跡	(-)	(-)
18. 頸静脈孔二分	(-)	(-)
19. 上矢状溝溝左折	(-)	(-)
20. 副オトガイ孔	(-)	(-)
21. 顎舌骨神経溝骨橋	(-)	(-)
22. 下顎隆起	(-)	(-)

+ : 有 - : 無 / : 欠損または不明

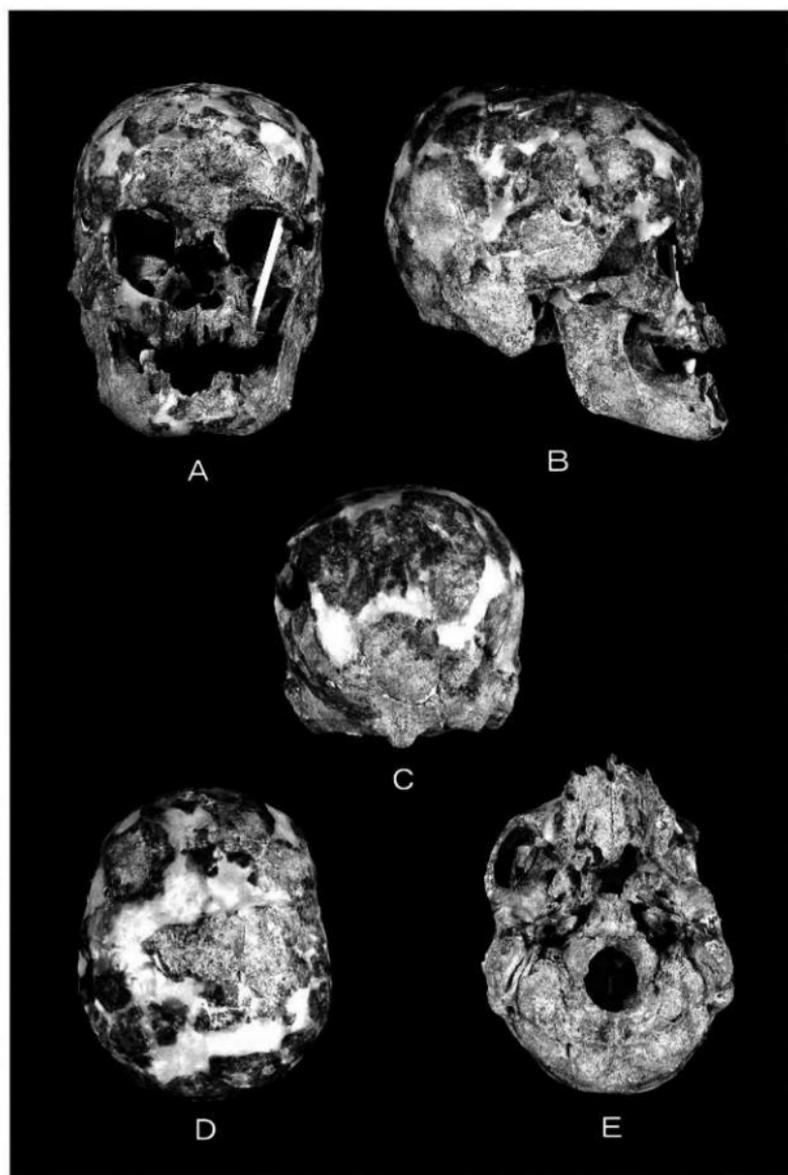


写真1 嘉倉貝塚 SK-501a 号人骨頭蓋 (A. 正面 B. 右側面 C. 後面 D. 上面 E. 下面)

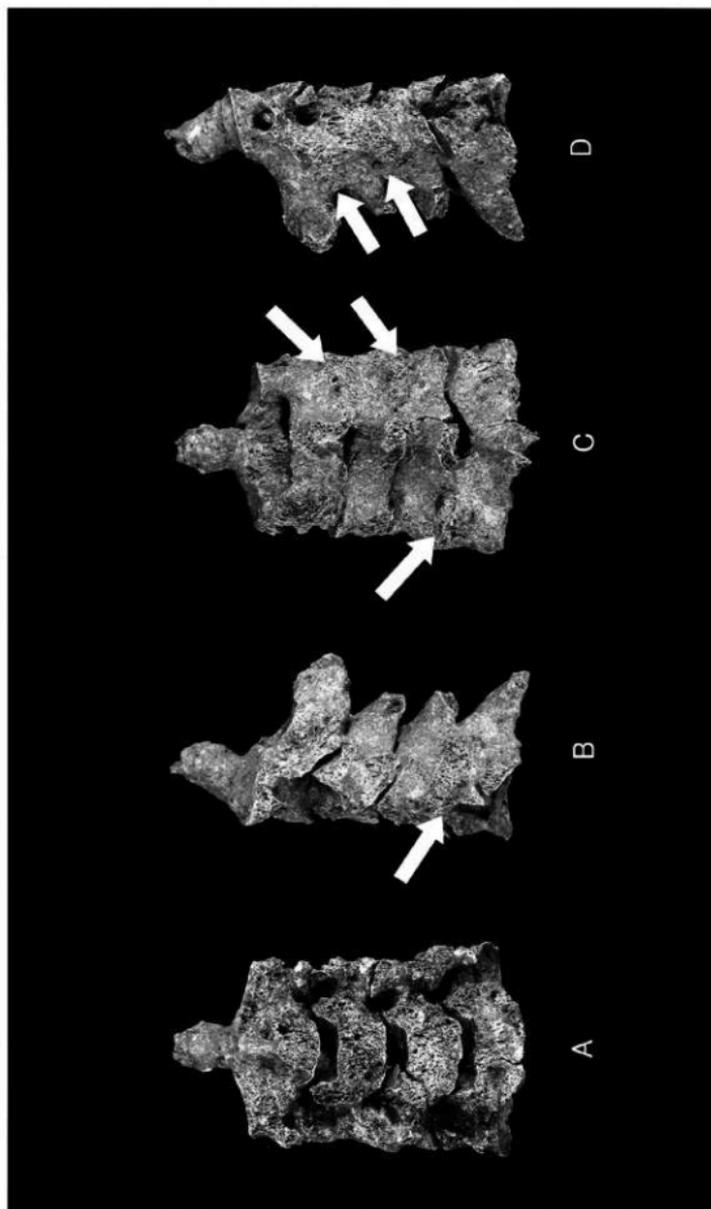


写真2 嘉倉貝塚SK-501a号人骨における第2～第5頸椎の融合 (A. 前面 B. 左側面 : 第4・5頸椎間の左椎弓板と椎間関節の融合
C. 後面 D. 右側面 : 第2・3・4頸椎間の右椎弓板と椎間関節の融合)

写 真 图 版



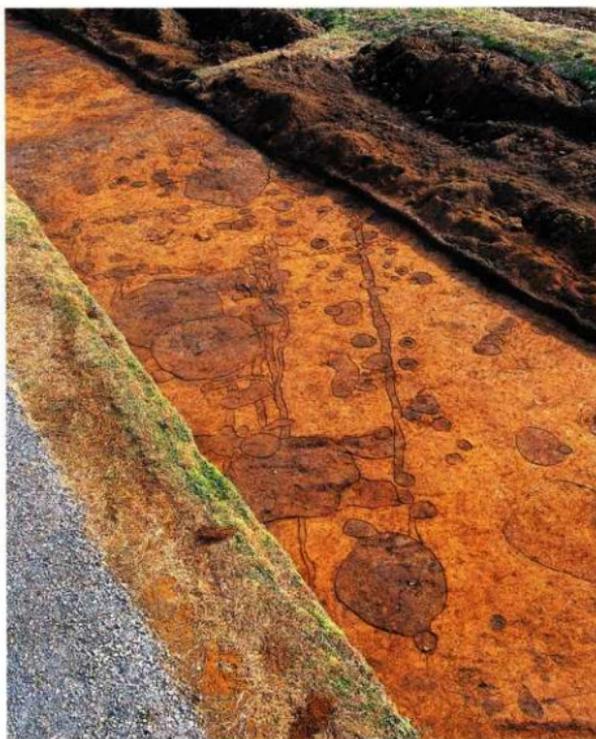
嘉倉貝塚全景（平成13年度撮影。西から）



遺跡全景（平成13年度撮影。東から）



平成13年度調査区（上が南）



A区S | 593・644・645住居跡（北西から）



B区 SX541 遺物包含層（黒い部分。上が北）

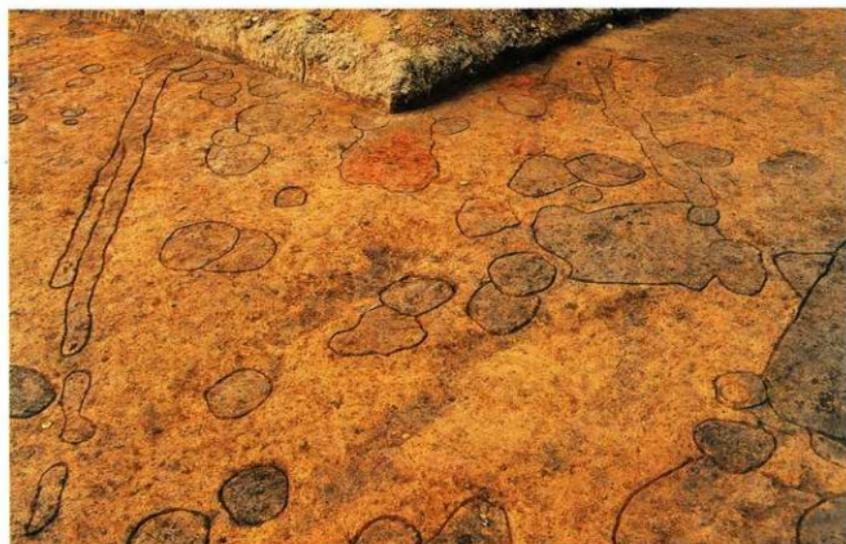


上：C区土墳墓群
(北から)

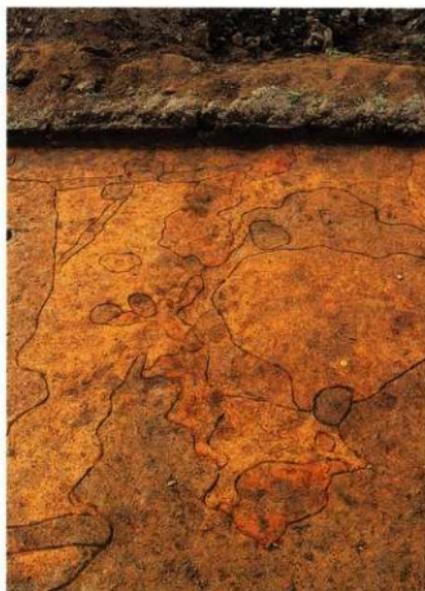
下：C区 SK501土墳墓
埋葬人骨
(上が北)



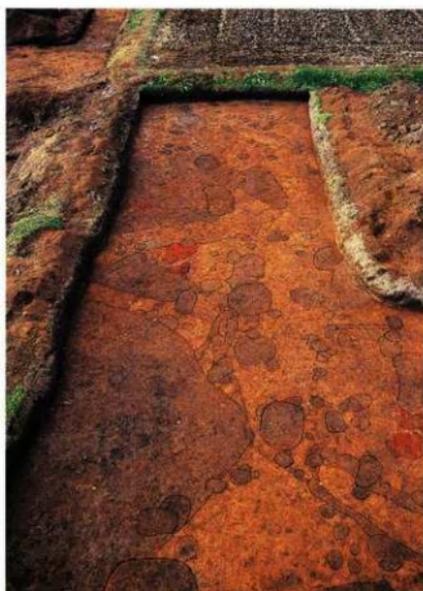
C区 S1597~599住居跡（北から）



D区 S1554住居跡（南東から）



E区 SI 583焼け面（東から）



E区 南西端 SI 584住居跡他（東から）



F区 SI 571、573A・B住居跡（南東から）



遺跡全景（平成14年度撮影。西から）



平成14年度調査区（上が北）



J区(左)・K区(右)(上が北)



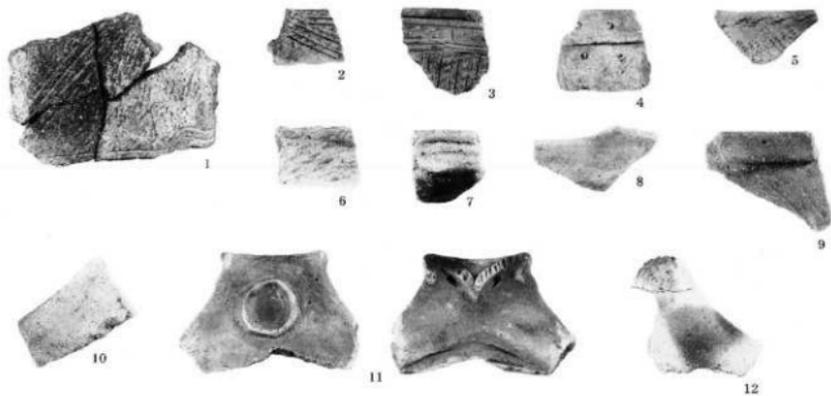
L区(上が北)



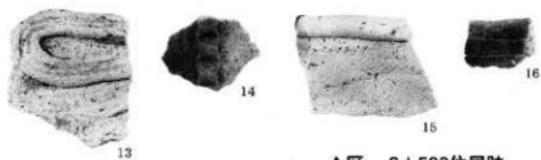
M区 (上が北)



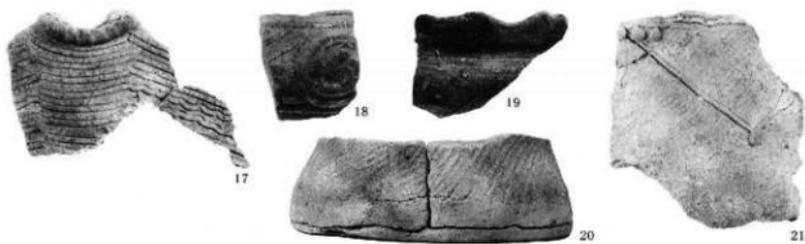
N区 (下)・O区 (上) (上が北)



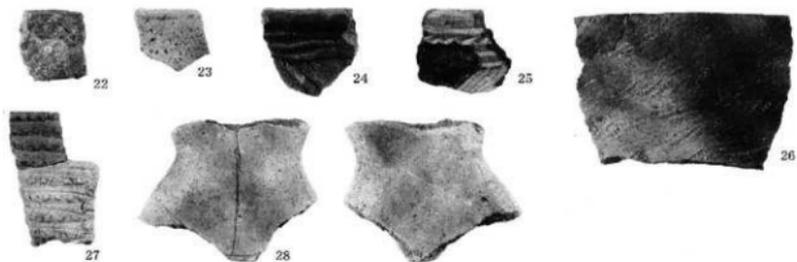
A区 S I 591住居跡



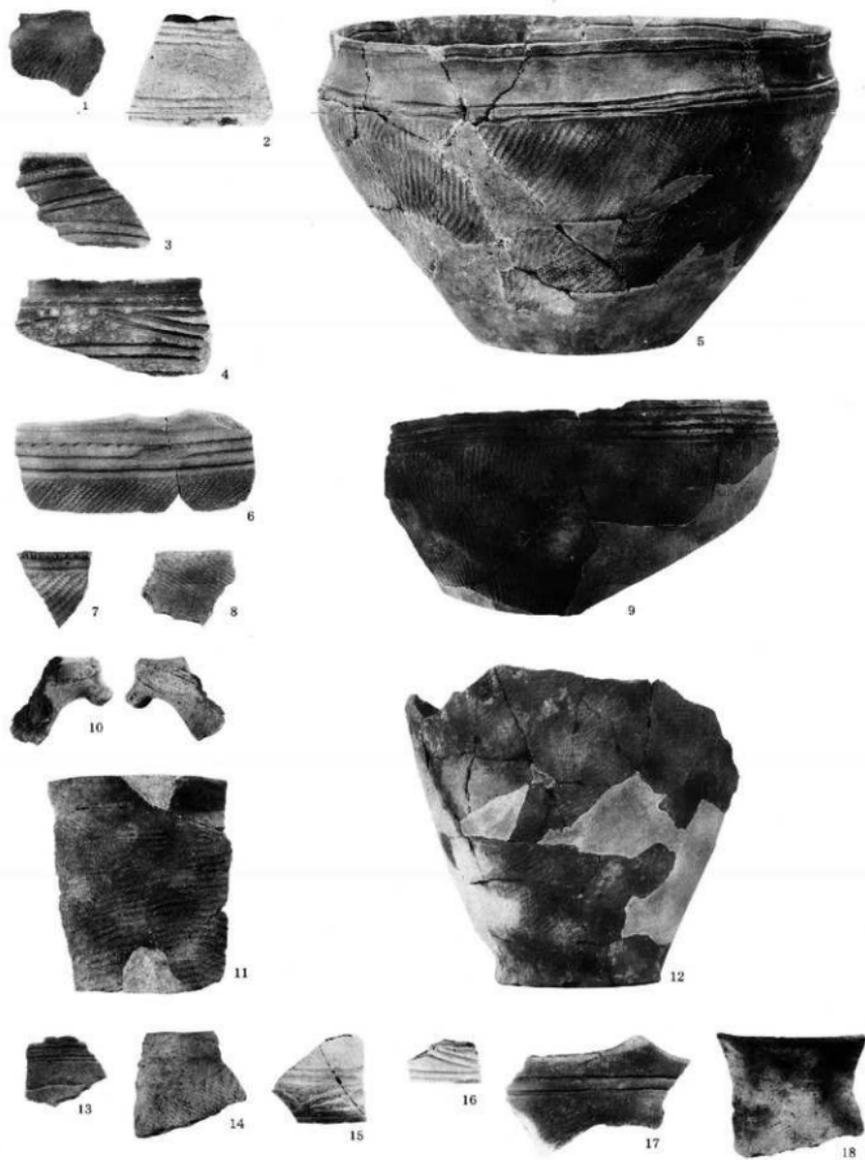
A区 S I 593住居跡



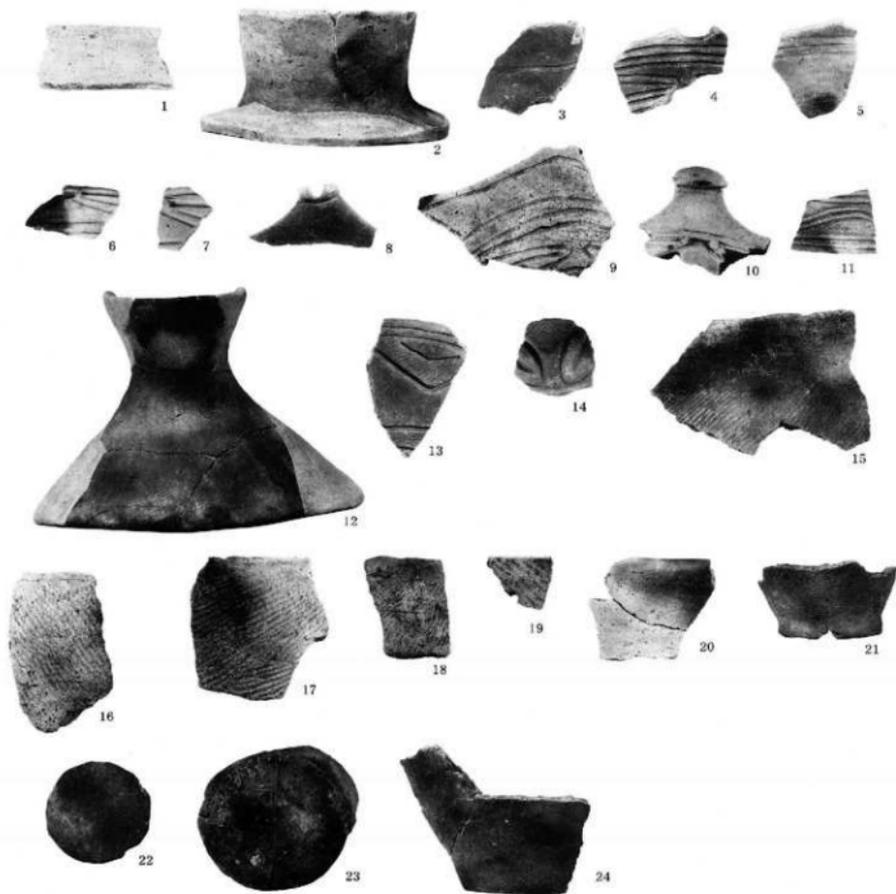
A区 S I 601~603・608、Pit



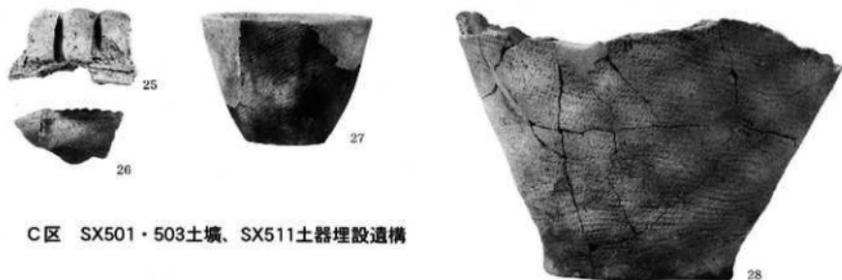
B区 S K 545・606、Pit



B区SX541遗物包含層出土遺物



B区 SX541遺物包含層



C区 SX501・503土坑、SX511土器埋設遺構

B区・C区出土土器

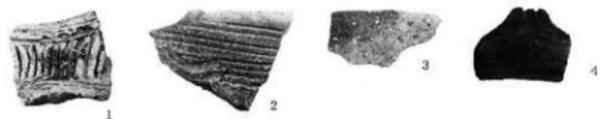


C区 S1596住居跡



C区 S1597住居跡

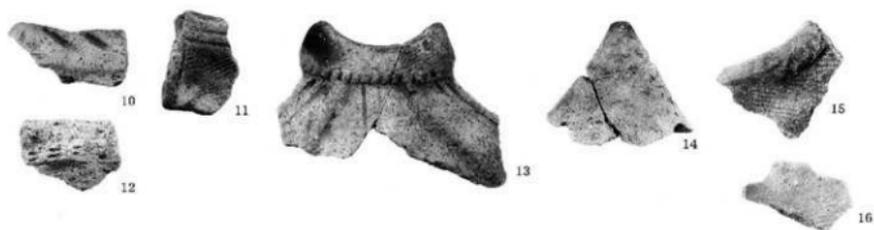
C区S1596・597住居跡出土土器



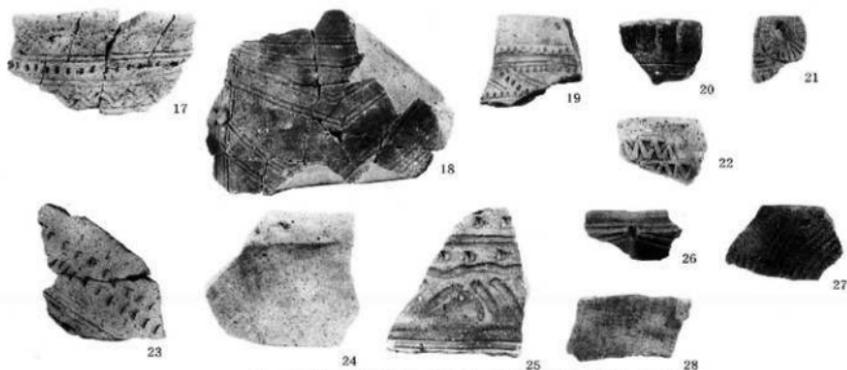
D区 出土土器



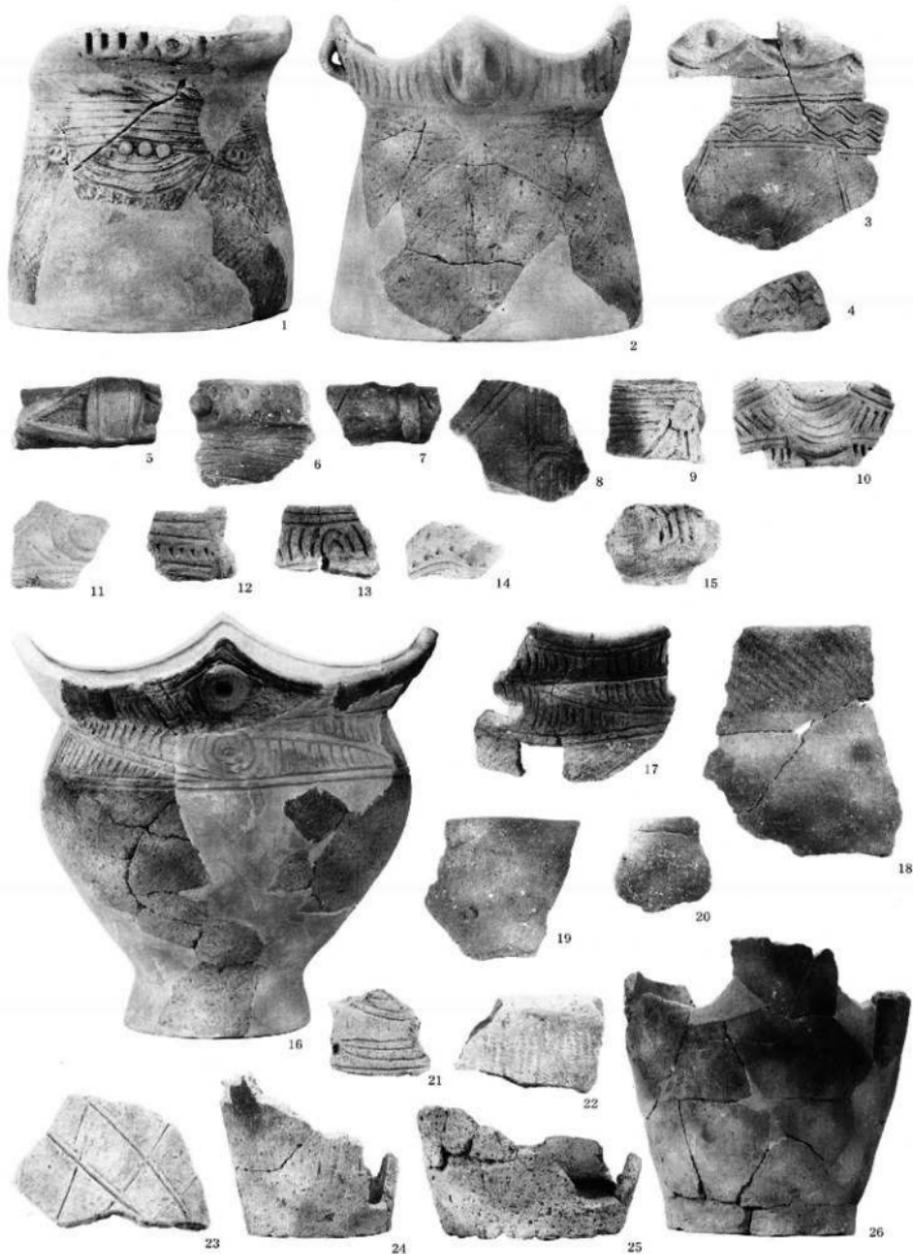
E・M区 S I 579・581 (725と同じ) 住居跡



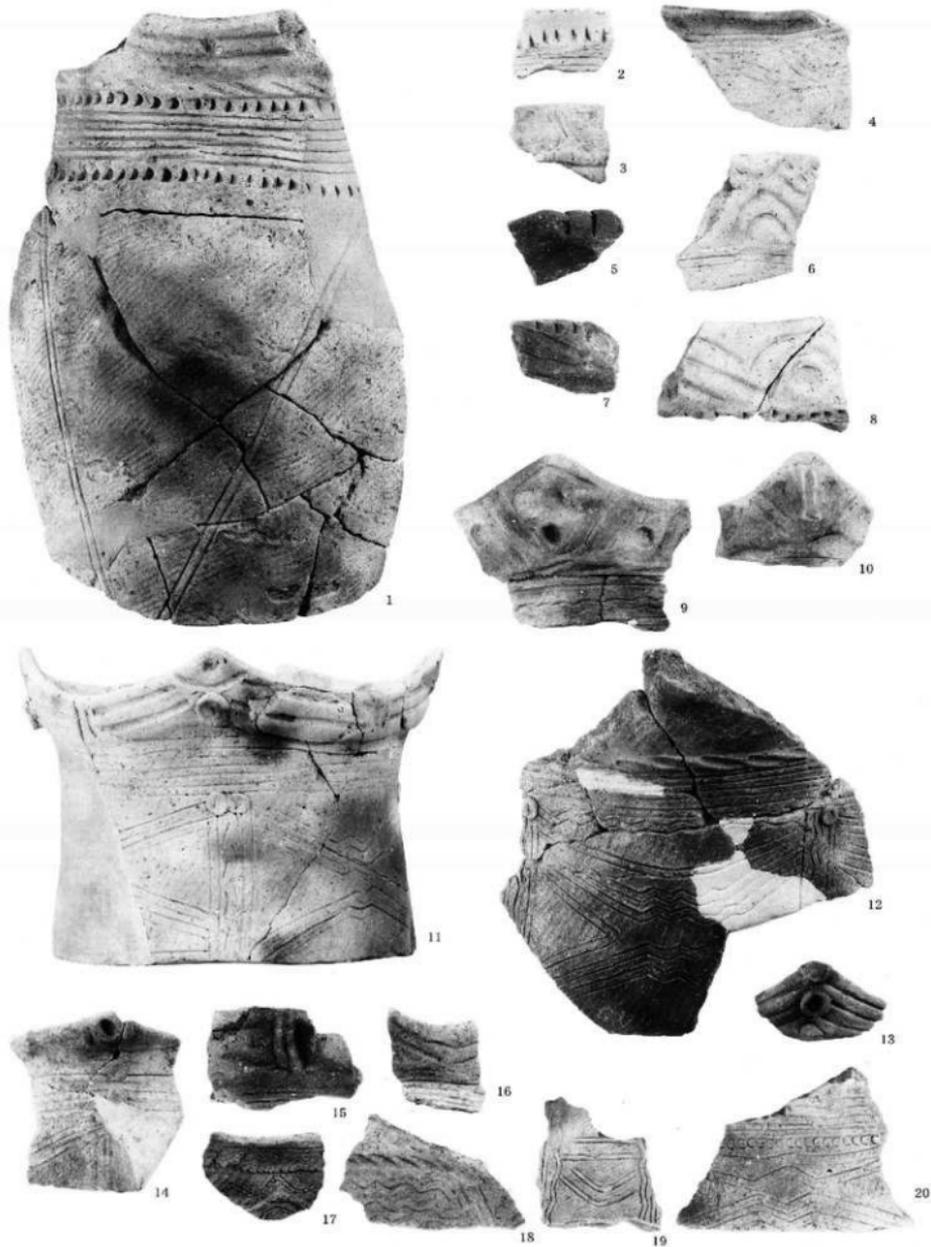
E・M区 S I 583住居跡、SX578



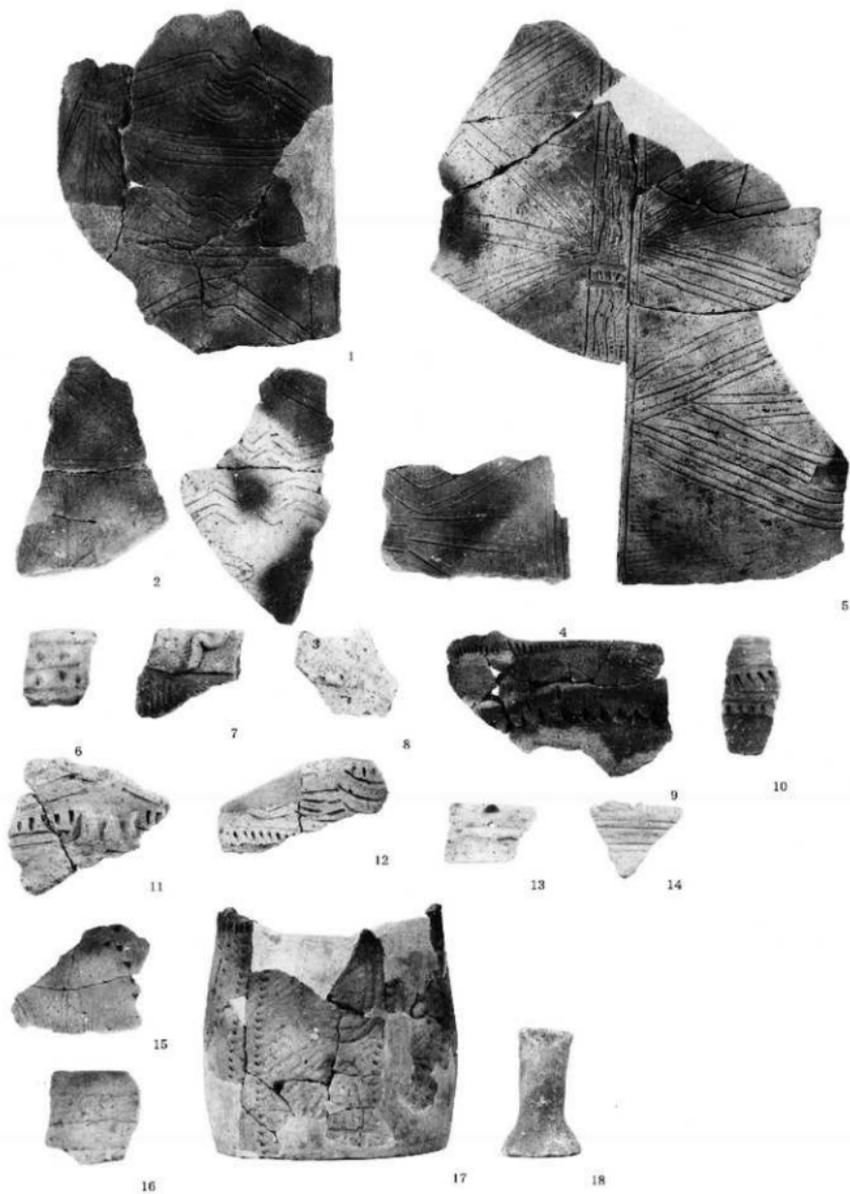
E・M区 S I 714・720A・722・732・743・744



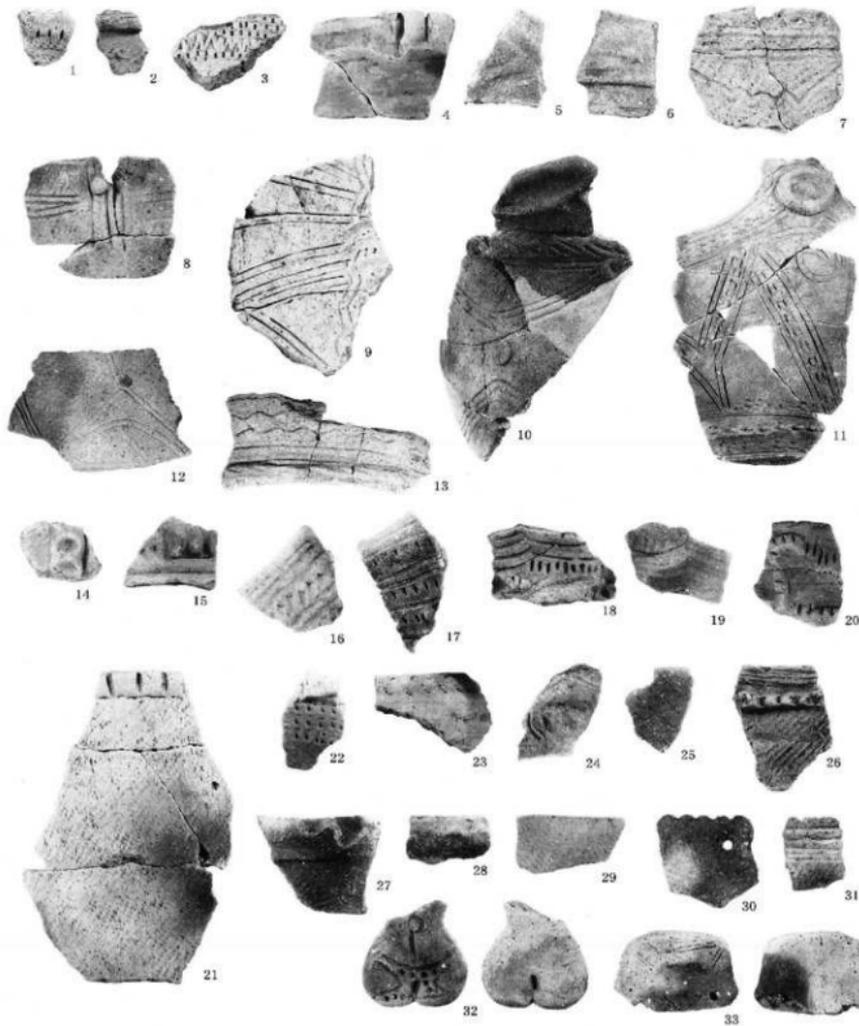
E·M区S1716住居跡出土土器



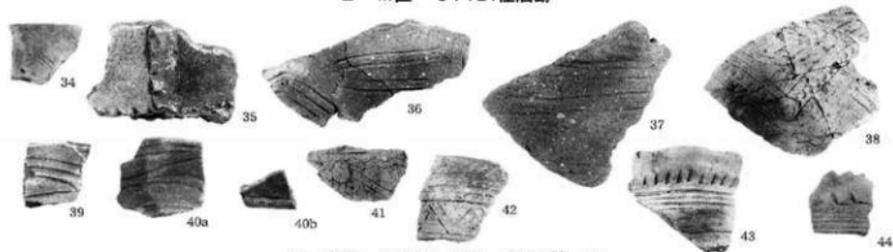
E·M区S1719住居跡出土土器(1)



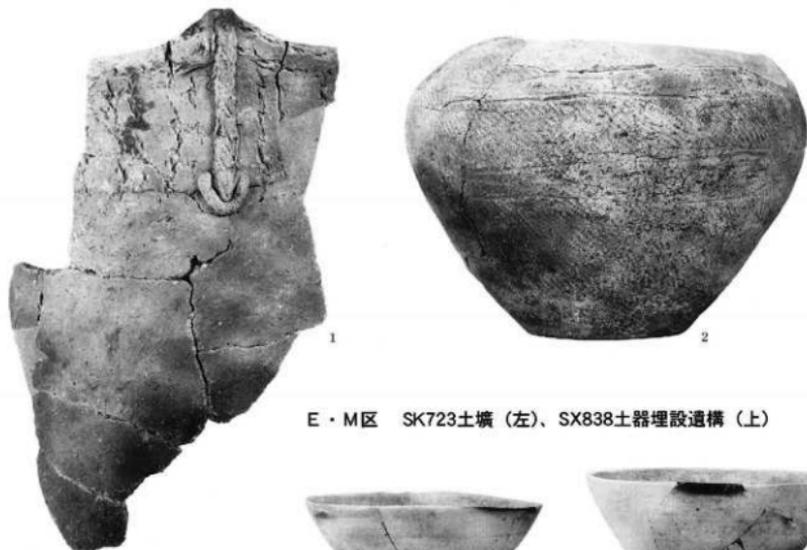
E·M区S1719住居跡出土土器(2)



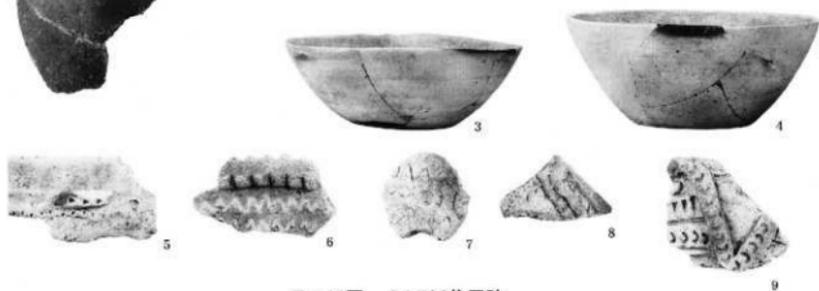
E·M区 SI721住居跡



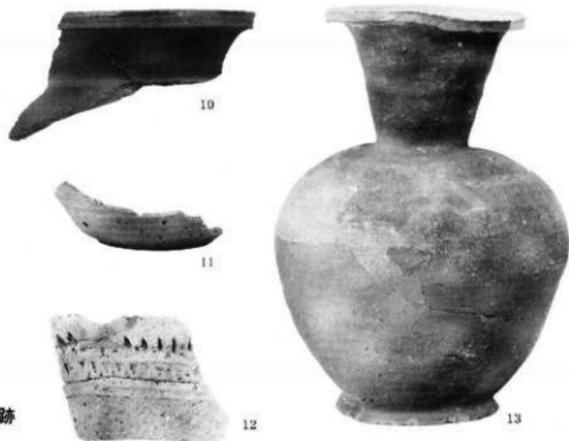
E·M区 SK728・734・735土壇、Pit
E·M区出土遺物



E·M区 SK723土壙(左)、SX838土器埋設遺構(上)



E·M区 S1736住居跡

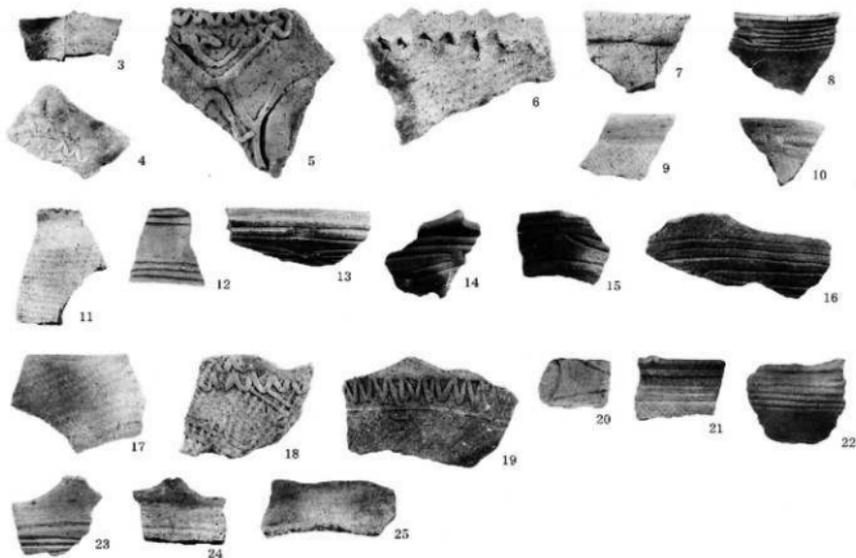


E·M区 S1740住居跡

E·M区出土土器



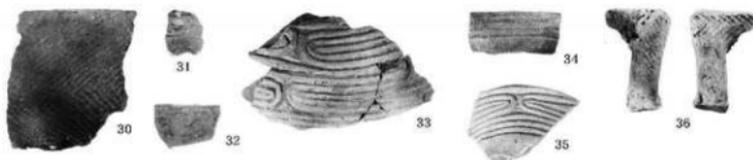
F区 出土遺物



G区 SX570再堆積層



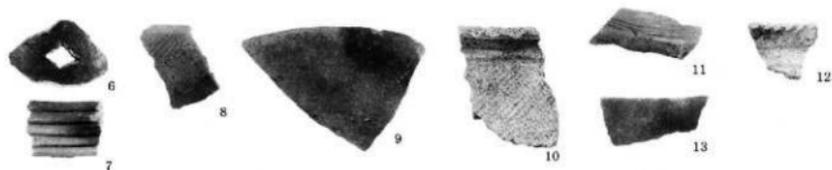
H区 出土遺物



J区 SK701・702土墳



J区 SK705土城



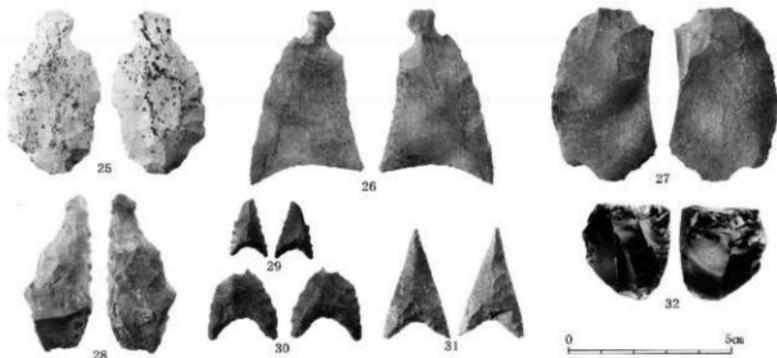
J区 SX707、Pit



K区 出土遺物



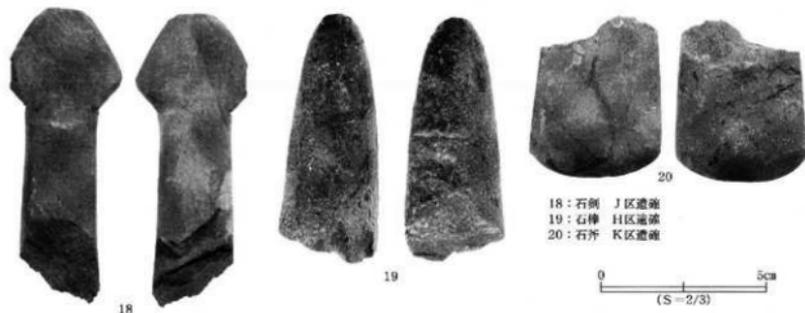
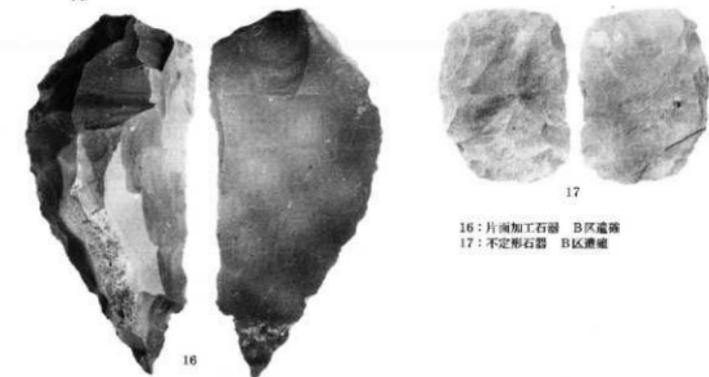
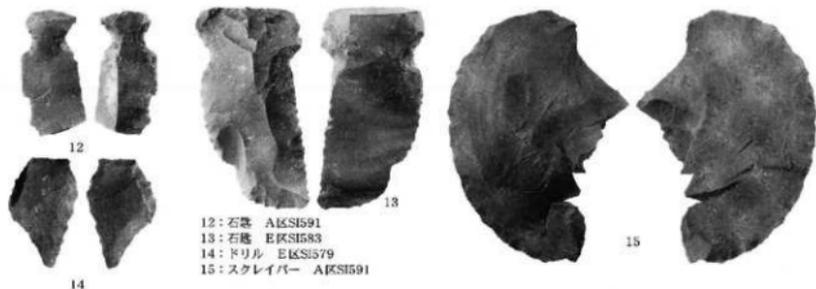
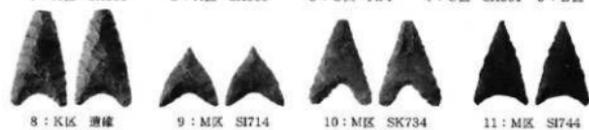
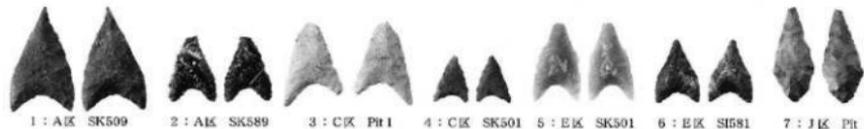
L区 出土土器

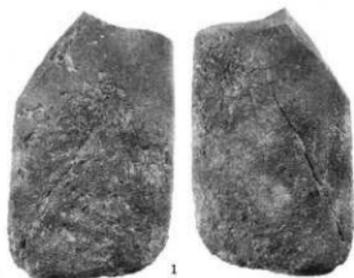


E・M区 S1721出土石器

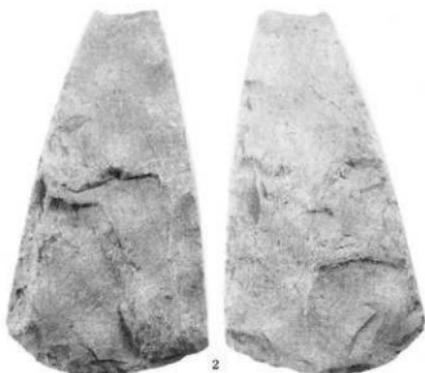
J~L区・E・M区出土遺物



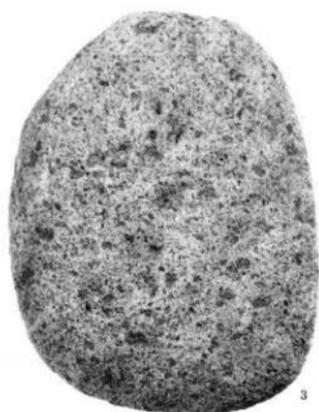




1 石斧 C区遺構
2 石斧 C区S584遺構



2



3



4

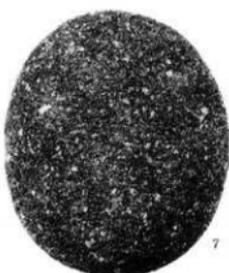


5

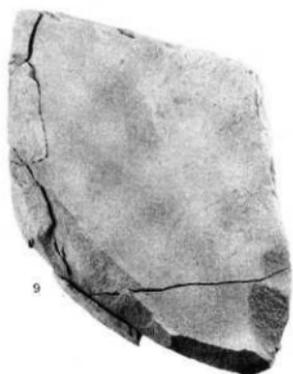
3 凹石 F区Ph1
4 磨石 F区Ph1
5 礮石 M区S1721



6

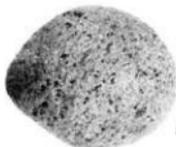


7



9

6 磨(凹)石 B区SX605
7 磨石 A区SK587
8 磨石 K区遺構
9 石皿 M区S1721



8



石製品・礮石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	かくらかいづか							
書名	嘉倉貝塚							
副書名	平成13・14年度重要遺跡範囲確認調査報告書							
巻次								
シリーズ名	築館町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第16集							
編集者	天野順陽・千葉直樹・中鉢琢也							
編集機関	築館町教育委員会生涯学習課							
所在地	〒987-2293 宮城県栗原郡築館町葉師一丁目7-1 電話0228(22)1125							
刊行年月日	平成15年(2003年)3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積 (m)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かくらかいづか 嘉倉貝塚	宮城県 栗原郡 築館町 字萩沢加合	45217	41005	38度 43分 27秒	141度 03分 58秒	20011108 ～ 20011212 20021028 ～ 20021129	13年度 1892m ² 14年度 1465m ² 合計 3357m ²	重要調査 範囲確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		特記事項		
嘉倉貝塚	集落跡	縄文時代 前期後葉～ 中期初葉		竪穴住居跡 土壇		縄文土器 (大木6・7)		多数の大型住居跡など によって構成される縄 文時代前期後葉から中 期初葉の環状集落。縄 文時代晩期後葉～弥生 時代前期前葉の墓域。
		縄文時代 後期中葉		上器埋設遺構		縄文土器 (宝ヶ峯)		
		縄文時代 晩期後葉～ 弥生時代 前期前葉		竪穴住居跡墓域。 土壇遺物包含層		縄文土器他 大洞A～砂 沢並行期		
		古代		竪穴住居跡 溝跡		土師器 須恵器 (9世紀)		
		中近世		掘立柱建物跡				

築館町文化財調査報告書 第16集

嘉倉貝塚

印刷 平成15年3月14日
発行 平成15年3月25日

発行 築館町教育委員会
〒987-2293
宮城県栗原郡築館町薬師一丁目7-1
TEL.0228-22-1125

印刷 南部屋印刷株式会社
宮城県栗原郡築館町高山一丁目7番36号

